

今日は昨日の雨の影響でもあるのか蝶が路傍に多く飛んだ、竹林中の急坂を出て草原に休んだ、此時私の前のムサエンダの樹に大きな珍しい蝶が飛んで来た、私は一行環視のうちに首尾能く捕虫網で之れを捕ることが出来、今までの不名譽を恢復し、観衆は喜んだ。



No. 150 ヘールフィンク灣に沿ふて
走る山脈 (金平)

て来た、その飛沫は室に入り私達を惱ませた。

スクオールは何時の間にか止んだ、私は小屋の裏手の川に水浴に出掛けた、乳白色の水が滔々と大きな轉石を越える急流であるのに驚いた、メナド人の兵隊達が眞裸になつて岸邊の淵に漬か

急坂を下り詰めると岩に堰れながら奔流するランシキ川の上流に出た、この流れに沿ふて下ると間もなく小屋に達した、アンギ湖道路に建てられた唯一のもの、後方に川を控えた陰鬱な場所、薄暗い不潔な室で、これが今夜の宿であつた。

私達は室を掃除させ、荷物を整理しベッドが出来る迄戸外で休みながら中食した。

室に入ると間もなく猛烈なスクオールが襲つ

つてゐた。



No. 151 歸途、坂を下る筆者、右隅は下士官のブ君
(ムルダー氏)

食後、ム君が私の傍のベッドの傍に腰を掛け何時までも話こんだ。

四月十一日 (モミ農場)

モミ農場に歸着する日で苦力達も勇み立ち出立の準備が驚くべき早さで出来上がった。

緩い坂道をズンズン下つた、今日も蝶が路傍に多く飛んでゐた。

三キロも歩いたと思ふ頃、鳥の鳴聲が餘り喧しいので私はフト上を見上げた、高さ三十米計りの樹の枝に黄極樂鳥が二十羽ばかり入り亂れて飛んでゐる、私は一行にこれを知らせた。

て翼の下にある胸毛を體と殆ど直角になる迄立て、その美を誇示しつゝ左右に運動する、すると雄鳥は一定の樹木に集合し、高い枝の上に止つ

雌鳥が何處からとも無く鳴きながら集り、互に競つてその媚態を雄鳥に示す、そこで亂舞が始まる、鳥は夢中になつて枝から枝に飛び廻る、この時下から弓矢なり或は銃砲で雄鳥を打ち落すのである。

一同立止まつて此珍らしい光景に見入つた、こんな近い場處から、この鳥の名高い「舞踏」を見ることが出来るのは稀な事で兵隊も苦力も片唾を飲んで是れを凝視した。

極樂島の舞は何時迄も續いたが一行は再び前進を續け、小川の砂地で朝食を濟ませ、ランシキの岸に出た。

川の水は昨日の豪雨で増水し奔流となつてゐた、私達は五、六人宛、横隊となつて腕を組み腰を没する急流を渡つた。川を渡つて叢林を掻き分け、ランシキのゴム園に出て事務所に着き、ヴェランダで暫く疲れた體を休めた。

私達一行はこの探検に出立の時、不安の念に驅られたが今無事にその行程を終へて歸着して見ると一つの満足感と感謝とがあつた。

私達はム君にサヨナラを告げ、ゴム園の自動車でモミに歸着、更に雨中を農場まで歩いた。

(十) 再びモミ滞在

四月十二日 (滞在)

晴天、アンギ湖採集のアルコホル漬標本をブリキ罐から取出した、何等の異状は無つた、番號札を着け、野帳に記入して新聞紙に挿みプレスにかけた、夕方漸く四個の罐を濟ませた。

四月十三日 (滞在)

朝から曇天、午前九時、私達をアンギに案内して呉れたムルダ君が農場に來た、一つは勞を撈ふ爲めに午餐に招いたのだが、旁々勞働監督官と云ふ役目を兼ねての巡視で醫官を伴ひ自転車で來着した、社宅で一同が會食した。

辭して歸る時、雨が降つて來た、洋傘を勧めたが「和蘭人には自転車」と云ひながらペダルを踏んで雨の中を歸路に就いた。なる程、和蘭の都會地では朝夕自転車で道路が埋まる位大衆が利用し、女王殿下も屢々自転車で外出せらるゝと云ふことである。

四月十四日 (滞在)

晴、後曇り、日本を出立以來一度も日本の新聞を読まなかつたが久しぶりに手にすることが出

來、私達は食べる様に讀んだ。夜は社宅の食堂で講演會があつた。田山さんと私と二人で話した。

四月十五日 (滞在)

好晴、愈々荷造りを初めた、



No. 152 宿舍にて植物標本を乾燥する
(金平)

四月十六日 (滞在)

曇、今日、K・P・Mのイムホッフ號がマヌコワリからモミに入港の豫定で私は此便船でセルイ、サルミ、ホランジャを視察する事に決め手廻品を準備し汽笛の鳴るのを待つたが遂に入港せず、そのまゝ日が暮れた。

四月十七日 (滞在)

晴天、私は早朝海邊に出てイムホッフ號が水平線上に現はれるのを待つたが遂に來なんだ。

朝の食事を済すとマヌコワリから入電、「汽船は十七日午前一時モミに寄港、乗客のみを上げ直に出港」とある。ホランジャ行は斷念せざるを得なんだ。

四月十八日 (滞在)

朝、再び入電「船は荷役が遅れたのでモミに寄港せず、直航す、A・Rは金平博士が乗船するのでモミに寄港方を船長に依頼したが無駄であつた」との意味、これで事情がわかつた。

ホランジャ行が出來ぬとなれば標本の整理と包装に専念する外は無い、終日大童となつて働いた。

私達の食事の給仕や用事をして呉れる君ちゃん(日本娘でも日本語が出來ない)が生れて間もない鼠程の有袋動物を持つて來た、手に取つて見ると灰鼠色に黒い縦縞の軟毛があり、その尾の先端に長い毛を密生してゐる。又胸の兩側にはムササビの様な翼が僅に發達し胸部に小さな袋があつた、その愛くるしい瞳が人なつこく、又よく馴れてもゐる。

私は日本に持つて歸り度いから呉れぬかと尋ねると「エ、どうぞ持つていらつしやい」と云ふ。

私はこの小動物を紙のボール箱に入れて牛乳で育てながら日本に持つて歸つた。このペットは段々運動が活潑になり洋服のポケットに入れてやると有袋類の本能でもあるのか、おとなしくしてゐた。しかし眞夏になつて一寸した不注意から死なして仕舞つた。

四月十九日 (滞在)

晴、植物採集も終り標本の出來上りも殆んど完了に近づいた爲め、歸心が募り歸朝の日取りが話題となつて來た。終日包装に時を過した。

四月二十日 (滞在)

晴、最後の荷造りをした。

農場の岩田君からニューギニヤの土人彫刻五體を贈られた、素朴な出来で珍しい参考品である。

又かねて依頼中のルリ鳥が手に入った、人語を眞似、頻りに喋べる可愛い鳥である、この鳥はニューギニヤ本土にも居るがヤツペン島産が一番よく馴れると云ふ、これも日本まで携へ歸つた。パプア語を喋り特にその笑聲の眞似が逆も上手であつたが、これ亦氣候が涼しくなつたある日のこと急死した。

四月二十一日 (滞在)

未明に起きた、一點の雲の無い空に満月が西の山に懸つてゐた。

朝食後、農場員の野球仕合があつた、頼まれるまゝに私がそのアンパイヤー、炎天下の芝生の上で競技は元氣潑濺として行はれた。

夕、私は滞在中の厚意を謝する爲め農場の若い人達を招じて會食した。

(十一) モミからマヌコワリへ

四月二十二日 (マヌコワリ)

今日も好晴、イムホッフ號は午後二時入港した、荷物を積み込み四時海岸に行く物見高い苦力達が文字通りの黒山、上陸と乗船の土人とで非常な混雑であつた。

私達は海岸に立つ農場員に別れを告げ、ボートで沖のイムホッフ號に乗つた、事務長もボーイも舊知で船にも親しみがあつた。

夕食前のひと時に船長が来て往航の際、モミに寄港の出来なんだことを辯解した。夕の食堂は寥しい客であつた、船は間もなく出帆した。

四月二十三日

キャビンに微睡後、間もなく船が停止したのに眼を覺まし窓外を見ると寂として聲無きマヌコワリにもう着いてゐた。そして空には月が輝き海には銀波が映じてゐた、再び眠り四時に起きた。

朝の港の景色は美しかった、港内には日章旗を翻した白色のヌシ丸が浮び、市街は緑の椰子の林の間から海岸にかけて色とりどりの建物を點綴し、灣を圍む丘を隔て、アルファツク山脈の高

峯が聳え、その森は朝日を受けて紫紺色に映えてゐた。

私達は手廻りの荷物を陸揚げした後上陸した、棧橋にはA・Rとムルダール夫妻が來合はせてゐた、ム君が午後、茶に招いたので快諾した。

私達は町の小高い丘の上のホテルに入った、ホテルとは云へ官營の宿泊所で、マヌコワリは蘭領ニューギニアの首府でありながらこれ以外に一軒のホテルも無い、そうして此のホテルは眺望のよい處に建てられ、簡素な飾氣のない室には純白のベッドが置かれ、清掃せられた床も爽々しかつた、ヴェランダに涼を入れると灣を一時の元に收めた、社宅で午餐會があり、宿に歸ると午後の暑さは格別酷しかつた。

三時、型の如きスクオール、私は晴れるのを待つて宿から近いム君の官舎を訪ふた、夫人と共にヴェランダで茶の饗應を受けた、雨あがりの蒸し暑さは堪え難く、歩いてやつて來た私の洋服の背中には汗が滲み出たが、主人公のム君も同様、洗ひ立ての上着を汗だくにしながらとらぬので、夫人の手前、我慢するより外無かつた。

辭して歸る私をム君は私の宿まで見送り

「是で完全に護衛を終へたんです」

と最後の挨拶を云ひ、再び自分の家に引返して行つた。

(十二) 歸航 (其の一)

四月二十四日 (ヌシ丸船中)

朝、官廳にA・R 即ち副理事官リンクス氏を訪問、旅行中の援助や旅行の許可證のことで行き違ひが出來、面倒をかけたことを謝した、A・R は豫め私達の旅程を通知して呉れるなら何でも無かつたことだと云つた。

この室の一隅に並べられた土俗品を一瞥した後、A・R の出した訪問帳に記念の署名をした後、私は隣室のム君にも敬意を表すべく最後の別れを告げに行つた。

中食は宿の主婦の料理になるライス・テーブルであつた、ニューギニア最後の食事で一同は寛いで食べた。

食後一睡、五時、ヌシ丸に乗り込んだ、興發社員、税關長、その他の人々が船まで見送つた、狭い食堂で杯を上げて健康を祝し互に別れの言葉を交してゐるうち六時出帆の汽笛が鳴つた、船が錨を捲き上げるとスクオールが一陣の烈風を伴ふて襲來し、棧橋に立て船を見送くる人達の姿が忽ち隠れ、マヌコワリの市街も間もなく雨と夕闇に消えた。

ヌシ丸は二百四十噸のスクーター型、速力八節、パラオとマヌコワリ間を往復すると同時に又日本とのニューギニヤ大陸とを連絡する唯一の船である。

出帆後、吹いて来た烈風は長く続き、船の動搖益々はげしく、乗客の大部分は着替の暇もなく其儘ベッドに横たはつた、夜中、屢々安眠が妨げられた。

四月二十五日 (ヌシ丸船中)

午前、船は渺茫たる青海原を揺られながら進んだ、剩へ午後は雨となり、空は黒雲に被はれ暑さと濕氣とで押しつけられる様であつた、夕、船尾で二尾の大きな鮪が釣れ、食膳に上げつた。

四月二十六日 (トコベ島)

今日は我南洋群島の最南端にあるトコベ島に到着の豫定であつた、然し昨日からの悪天候で船の位置を定め得ず、加ふるに潮流の關係もあつて島は容易に發見が出来ず、船長を困らせたが漸く午後三時、その位置がわかり針路を反對の方向に變へた。

夕の六時過ぎ、水平面上に一文字を書いた様な低いトコベ島が現はれて来た。間もなく夕闇の島の林に映つる青や赤の燈火が見える、椰子の林の間から洩れる窓ガラスの光りは住宅でもあらう。

私達は迎へのランチで棧橋に上がると河野主任が出迎へた、懷中電燈を便りに暗い道を歩み、

クラブの宿舎に入つた、莫蔭を敷き詰めた板張りの大きな室にはアセチリンの光が煌々と輝いてゐた、ガラス窓を開けると波の音が椰子の林を隔て、聞え、心地よい潮の風を送つて来た。

久しぶりに温浴して浴衣に着替へ、船中二日間の苦を忘れて床に入つた。

四月二十七日 (ヌシ丸船中)

朝、河野主任の案内で島を見學した、島の中央の凹地が燐礦の所在地で、往時土人はその礦石を掘り上げ茲に水溜りを設け農耕地とした、今はこの掘り上げた礦石が利用せられてゐる。

歸途、海岸の土人の部落を見た、土人はその體格が偉大でその素朴の木彫人形は有名である。十時、一旦クラブの宿に歸つた後乗船、十二時に出帆、海は靜であつた。

四月二十八日 (ヌシ丸船中)

好晴、波は靜、時々ブリツチに上がつて大洋を眺めた、夕陽の景色は美しい。終日無爲。

四月二十九日 (パラオ)

未明、ベッドに寝た儘丸い小さな窓から外を望むとパラオ島が海面に浮び鋸の様に見える。峯が次第に近づいて来た、船はコロールの燈臺山を一週してマラカル島の前に投錨した。

九時、防疫と税關検査とが濟むと杉浦農林課長、相澤技師、安武技手の諸氏が私達を迎へた。ランチでコロールの波止場に上陸、興發のクラブに落付いた。

午後は休養したが訪問客が多かった。

夕飯後、町を散歩した、天長節の爲めか静な夜であつた、とある土産物を賣る店の前に立ち、つひ中に這入ると、棚にはバリ島の木彫人形やサロン、ニューギニヤ産の極樂鳥、アンボン島の丁字細工、爪哇更紗にセレベス産の黒檀の洋杖など相當豊富に列べてあつた、どう云ふ徑路で這入つたものか。それにしてもパラオが南洋と次第に接近しつゝあることが此の一事を以てもわかる。

四月三十日（滞在）

朝起きると數通の電報を内地に打つた。

官廳を歴訪して挨拶を述べた後、安武君の案内でアリミヅ街道の丘陵地に建築中の南洋神社を拜觀した、コロール島の景勝の位置を占め、總べての用材が此の群島産の鐵木で出来てゐた、今年秋に完成すると云ふ。



No. 153 歸航の名古屋丸船上 (古瀬氏)

歸途コロールからパラオ本島に通ずる地峽の工事を見た、作業が盛んに進行中であつた。

熱帯産業研究所と熱帯生物研究所とを訪ふた、前者は近く本島に移轉するので何んとなく淋し

かつた、後者はその建物が如何にも小規模であるがその業績が次々に發表せられてゐる、新進の學徒が研究にいそしむ結果であらう。

興發會社から南洋ホテルの午餐に招かれた、「南洋ホテル」と云へば如何にも南洋移民を相手の

安ホテルの名に聞えるが實は南拓經營の堂々たるもので瀟洒な二階建の家屋はその風光と相待つて感じが甚だ良い、見晴らしのよいヴェランダの食卓につくと料理は申分なかつた。

午後南洋廳の會議室で講演し、夜は長官の晚餐會に招かれた。

(十三) 歸 航 (其の二)



No. 154 船中、神戸に着いた一行 (古瀬氏)

五月一日 (名古屋丸船中)

正午、南拓からその丘の上の社宅で中食に招かれた、この社宅は元熱帯産業試験場の圃場で高臺にあり、人工の池の中に浮んだ様なコロール島特有の丸い緑の森に覆はれた無數の珊瑚礁が眼

下に見える、一種特異な美しい此景色は他にその類例を見ないであろう。

三時、コロール港に這入つて來た南洋海運の爪哇航路に就航する名古屋丸に乗り込んだ、甲板は見送りで大混雑であつた、船は四時出帆した。

五月二日—七日 (船中)

船では、デツキ・ゴルフがはづんだ、午後の一睡と讀書、ラヂオ・ニュース、型にはまつた生活で愉快な日を送つた、四日頃から涼しくなり六日になると気温は急に低下した、七日の朝、デツキに出ると静な海に帆を上げた日本の魚船が見えた、此の魚船こそ外國から歸航する吾等には一番のなつかしき故國に歸つたと云ふ感激を何時も私に與へて呉れる。この日の夕に近い頃、船は左に淡路島を望みつゝ靜に神戸に入港した。

ニューギニヤの植物

(一) 概 説

(1) 發見と分割

ニューギニヤは何時頃發見せられたか、これには諸説がある、一五二一年、ホルトガル人 ANTONIO DE ABREA 初めて本島を發見したと云ひ、又一説にスペイン人 ALVARO DE SAavedra は一五二六年、メキシコからモルツカに派遣せられた際、その翌年、即ち一五二七年若くは一五二八年、カロリン群島とニューギニヤの北海岸を發見し、後者の島を *Isla del Oro* 即ち「黄金の島」と名づけたと云ふ。又一説に一五二七年、ホルトガル人 JORGE DE MENEZES は「ニューギニヤ西海岸に來り Os Papuas 即ち「ニューギニヤ」の名を與へたとも云ふ。然し當時、スペインもホルトガルも所有權に就ては何等の主張をしなかつた。一六〇六年、トレス海峡(ニューギニヤと濠洲との間にあり)の發見者たるスペイン人 TORRES は初めその所有權を主張したが失敗に歸した。

十八世紀の末期になると佛國の航海者は屢々この方面に來航し、又英國の軍艦はその近海の測量を始め、遂に一七九三年、同國の東印度會社は所有權を主張したが實力を伴はぬ爲、效果は無かつた。

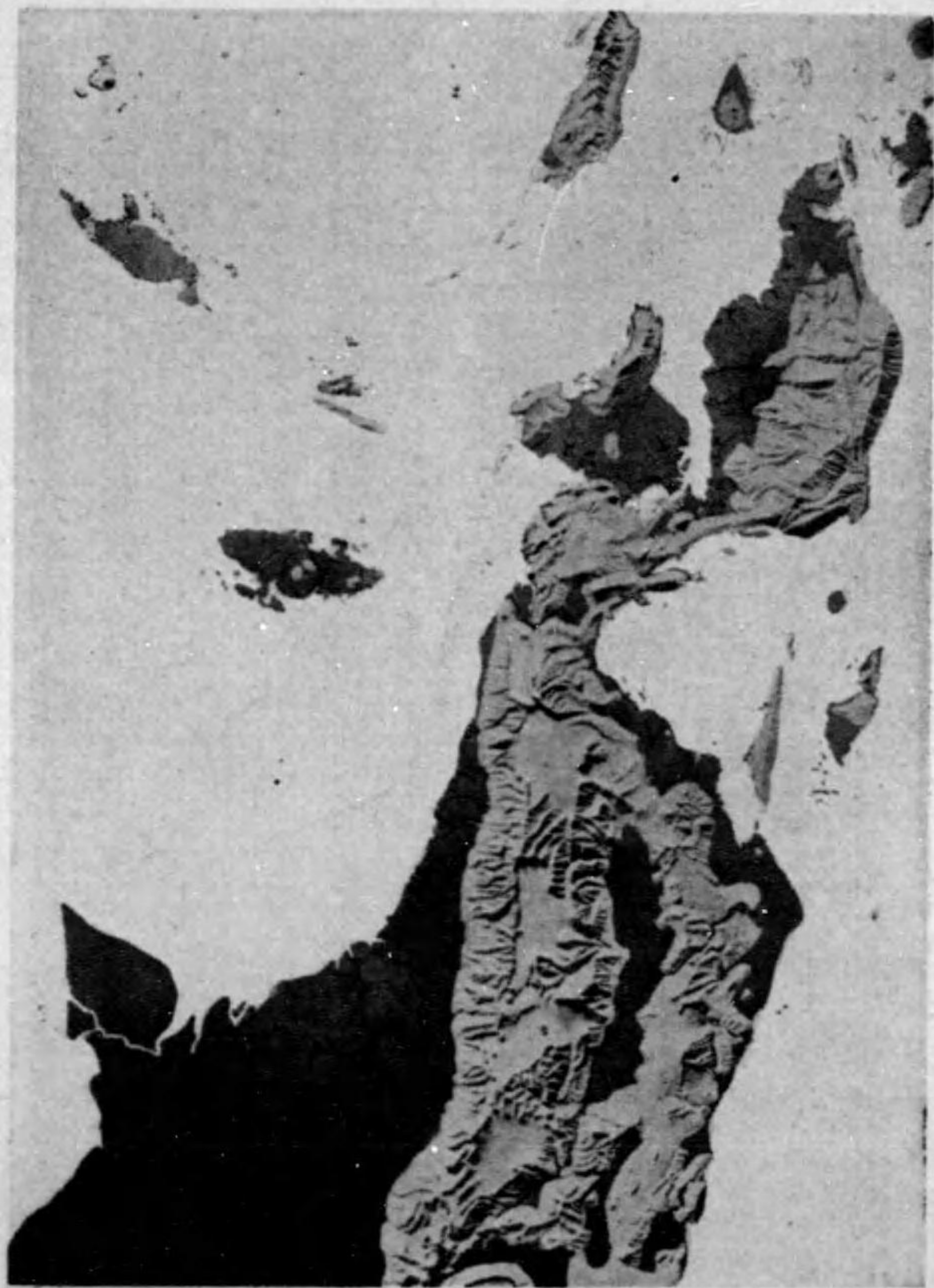
和蘭人最初の上陸者たる LE MAIRE 及び SCHOUTEN がこの地に着いたのは一六一六年で偶然やつて來たに過ぎぬ、その後六十餘年、空しく経過して一六七八年に至り、和蘭は今日の鳥頭ツキヘルトの南、オニン酋長とある契約を取り換したが、爾來再び百五十年間何等の關心を示さなかつた、然るに一八二八年に至つて、和蘭は東經百四十一度に至るニューギニアの西半分はハルマヘーラ島、チドール王侯の領地たるの理由を以て占領し、東半部に就ては容喙すること無く權利を放棄した、従つて東半部は所謂無人境ノーマンランドとしてその所屬が定まらず、濠洲の政治家達は速にこの東半部を占領せんことを主張したが大衆は賛成せなんだ。然るに佛國が近くのニューカレドニア島に流刑所を設置したり、又サモア島に本據を置く獨乙、ハンブルグの GODEFROY 商會（會主はキール生れ、博物學に貢献をした）が附近の島々を占有し、その勢力が次第にニューギニア大陸にも及ぶに至つた爲、濠洲は慌てゝその所有權を主張し、一八八三年、遂にクインスランド首相の專斷でユニオン・ジャツクの旗を揚げたが英本國政府の心證を害し、外交々涉に移された。而して獨乙は直に Dr. O. FINSCH の元に探検隊を組織してニューギニア大陸に向はしめ、一八八四年

十一月、軍艦エルザベス號の到着と共に茲に正式に Kaiser Wilhelmisland と Bismarck 群島との所有を宣言した、翌年四月、ニューギニアを東西に區劃する南北の境界線（東經百四十一度）の北半部は英國と獨乙との間に協定が出来たが和蘭は参加して居らず、一八九五年五月十六日その南半部の境界の協定に於て始めて和蘭は英國と調印した。

獨乙はその後、ソロモン、ナウル島を占領し又一八九九年にはスペインから今日の我南洋群島であるカロリン、マリヤナ、マルシャル群島を買収し、同時に從來獨乙ニューギニア會社が支配して來た統治權や貨幣の發行權を政府の手に納め一大飛躍を計畫し、その實行が緒に着いて間もなく世界大戰となり、舊獨乙領ニューギニアは擧げて濠洲政府の治下に置かるゝに至つた。亞でヴェルサユの媾和會議により、一九二〇年十二月、更めて濠洲のC級委任統治領となり、Territory of New Guinea と稱せられてゐる、之に對し南部のニューギニアは一九〇六年九月以來、濠洲政府の治下に首都をポート・モレスビーに置き Territory of Papua と呼んでゐる。

(2) 地勢と氣候

ニューギニア大陸は地質學的には最も新しく、その地殼は今もなほ構成しつゝありと云はれる、その地勢、東西に走る脊梁山脈は蘭領に於て最高に達し、最高峯 Carstensz 峯（海拔五、〇三〇米）を始めとして Wilhelmina 峯（海拔四、七五〇米） Juliana 峯（海拔四、七〇〇米）の外、幾



No. 155 - ニューギニア地勢

(New Guinea 19)

多の高い山が聳えてゐる、この大山脈が新生界時代に出来た褶壁であることはその当時の有孔蟲の多くが傷くか、或は破壊を受けてゐることにより證明が出来る、これを同一成因により出来たアルプスやヒマラヤに比ぶれば遙に新しい。

中央山脈により二つに兩断せられた南北の兩地帯のうち、北部は山岳多く、南部は一般に低濕地であり、フライ及びデゴール河は八字形をなし口を夫々、東、西に開き海に注いでゐる。

北部海岸では濠洲領にセビツク河あり、蘭領にマンベラモ河がある。マンベラモ河はその源を恒雪山脈から發し、東西三百キロの湖原メツラットに於て東から流れ来るイデング河と西より流れ来るルーフエヤ河とが一直線に合流し、海岸に平行して走る山脈の間を抜け、ロンベバイ湖に水を分つた後海に注ぐ、此河は北部ニューギニアの最も重要なもので水利により將來の開拓が期待せられる。

ニューギニアの氣候は大體無風帯であるが、何時でも鏡のやうなことはかりは無い、モンスーンの期間には風波があり、大きな船も動搖する。

一年中の氣温は變化がなく普通は攝氏二五―二七度で特に北部は濕氣が多く蒸し暑いが、南部のメラウケ及びポート・モレスビーでは乾燥するので涼しい、尤も、北部では日没後、氣温が下がり夜間は凌ぎ良く、朝方になると濕度は飽和状態にまで達する。

高地帯の氣温は海拔一、五〇〇米までは一〇〇米毎に〇・六度宛低下し一、五〇〇米以上の高さ



No. 156 ウイルヘルミナ峯(4750m)、1909年9月ロレンツ始めて頂を征服す(前掲)

になると一〇〇米毎に〇・五度を低下する。降雨は全島甚だ多い、但しその地形とか、モンズーンに面する方向により地方的に一樣ではない、五月九月は一般に雨が少く、その他の月は比較的多く、南部のポト・モレスビーでは年雨量は一、〇〇〇ミリ内外だが中央山脈では七、〇〇〇—八、〇〇〇ミリに達する處がある。

然し、降雨の多い地方の乾燥期でも月雨量は一〇〇ミリ以上あるが、南のメラウケでは二〇ミリに過ぎぬ、又ポト・モレスビーの近くでは雨量が更に少い事すらある。

(3) 探検と學術調査

ニュージーヤ大陸は「暗黒の地域」として知られその内部の事情は永い間不明の儘に残された、然しスペイン人が十六世紀、この島を發見した當時から黄金の島とし

て知られた、これを探し求める爲、危険な蕃地、瘴癘の氣の多い奥地に冒険したものが無い譯ではなかつた。

然し、奥地の冒険が行はれる様になつたのは今世紀に入つてからである、このうちでも濠洲ニユーギニヤは蘭領に比しその沿革も古く探検も頻繁に行はれて居た、これは十九世の末頃、パプアの總督であつた Sir WILLIAM MACGREGOR がその端緒を開き、自らも亦、そのパイオニヤとして活躍した爲にも起因する。即ち一九一三年 WALTER BEHRMANZ 探検隊はセビツク河南部支流の低地帯からその源頭に近い高原に進み、四月河の上流たる中央山脈に到達した。

又一九二七年には有名な C. H. KARIUS 及び IVAN CHAMPION はフライ河に沿ふて北上し、中央山脈の分水嶺突破に成功してセビツク河の上流に出で、ニュージーヤ横斷最初の名譽を得て地理學上輝かしい功績を残した。

又一九三四年にはリー兄弟 (M. J. & D. L. LEAHY) がライ及びアムブム河流域を、一九三七年にはウイリヤム (W. WILLIAM) 探検隊がフライ、セビツク兩河の分水嶺に到達して金鑛の調査を行った。

一九三八年、J. L. TAYLOR はラバウルを基地として中央山脈の北側ハーゲン山飛行場(海拔一、五〇〇米)に必需品を空輸し、山脈の北側を広く踏査すること一ヶ年六ヶ月、翌年七月、基地に

到着した。氏は一九三三年、前記リー兄弟と共にハーゲン山東側を踏査したことがあり、その報告は一層正確なものとなつた、即ちこの探検によりマークハム河とピユライ河の兩源頭の西方に廣く展開する肥沃の高地帯を發見したことであつた。



No. 157 一九一三年、ニューギニア第三回探検で Kapt. A. F. HERDERSCHEE がダイヤク人を連れてウイルヘルミナ峯を極めた時の光景 (前掲)

蘭領ニューギニアの探検史中特筆すべきは一九〇三年から一九二六年迄數回に亘り蘭印學術協會の主催で蘭印政府援助の元に行はれた探検であらう、その結果は后記の「Nova Guinea」となつて現はれた。

又この探検と時を同ふした一九〇六年、當時の蘭印總督であつた VAN HEUTSZ の顧問としてニューギニアに派遣せられた Kaptain H. COLIJN (後の和蘭の總理大臣) は組織探検の必要なことを認め、その實行を總督に懇願した結果、一九〇七年より一九一四年迄、蘭印陸軍省はその

進言に基きニューギニアの南部、西部、北部並にマンベラモ河流に探検を行つた、その主目的は地理、地質、人種、人類學的探究で老大な報告となつて現はれた。

その後は飛行機を利用して探検することが計畫せられ、一九三六年十二月 WISSEL, COLIJN, DOZY の三人は通路を空中から偵察して置き、豫め適當な地點に食糧を投下することにより、最高のカールステンツ峯の頂上を極め、探検史上、エボツクをつくつた。

か様にニューギニアの内部は次第に明くなつたが全然未踏査の地域がどの位あるかと云ふに政府の報告によると、蘭領ではその全面積三八九、八〇〇キロ平方メートルのうち山地三七、二〇〇キロ平方メートル、低地一六、八〇〇キロ平方メートル、合計五四、〇〇〇キロ平方メートルが人跡未踏で、即ち全面積の凡一四%に相當する。又濠洲領ではその全面積の四二二、三〇〇キロ平方メートル、そのうち高地四〇、五〇〇キロ平方メートル、低地二一、五〇〇キロ平方メートル、合計六一、〇〇〇キロ平方メートルが未踏査地で全面積の凡一五%となつてゐる。

次に蘭領ニューギニアに於ける植物方面の探検及び採集は如何、是は可なり早くから行はれて



No. 158 同上 (前掲)

る、即ち一八二四年 *Coquille* 號で來航した *P. Lesson* は大陸の鳥頭フキヘツツツを採集した、この地方は早くから注意せられた處であり、一八八九年、*O. Warburg* はマヌコワリに來航し *J. E. Teysmann* は一八七一年、ドレー灣からヘルフィンク灣の海岸に沿ふて多くの採集をなし、又伊太利の有名な *O. Beccari* は一八七二年と一八七五年との兩度、鳥頭のハタムに採集をした。交通に最も便利な海岸地帯や、河の沿岸は最も採集し易いが又一方、高地帯にも及んだ、例へば本島の最高 *Carstensz* 峯(海拔五、〇三〇米)の南側は一九一一年、*C. Boden Kloss* により、*Wilhelmina* 峯(同四、七五〇米)の南側は一九〇七年 *G. M. Versteeg*、一九〇九年、*L. S. A. M. Römer* により、*Doorman* 峯(同三、八〇〇米)は一九一九—一九二〇年 *H. J. Lam* により、又 *Arfak* 山(同三、〇〇〇米)は一九二八年 *E. Mayer* により採集せられた、又河川の上流地方の採集にはマンベラモ、フライ、アイランデル川が擧げられる。

濠洲ニューギニヤでは獨乙時代に於て *C. Naummann* (一八七五年)、*M. Holkrung* (一八八六—一八八八年) *C. Lauterbach* (一八九〇—一八九一年、一八九六年、一八九九—一九〇〇年) 及び *R. Schlechter* (一九〇一—一九〇二年、一九〇七—一九〇九年) が活躍し、又濠洲パプアでは *Sir William Macgregor* (一八八九—一八九七年)、*C. E. Lane-Poole* (一九二二—一九二三年)、*C. T. White* (一九二八年)、*L. J. Brass* (一九二五年より現在に至る) 等が擧げられる。



No. 159 ホランジャ海岸にあるアーチボルド探検隊の根據地 (加藤氏)

又現在濠洲ニューギニヤにあつて今なほ植物採集に活動を續けつゝある *Mrs. M. S. Clemens* 夫人の名を逸することが出来ぬ、女史は嘗て北ボルネオのキナバル山を探検して多數の珍種を發見したことは餘りにも有名である。

(4) アーチボルド探検

最近ニューギニヤのアーチボルド探検が非常に有名になつた、單に大仕掛なアメリカ式のものだと云つて片付ける譯に行かぬ、ニューギニヤを訪ふ者はホランジャの海岸の丘陵に大きなホテルの様な白壁の建物を見るであらう、今は淋しい空家であるが、探検隊員の基地として特に建設したものでその雄大な計畫の片鱗を窺ふことが出来る。

私は茲に色々の意味で此の探検につき少しく説明を

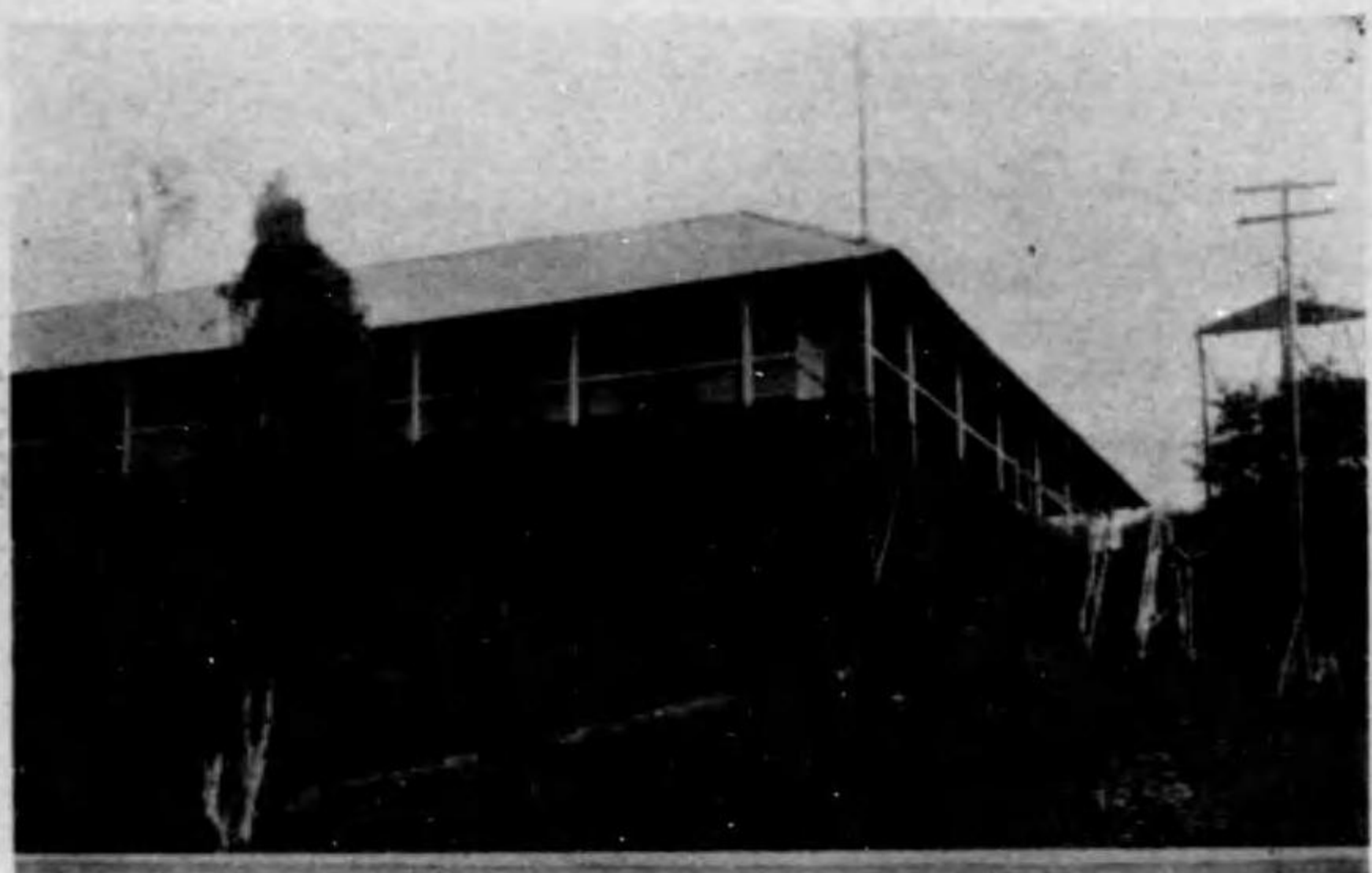
加へ、参考に資することにする。

RICHARD ARCHBOLD は紐育市在住の若い富豪であるらしい、幼少の頃から動物採集を好み、

二十二歳の時、英米佛、三國の學者からなるマダガスカル島の動物探検隊に加はつたのが彼をして探検家たらしめたと云ふ。

一九三三年、初めてニューギニア探検を計畫した、彼れの目的は最初は動物採集にあつたが動物は植物と最も關係が深いことを知り植物學者を参加せしめる必要上その相談をハヴァード大學の E. D. MERRILL 博士に持ちかけた、博士は濠洲ブリスベン大學の C. T. WHITE と協議の上、當時ハヴァード大學 Arnold Arboretum の爲に植物採集をなしつゝあつた L. J. BRASS を推舉した、このブラス君の活動は後日標本の大收穫をもたらし、學界に偉大な貢獻をなすに至つた。

アーチボルド第一回の探検は一九三四年、濠洲パプアの東南ポート・モレスビーを基地として



No. 160 同探検隊の本據 (加藤氏)

海岸からウワールトン山脈の高地まで動、植物の採集と調査を企てたが人烟稀な奥地に這入り込むには色々の支障があり、豫期した結果は得られなかつた、その原因は米人の高い生活様式により彼等の必要品を思ふ様に運搬が出来なかつたこともその一つと想像せられる (P. I. M. 一九三四年八月號、一九三五年一月號)。

探検隊に必要なパプアの搬送力は一人につき米、四十封度が標準で、此量は苦力の食料として廿六日分である、故にこれだけの米を擔はせると十三日間の行程に往復が出来るが若し搬送荷物の半分を食糧品以外の必要品、例へば寢具、炊事道具、採集用品の如きものに代へるなら僅に六日半の行程の奥地に進み得るのみであるから基地から、後續部隊によりリレー式に食料その他の必要品の供給が續かぬ限り、到底奥地深くまで探検することは出来ない譯である。

この經驗はア氏をして第二の探検を計畫せしめた、彼は一九三六年 Fairchild Amphibian Single Wright Cyclone (翼長六七呎、積載量四、〇〇〇封度、一、三〇〇哩の航続燃料を有す) をポート・モレスビーまで船にて輸送し、フライ河の河口、ダルーを基地として此川の上流を探検し、セビック河に出る計畫を立て、食糧と必需品はパラシュートにより供給するの準備をした。

フライ河とはどんな河か、中央山脈に源を發して南に流れるニューギニア最大の大河、長さ六五〇哩、河口幅四五哩、河口より二〇〇哩迄、海水の干満があり、五〇〇哩迄、スチーム・ランチ

を進めることが出来る、その源を中央山脈に發し、南の國境に沿ふて南下し、東南に彎曲した後、パプア灣に注ぐ、一八四一年、英艦 *Fly* 號の艦長 *BLACKWOOD* が艦名に因み命名した。この河の最初の探検者は伊太利の博物學者 *Luigi Maria D' Albertis* で、女史は一八七六年、フライ河を溯江すること五百哩に及び不滅の探検記を残した。

次にこの河の上流に上ぼつたのは前にも述べた *Sir William MacGregor* で一八八九—一八九〇年、パルマー河の石灰岩斷層まで達したが、その後一九二七年、前に述べた如く *C. H. カリウス* 及び *I. チャンピオン* がこの河の源頭を極めて分水嶺北側のセビツク河に出で、地理學上大きな功績を残した以外には、何人もこの地方の生物學的收穫を齎した者は無かつた。

フライ河口の基地ダルーにアーチボルド探検隊が到着したのは同年三月十一日であつた、探検隊長であり、パイロットでもあるアーチボルド氏は先づ探検地帯の偵察飛行を屢々試みた、その最初の飛行には前記のチャンピオンを帶同してフライ河上流地の説明と案内とに當らしめた、數回の飛行後、フライ河上流、凡五百哩の地點にある、パルマー・ジャンクションが飛行機の着水に可能なることがわかると、その河岸に基地を置く計畫を立て、*L. J. ブラッス (Brass)*、*C. H. H. テート (Tate)* を先發隊として巡警の外、苦力六十名、四ヶ月分の食料を小汽船マイラ號に載せ、五月二日、ダルーを出帆した。一行は同十三日、目的地の、パルマー・ジャンクションに達したが

更に數哩上流の地點に移動して基地とした。

先發隊は一先づ下船して陸行、マビオムの山麓、海拔七五〇米の地にキャンプする事になつた、パラシュートによる食糧投下の結果は上乘であつた、然し六月に入ると雨天の日が多く、山には雲がかゝり、飛行機から宿營地を發見することが困難となり、機は雲の中をぬけて空しく歸着せねばならぬこともあつた、加ふるに七月上旬になつてからモレスビーで食糧品の積込み中、飛行機は烈しい風雨の爲め破損して飛行は不能になり、空輸による糧道が斷れて仕舞つた。

山中滞在の白人五人、六十人のパプアの食糧を供給する爲め金鑛地ラエに打電して飛行機をチャーターした、飛行機は直にモレスビーに來たが天候は依然險惡で食糧の投下は不可能であつた、然し山中には無電の設備があり、最悪の場合の準備もあつたので一行は直ちに下山の用意をなし、大きな筏十二を急造してフライ川を下り河岸の基地に歸還した、かくして沿岸を採集しつゝダルーに歸着したのは十一月の末であつた。この探検記は *R. Archibold, A. L. Rand* 共著 *New Guinea Expedition (Fly River Area)* として一九四〇年出版せられた (南洋經濟研究所「研究資料」昭和十六年一月より連載中)。又此探検の總合結果は紐育博物館報告 (*Bulletin of the American Museum of Natural History 77 (1940) art. 7*) によると、その採集標本は哺乳動物一、八五七點、鳥類三、六三三點、爬虫類二、三九點、魚類一〇〇點、昆虫類二、〇〇〇點、植物二、五〇

○點で今日まで既に多數の論文が發表せられてゐる。

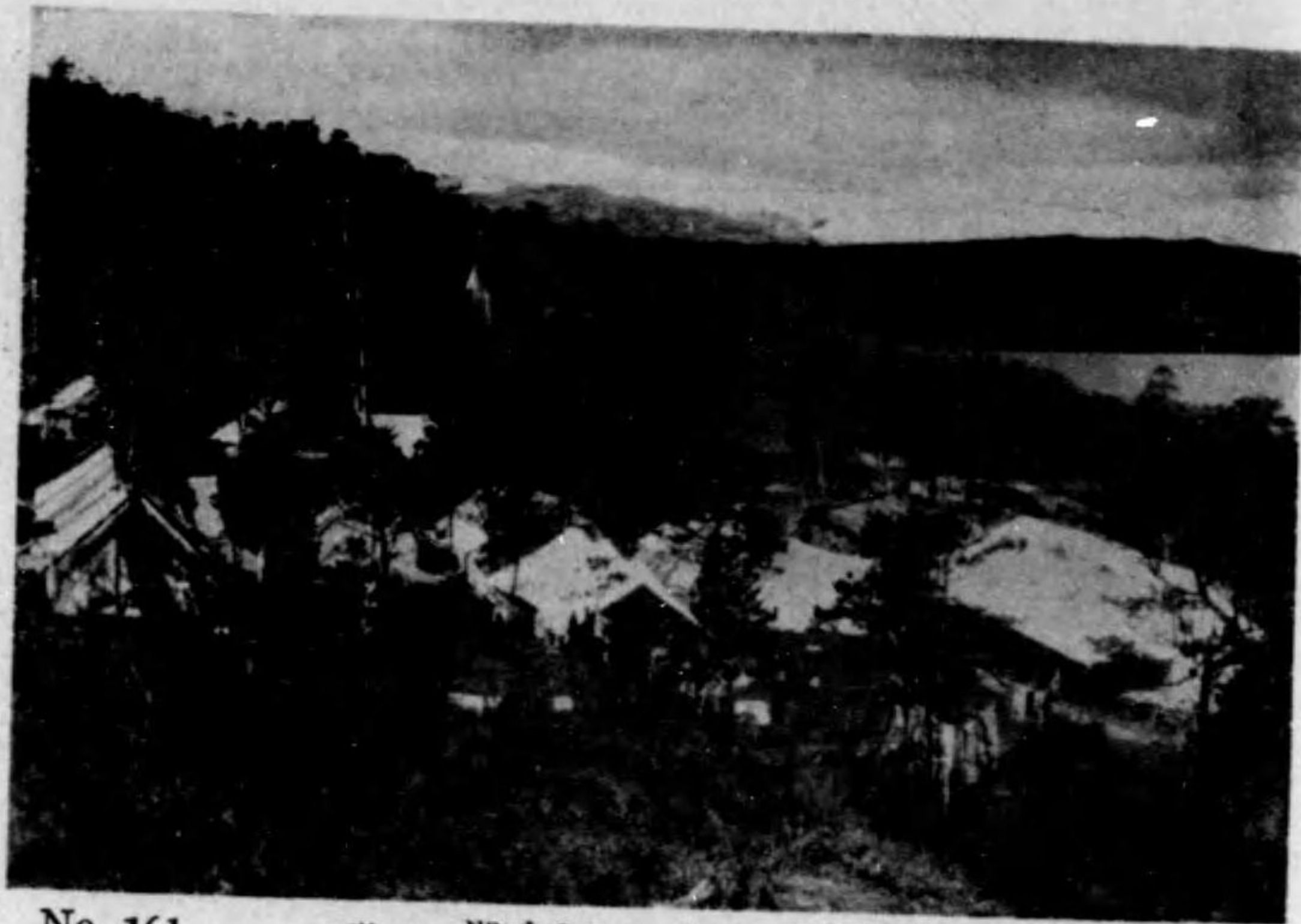
第三回の探検は第二回目よりも一層用意が周到で、ニューヨーク博物館と協同の名目で行はれたが現地では Indische-Amerikansche Expedition の名目であつた。その目的は飛行機で蘭領ウイヘルミナ峯(四、七五〇米)に近きハツベマ湖(Habema 海拔三、六〇〇米)に着水し、同峯を極めた後、イデンプルグ河に至る迄の五階梯に於ける動植物を調査するにあつた。

第二回の飛行機の失敗に懲りたA氏はテキサスの Consolidated Aircraft Corporation 製 P・B・Y・I 水上機で乗組員四名、積載量七噸、旅客二十名、高度三千米で一九〇一—二八〇キロメートルの性能を有する優秀機を使用した。

ニューギニア出立前の試験飛行には加州のタフー湖(海拔二、〇〇〇米)に着水し、良好な結果を得て目指すニューギニアのハツベマ湖にも着水可能なることを確認した。

飛行機は一九三八年、五月二日、テキサス・サンチェゴを出立、針路を南太平洋に取り、航空九日間、一萬一千キロを飛翔の後、蘭領ニューギニアのホランヂヤに安着した、海岸から見えるホテルの様な建物が隊員達の基地である。

ホランヂヤからハツベマ湖に着水する迄は六回にも亘る偵察飛行と豫備飛行を試み、地理學上多くの觀察を遂げた後、同年七月十五日初めて湖水に着水した。この湖水は一九〇九—一九一三



No. 161 ハツベマ湖畔のアーチボルド探検隊キャンプ
(Natural History Magazine 46 (1940) No. 3 より)

年、和蘭の探検隊により發見せられ、一九二一年一蘭人が始めてこの湖水を踏査した。

探検隊の一行はアメリカ側の外に蘭印側から昆虫學者、山林技師を始め一名の醫師、四名の士官等で、これにセレベスやアンボン人の兵隊五十二人の外、ボルネオから態々連れて來たダイヤク族の苦力、爪哇の囚人三十名等、合計二百人に達し且つ之等の人々に對する三ヶ月分の食糧その他の必要品が空輸によりハツベマ湖に運ばれた。湖畔の森林を伐り拂つて數ヶ所に大テントを張りその一つは病舎に當てた。探検隊はウイヘルミナ峯の恒雪線まで採集し、後マンベラモ河の上流ベリエムに移りイデンプルグ川を採集しつゝ下つたらし

い、まだその詳細な報告の発表を見ないが植物では、野帳番號によると六千點に達した、然し一九三九年、歐州大戰が始まると飛行機はアフリカを經由、本國に歸還し、世界一週として最長距離の記録を残した。

私は今、此第三回の探檢により如何なる收穫があつたか大きな好奇心と興味とを持つてその報告を待つてゐる。

ブラス君の採集品はすべてハヴァード大學、メリル博士の許に送られた筈で、同博士最近の私信によると、三回を通じて採集した植物標本は採集番號による種數一〇、五〇〇で、標本のシート數は四萬點に達したとの事である。

此等標本中、既に學界に發表したものも可なり多く、現になほ續々と發表せられつゝあることは學界の壯觀である。

アーチボルド探檢は更に第四回、第五回が計畫せられ、カルステンツ峯と鳥頭ハイヘムツッが目的地に豫定せられてゐるが、現今の世界の情勢で、果して近き將來に實現せられるかどうか不明である。

この探檢は蘭印當局を刺激したことは想像するに難くない、外國の探檢隊が飛行機を携へて自由に島内を飛翔することは國防上何等不安がないとしても學術の研究資料が外國人に委ねられることには忤怩たらざるものがあるであらう、故にこの探檢が蘭印協力の名儀となつてゐるのは蓋

し當然である。

一九四〇年、和蘭の王立地質協會は數年前ウイツセル氏により發見せられた Wissel 湖の探檢を行つた、アーチボルド探檢の影響もあつたことと思はれるが、水上飛行機により湖面に着水して周囲の調査をした、爪哇、ボ植物園の Dr. J. EYMA がこの探檢に参加して多數の植物標本と材鑑を持ち歸つた。私が探檢から歸つたばかりの同氏にボ植物園で面會し、その標本の多數を見せ貰つたことは前にも述べた。

(二) 植物界

(1) 植物文獻

ニューギニヤの植物文獻に就きては Dr. H. J. LAM が "Blumea" I, 1934 に列記する様に相當多いが、特記すべきものは次の如きであらう。

「Nova Guinea」は前にも記した様に蘭領ニューギニヤの研究に無くてならぬ文獻で各部門に分れて居る、今参考の爲、左にその書名を掲記する、

一九〇三年度探檢報告 (Prof. ARTHUR WICKMANN)

第一一二卷 ニューギニヤ發見史 Entdeckungsgeschichte von Neu Guinea (1909-1912)

第三卷 人種學及び人類學 Ethnology and Anthropology (1907)
第四卷 一九〇三年ニューギニア探検記
Berichte über eine im Jahre 1903 ausgeführte Reise nach Neu
Guinea (1917)

第五卷 動物 Zoologie (1906-1917)

第六卷 地質 Geologie (1913-1928)

第七卷 人種(分布)誌 Ethnographie (1913-1923)

一九〇七年度探検報告 (Dr. H. A. LORENTZ)

第八卷 植物 Botanique (1909-1914)

第九卷 動物 Zoologie (1909-1914)

第十、第十一卷 未發行

第十二卷 植物 Botanique (1913-1917)

一九一二—一九一三年探検報告 (A. FRANSEN HERDERSCHÉE)

第十三卷 動物 Zoologie (1915-1922)

第十四卷 植物 Botanique (1924-1932)

第十五卷 動物 Zoologie (1925-1932)

第十六卷 人種(分布)誌 Ethnographie (1924-1934)

第十七卷 動物 Zoologie (1933)
第十八卷 植物 Botanique (1936)

我日本に於ては本書の完本は臺灣總督府に所藏せられてゐるのみで、他は別刷又は破本が大學
その他に散在してゐるに過ぎぬ、日本學界の爲めに惜しむべき事である。尤も最近總督府はその
完本の保管を臺北、南方協會に委托した。

その他の文献として重なるものは

F. von MÜLLER: Descriptive notes on Papuan plants 1-9 (1875-1890)

" : Notes on Papuan plants: Journ. Bot. (1891-1893)

O. WARBURG : Beiträge zur Kenntnis der papuanischen Flora: ENGL. Bot. Jahrb.
13 (1891) 230-455.

—" : Monsumia 1 (1900)

Monsumia は WARBURG が蘭領及濠領ニューギニアに採集した報告である。

H. N. RIDLEY : Report on the botany of the WOLLASTON Expedition to Dutch New Guinea:
Trans. Linn. Soc. London 9, 2nd. ser. Bot. (1916) 1-269.

これはウオラストンが一九一二—一九一三年、カルステンツ地方に採集した研究である。
次に元獨領ニューギニアの植物の研究には

K. SCHUMANN u. C. LAUTERBACH: Die Flora der Schutzgebiete i. d. Südsee (1901)
Nachträge (1905)

G. LAUTERBACH: Beiträge zur Flora von Papuasien: ENCL. Bot. Jahrb. (1912-1938) (Nr. 1-23)
の二つがあり、後者は今なほ繼續發表せられつゝある。

又吾々が採集したアンギ湖方面の植物は一九一三年、同地を採集したギツプス女史の次の名著がある。

L. S. GIBBS: A contribution to the phytogeography and flora of the Arfak Mountains, London, (1917)
又濠領ニューギニアの植物と森林資源とを詳記したものに左の良書がある。

G. E. LANE-POOLE: The forest resources of the Territories of Papua and New Guinea (1925)
尙、アーチボルド探検により得たる材料の研究結果は Journal of Arnold Arboretum に發表せられつゝあるが、この他

O. BECCARI, F. v. MÜLLER, R. SCHLECHTER, F. M. BAILEY, C. T. WHITE, H. J. LAM, D. W. M. VAN LEEUWEN 等の論文がある。されど茲に一々掲記することを省略する。

最近 Dr. W. C. KLEIN 編著「Nieuw Guinea」第一卷（一九三五年）、第二卷（一九三七年）、第三卷（一九三八年）なる大著が現はれた、ニューギニア全般の事情を夫々の専門家が執筆したもので参考書としては最良のものであらう、本書中にも森林及びその植物に就き詳記してゐる。

(2) 探検旅行の準備

官との交渉

ニューギニアは土着人に對する警察權が不完全であるから、危険な蕃地に學術探検をなす場合には蘭印政府の許可は勿論のこと、更に好意的援助を得なければ遂行が出来るものではない。私がニューギヤ探検に先立つて先づ爪哇に至り、當路の人を訪ふたのはその爲であつた。蘭印政府は現ゆる好意を示して便宜を計つて呉れた。

同地を去るに先立つてポイテンゾルフ植物園の腊葉館長は私のニューギヤ探検に就き一つの契約に同意して呉れまいかとの申入れをして來た。

契約文は次の通り

- (一) 金平教授が一九四〇年、蘭印で採集する標本の一組はボ植物園に寄贈すること。(二) ボ植物園はその標本の番號により屬の豫備鑑定をなし金平教授に報告する。(三) 金平教授の寄贈した標本に對しボ植物園は馬來地方の標本を交換的に金平教授に寄贈する。(四) 金平教授は旅行報告をボ植物園報に發表すること。(五) 金平教授の學術報告は發表の都度、その別刷をボ植物園に寄贈すること。

この契約は豫め協定して作製したものは無いが外國の領土で探検を行ふには至當の云ひ分であり、私は直に同意して署名した。契約書の原文は次の通り。

Buitenzorg, Java, February 5th, 1940
Agreement

The undersigned, Prof. RYOZO KANEHIRA agrees that a complete set of his collections to be made during his trip in Netherlands Indies in the year 1940 will be presented to the Botanic Gardens, Buitenzorg, if possible before his return to Japan. This includes both living material (seeds, fruits etc.) and preserved herbarium and museum specimens. The Herbarium of Buitenzorg will, however, at the earliest date possible, provide prof. KANEHIRA with the preliminary identifications of his collections, compiled in a numbered list. Moreover, the Herbarium will in the future send duplicates of Malaysian material to Prof. KANEHIRA's Herbarium on a free exchange basis for the KANEHIRA-1940 set of Malaysian plants. Prof. KANEHIRA agrees that a general report, be it small or large, will be offered for publication to the Bulletin du Jardin Botanique, and that other publications of his dealing with the 1940-collection will be sent to the Botanic Gardens, eventually as reprints.

The Director of the Department of Economic Affairs. The Curator of the Herbarium
Batavia-C.
(signed)

D. F. van SLOOTEN
The Botanical Explorer
(signed)

Prof. R. KANEHIRA

Copies of this agreement are deposited in the Herbarium and in the Bureau of the Botanic Gardens at Buitenzorg.

従来獨逸やアメリカの探検隊が蘭印に来て標本を採集する場合、その標本全部を本國に持ち歸り、又その結果を自國に於て發表することが多かつた、そこで蘭印は學術提携の上から斯様な契約を申出たのである。

なほこれまでの外國からの探検隊には蘭印側から案内者をつけるか、或はその規模によりては隊員が参加することになつてゐた、今回吾々のナビレ探検では案内者は來なかつたがアンギ湖行にはコントリールが兵隊を連れ護衛と案内とを兼ね終始同行した。

採集及び旅行用具類

植物採集には、採集用鎌（長柄を有す）二本、野外用採集ゴム引袋八個、乾燥用新聞紙四十五貫目、木製プレス框十組、ブリキ製胴亂二個、特製ブリキ罐（高さ三〇糎、幅三十三糎、長さ四十七糎）拾個その他を整へた。

最後のブリキ罐は野外で採集した標本をアルコールに浸潤せしめ、火力乾燥の出来るキャンプなり、或は本據地まで送るに用ひ、罐の外圍には木框を製りその毀損を防止した。即ち野外で採集した標本をブリキ罐に詰めつゝアルコールを散布して充分に加壓し蓋を密封すると、一ヶ月は優に保存せられ何等の損傷を蒙らなかつた。なほ標本に括る小さな番號札は八千枚を準備したが不足を來した。

次に服装に就き一言し度い、熱帯は寒帯の様に周到な準備は必要が無い、だが陽光の強烈な高温で多湿の地方を旅行するには之れに適應するものでなくてはならぬ。

野外では上着を必要とせぬが餘り薄地のシャツだけでは光線を透し易く、發汗すればその蒸發を促進するから不可である、厚地の純綿布がよく、理想的なのは薄地の純毛製のものであらう。

履物は一番大切である、一行の多くはゴム底のカンバス靴、又は地下足袋に巻ゲートルを用ひた。然し私は終始、皮靴と革ゲートルを使用した、元より各人の好みによるが靴、革ゲートルは河川の渡渉にも、叢林や草原の跋涉にも工合がよく殊に革ゲートルは毒蛇や山蛙の防禦となり、又一度水に浸つても直ぐに乾燥するから好結果であつた。

宿營用具としてテント、折疊式ベッド、毛布、金巾製蚊帳、炊事道具一式を揃えた、テントはエジプト綿製のものでない限り役立たなかつたことはアンギ旅行で經驗した通りであつた、炊事器具のうちカンバス製バケツは非常に役立つた。

食糧品は米、砂糖以外は殆ど内地から持参したが、實際と計畫とは違ひ、不足の品と剩餘の品とが出来た。

救急薬も一揃持参し、マラリヤ豫防のキナ、アテブリンは爪哇で求めた、メンソレタム、萬速膏、繻帶類は豫定以上に消費が嵩んだ、蚊取線香の持参も助かつたが森林中では不思議なほど必

要が無つた。白木油(Melaleuca) 屬の葉を蒸溜して得た土人常用薬)は赤虫豫防に効果があり、その他種々の用途に使はれた。

山中探検旅行中、着替のシャツ、衣類は防濕、防水の必要上、必ずブリキ罐に容れて苦力に擔はせた、この罐は携帯に便利な大きさとした特製のものがよい。

ゴム引風呂敷は甚だ輕便で大切な品物を手輕に包み防水、防濕することが出来る。幾枚も準備するがよい。

最後に蘭印に旅行或は探検するには同地一帯のエスペラント語に相當する馬來語の習得が必要であることを強調し度い、短時日の滞在に馬來語の習得は必要が無い、通譯さへあれば不自由せぬと想像せられるが日常接する苦力達とは何かしら直接の交渉が起る、山中探検旅行に一々通譯を呼んで用事を達することは不可能であるから單語だけでも知つてゐれば便利である。又急を要する場合には絶対にその必要が起ることがある。

誰しも熱帯に旅行して一番に氣遣ひ、心配するのは健康である、どんな山奥でも寒地の様に餓死する様なことは先づあり得ない、未開地の探検には蕃人の襲撃とか猛獸(ニューギニヤでは鱷のみ)、毒蛇等の被害などを想像するがそれはめつたに會ふこと無い。

熱帯旅行で健康上、一番注意すべきことは榮養、休養、睡眠であり、普通の攝生さへ守つてゐ

れば何等心配するに及ばぬ。

(三) 植物相

ニューギニア大陸の植物相に關しては和蘭、ライデン大學の植物學教授 Dr. H. J. Lam が前記の「Blume」第一卷に可なり精しい吟味をなし、興味深い統計や有益な事實を發表してゐる、此うちニューギニア所産の植物種數と地理的分布とを参照し、左に其植物界を概説する。

ニューギニア植物の種數は前に掲げた重要文獻により總計すると次の如き結果となる。

羊齒類 八七屬、九七〇種

顯花植物 七四七屬(七三科)、五、九〇二種

合計 八三四屬、六、八七二種

尤もこのうちには重要な數科が洩れてゐるが大體の既知數を知ることが出来る。

又植物種數はニューギニア植物の實在種數の二分の一乃至三分の一位と云はれるが恐らくは二分の一内外であらう。

馬來群島、馬來半島、ニューギニアを包括するマレーシア(Malaysia)の植物種數は學者により諸説があるが、メリル博士は羊齒類以上の高等植物を四萬五千と推定し、爪哇ポイテンゾルフ

植物園の Dr. C. G. G. Van Steenis 氏は顯花植物二三四科、二、五〇〇屬、二萬種(蘭科植物、五、〇〇〇種を除く)と概算してゐる、従つてニューギニア植物の實在種數を一萬二千内外とするのは正當であらう。

次にニューギニアに産する植物中最も多くの屬を含む科を掲記すると次の通り。

Orchidaceae (蘭科) 一一六屬 三三屬

Compositae (菊科) 四八屬 二五屬

Rubiaceae (アカネ科) 四七屬 Melastomataceae (ノボタン科) 二一屬

又最も多くの種數を有する科は次の通り。

Orchidaceae (蘭科) 二、六四六種 Myrtaceae (テンテックワ科) 一七二種

Gesneraceae (イハタバコ科) 一八〇種 Zingiberaceae (メヨウガ科) 一五〇種

Ericaceae (シヤクナギ科) 一七九種

屬のうち最も多くの種類を含むもの次の通り。

Dendrobium (五七五種) Bulbophyllum (五五〇種)(以上蘭科)

Rhododendron (凡八〇種) Vaccinium (凡六〇種)(以上シヤクナゲ科)

(1) 固有植物

科に於ては隣接の濠洲に Cephalotaceae, Tremandraceae, Brunoniaceae 等多くの固有科を有するに反しニューギニヤには一つも固有科が無い。

屬では六八七屬中、固有のもの八一を算し一一・六%の割合となる、若し準固有屬二五を加へると一〇六屬で一五・四%となる。之れをヒリツピンの一、三〇八屬中、固有屬三五を有するに較べるとニューギニヤのフロラの固有屬は遙に高率であり、又ボルネオの一、一五二屬中、四七の固有屬に較べてもニューギニヤはその率が高い。

種では固有種四、六一四で、既知種の八四・七%に當り、ヒリツピンの七六・五% (七、六二〇種中、固有種、五、八三二) に比し是亦高率である。

顯花植物の科に含有する平均屬數は一・三五、種數は九二・七、一屬に含有する平均種數は八・一六である。

次に近接地域との類縁關係を見るとアジア大陸系が第一位で、この區系の植物は低地のみならず、高地帯にも多い。之れに亞ぐは太平洋系、遙に下つて濠洲系が第三位を占めてゐる。

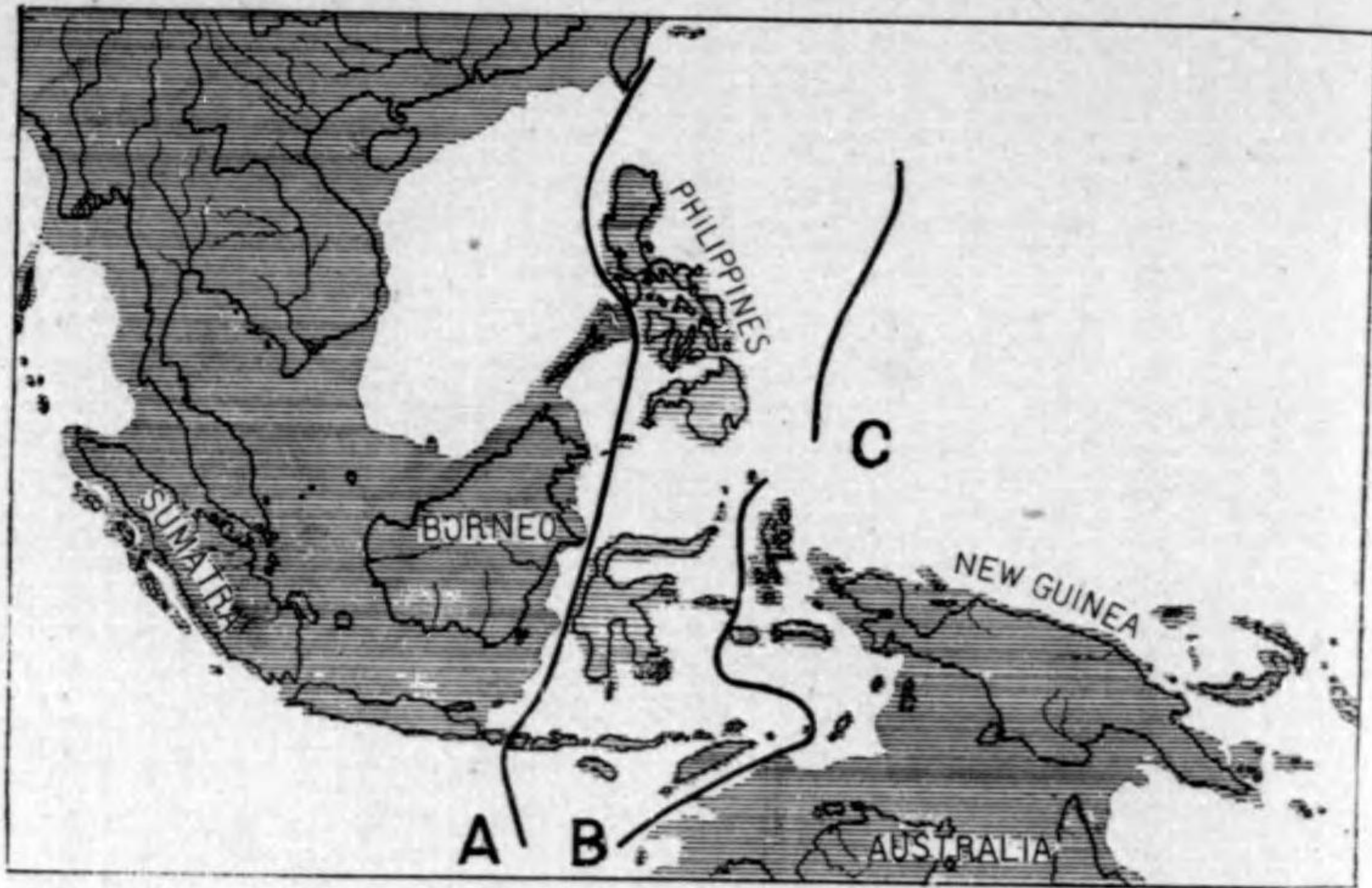
ニューギニヤのフロラが地理的に最も近い濠洲に近縁關係が薄く、却てアジア系が強く出現してゐる事實につき、ラム博士は A. WEGENER の大陸移動説に賛する SALT SIBINGA の假定説を用し次の様に説明してゐる。

濠洲大陸は始新統時代に南極大陸から分離して北方又は西北方に移動し、アジア大陸の南端に接觸したがその當時此大陸の南方には三つの孤狀をなした Orogen 即ち造山作用があつた、最北部のものは Palaw-orogen で、現在では殆ど壊滅し僅に其跡を認め得るに過ぎぬ、次に位すものは Molucca-orogen で甚しく攪亂、切斷せられ、現在幸じてその跡を認めることが出来る、次にその最南方にある Sunda-orogen は相當強い壓迫を受け、多少の破壊を見たが、東西に長く連る一帯の地形は現在なほ認めることが出来る。

是等の造山作用は永い間、絶えず続いた譯ではなく、大體三回に亘つて出来た、即ち第一回は舊三期頃稍々強く作用した、是はモルツカ・オローゲンに於て明に示されてゐる。第二回は上部中新層に於て最も強く作用し、ニューギニヤ大陸の隆起したのは其結果であらう。第三回は第三期の終り或は第四期の始め頃作用したもので、その力は最も弱く、ニューギニヤの北部山脈を隆起せしめ、同時にモルツカ及びスンダの兩オローゲンにも影響を與へた。

是れによりて見ると、濠洲がニューギニヤ大陸と接觸したのは新しい時代のことであり、且つ南極の貧弱なフロラを有する地域から離脱した爲、その植物はニューギニヤに移入しても同化する迄に至らなかつたのであらう。

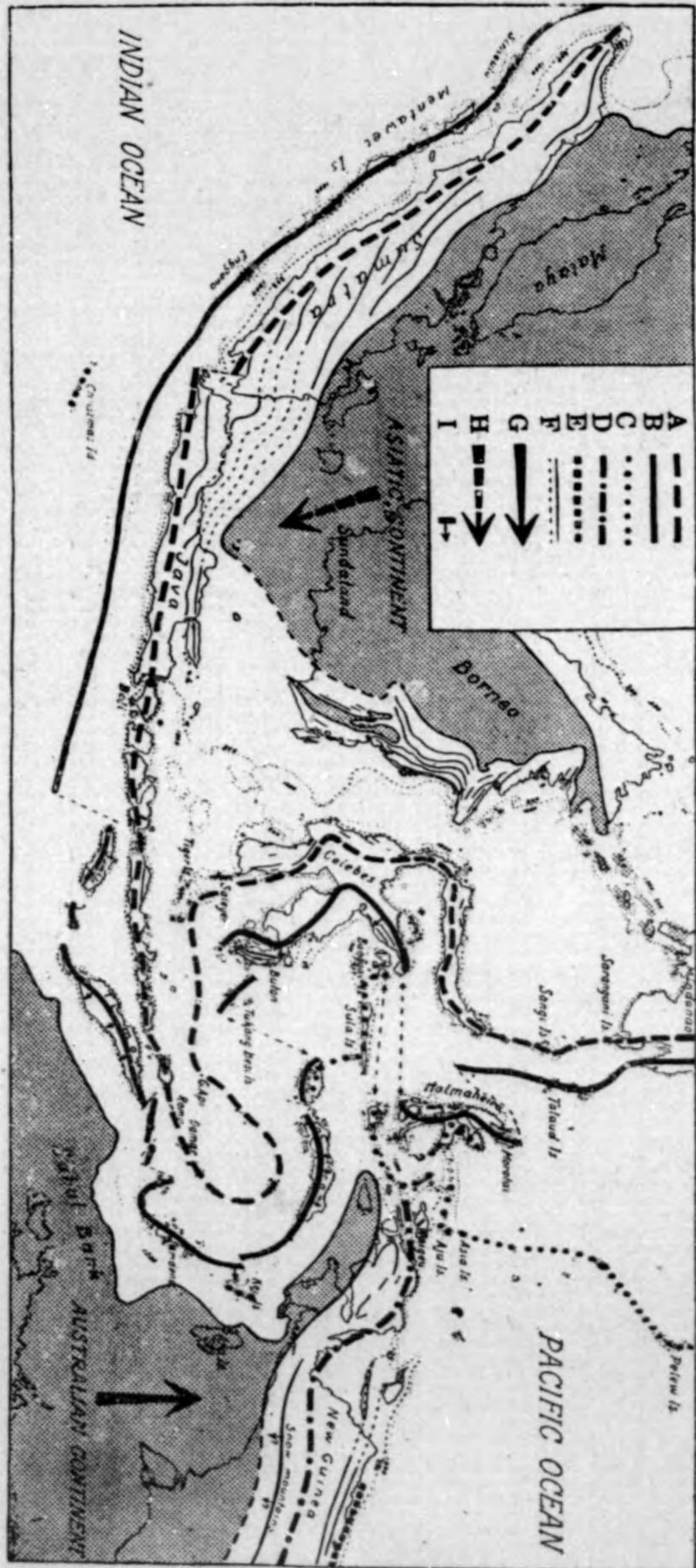
今、アジア大陸の東南一帯のマレーシヤの海深圖を取り出して見やう、この地圖で水深二〇



No. 163 水深を200米、干し上げて浮び出た陸地。Aは新ワレス線、Bウエー線。Cミクロネシアとヒリツピンを区劃する線 (原圖)

○米の海水を干し上げたと假想すると二つの大陸が干瀉により浮び上る、一つは南アジアから馬來、スマトラ、爪哇、ボルネオ等を繋ぐ大陸、他はニューギニヤと濠洲とを連結する大陸である、この二大陸の間にヒリツピンやセレベスその他の島々が浮び上がつて居るが、南方爪哇の東に横たはるバリ、ロンボックの間を抜けてボルネオとセレベス兩島の間を北上し、ヒリツピンの西側から臺灣の南、バシー海峡に至るA線は所謂、新ワレス線であり、又ニューギニヤの西、ハルマヘーラとセレベスの間を區劃するB線はウエーバー線であり、この兩線により挟まれ

No. 162 馬來地方の造山作用(造山作用の方向: Aスラバ、Bモルツカ、Cパラオ、D南ニューギニヤ、E北ニューギニヤ、F主要な傾向、G大陸作用、H同反動、I表面反動) (S. SININGA)



た区域は生物分布限界の不安定區たる「ワラセヤ」(Wallacea)である。従つてニューギニヤ大陸はこの「ワラセヤ」を隔て、馬來地方と對峙し濠洲とは同一の地続きとなり、その生物は同一系に入るべきにも拘らず、そのフロラがアジャ系である理由はウエーゲネルの地殼移動説により始めて肯定せらるゝことであらう。

(2) 植相と森林

ニューギニヤの植相は如何、茲に Dr. H. J. Lam 博士の植相圖を轉載してその一般を示すことにする。

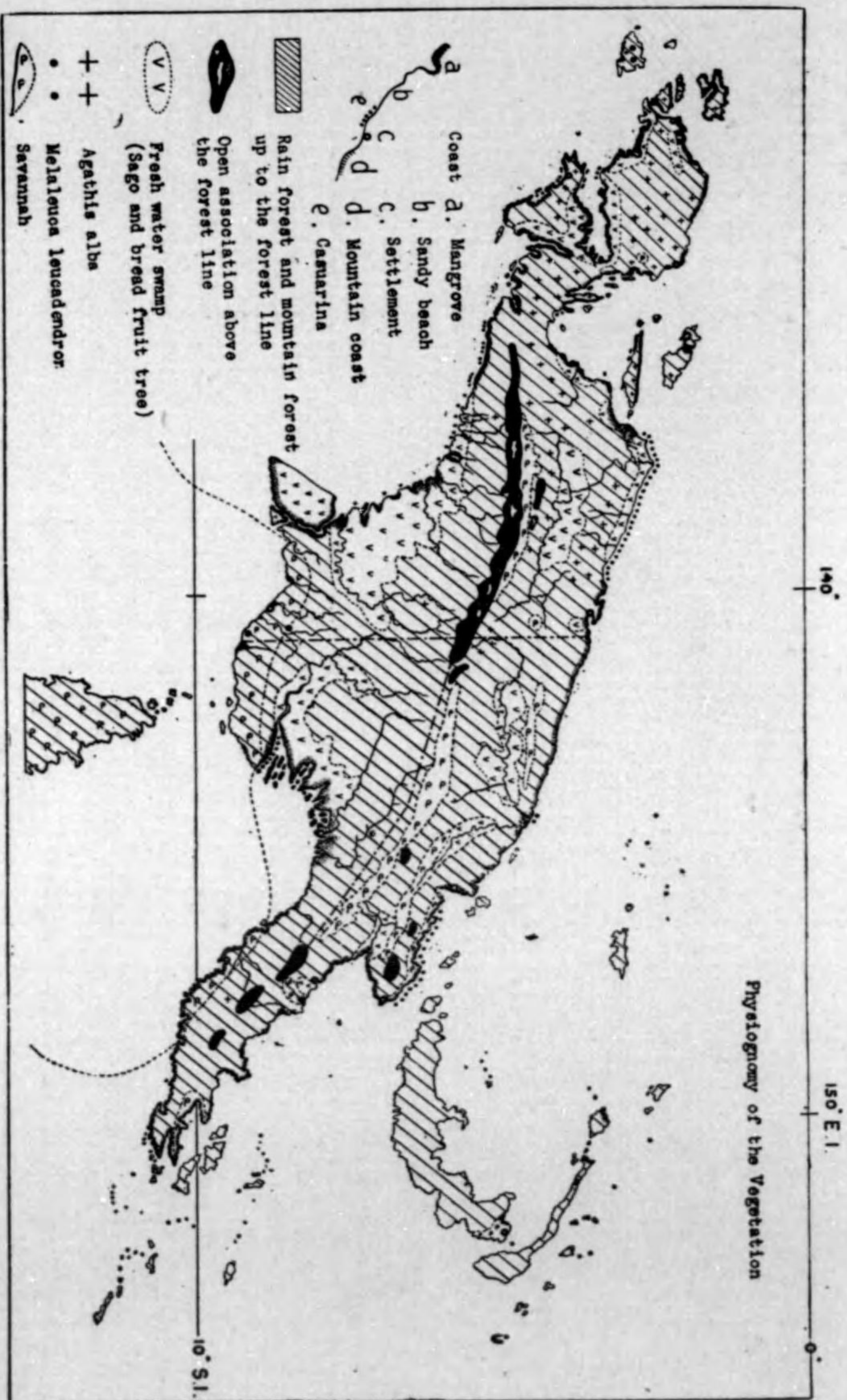
(1) 熱帯降雨森林 低地より中高地に至る大部分はこの植相により占められる、高温多濕の地帯で通直喬大なる樹林により被はれ、森林として最も有用なる樹種を含む。

(2) 紅樹林 北海岸には少く南海岸に多い、その林相はボルネオ地方のものに比べると劣る様である。

(3) 海岸林 熱帯何れの地にも見られる定型である、その樹種は二五一頁に記載する通り。

(4) 低濕地帯 マンベラモ、デュゴール流域、その他、東南海岸地帯の低濕地帯で、海岸に近き地方ではサゴ椰子林が多い。

(5) 高地帯 恒雪線以上は樹木が生育せず、僅少の灌木と高山植物(草本)とが生育する。



No 164 ニューギニヤの植相

(Blume & vj)

次に森林としての特長は如何、蘭領ニューギニアの森林に關する報告は貧弱である、その原因は從來植物學者が採集した標本は灌木と草本とに過ぎず、樹木は相當採集せられたが是を鑑定してその樹種を決定するに至つてゐないと云ふにある、然し濠洲領ではかの LANE-POOLE の調査に係る名著(前掲)があり、従つて本書により蘭領の森林も恐らく同一であらうと云ふ推論に立脚して想像するより外ない。

低地の降雨森林帯のうち、周期的に河水の氾濫する地帯はスマトラ、ボルネオに近似の森林からなり、その他の地方は二羽柿科林木を缺き、次の樹種が最も普通である。

Dracontomeles mangiferum Bl.

Pometia pinnata FORST.

Intsia bijuga O. KRZE. (*Intsia amboinensis*) (太平洋鐵木)

Pycocarpus indicus WILLD. (花欄^{アハラ})

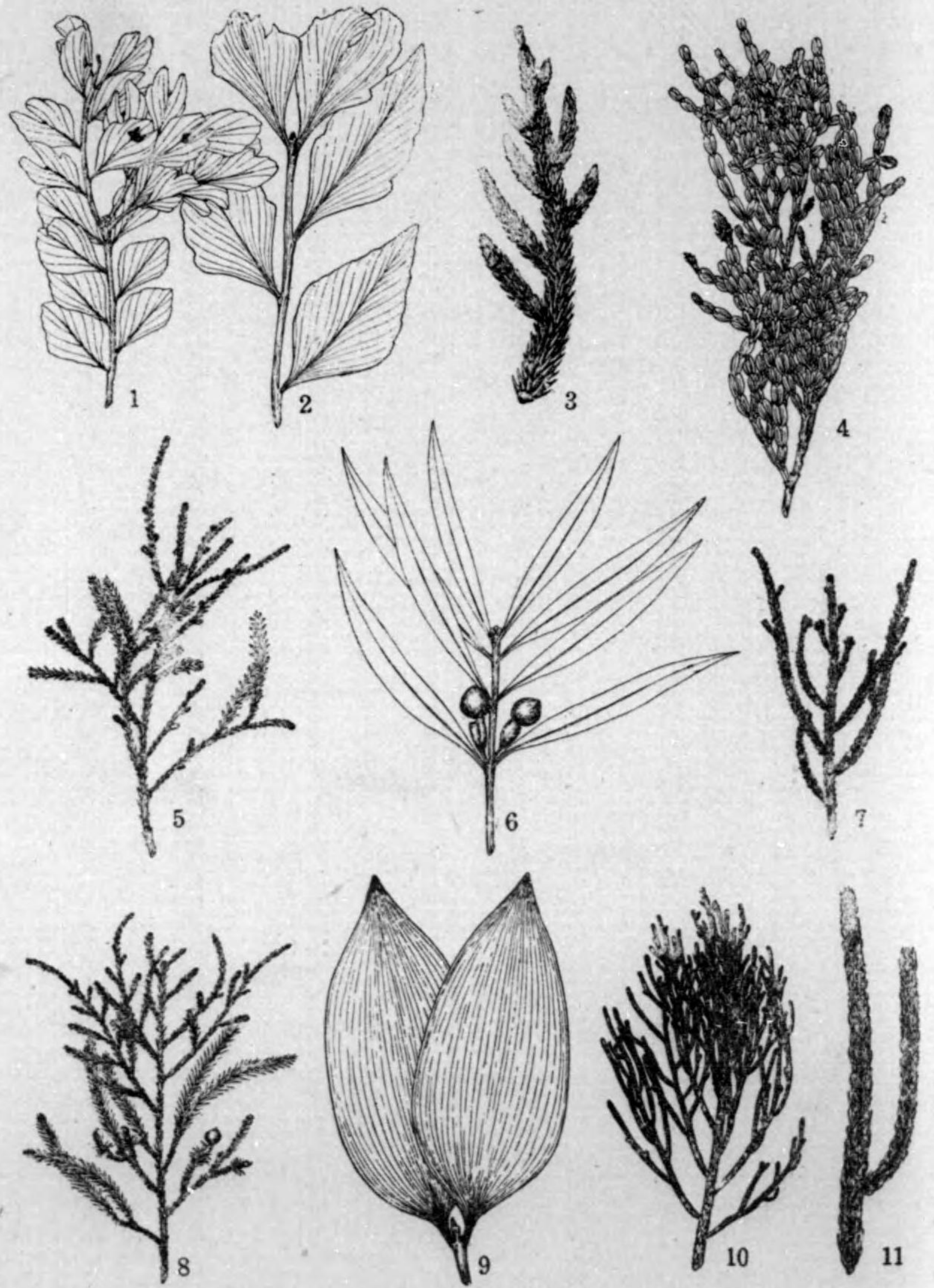
Oedomeles samarana MIQ.

Pterocymbidium sp.

Planchonia tinorensis Bl.

このうち、太平洋鐵木は耐久力が大であり、花欄材は家具として重要である。

- | | |
|--|--|
| (1) <i>Phyllocladus hypophyllum</i> HOOK. f. | (7) <i>Dacrydium</i> WALL. |
| (2) <i>Arucaria Cunninghamii</i> var. <i>papuan</i> LAUTB. | (8) <i>Podocarpus imbricatus</i> Bl. |
| (3) <i>Labocedrus afakensis</i> GIBBS | (9) <i>Podocarpus Blumei</i> ENDI. |
| (4) <i>Podocarpus papuanus</i> RIDL. | (10) <i>Dacrydium novo-guineense</i> GIBBS |
| (5) <i>Podocarpus nerifolius</i> DON | (11) <i>Dacrydium novo-guineense</i> GIBBS |
| (6) <i>Podocarpus nerifolius</i> DON | |



No. 165 ニューギニア産針葉樹各種 × 2/5

(原圖)

此低地帯森林の一ヘクタール當り利用蓄積は馬來地方に比べると下位にある。その主なる原因は有用樹種が散在する爲であり、従つて製材事業はボルネオ、スマトラ、マラツカ或はヒリツピン等に比し多少不利な點がないでもない、然しニューギニヤにはダマル、籐の如き無限の副産物がある、之れを合理的に利用する事が最も肝要であらう。

針葉樹は次の七屬が知られてゐるが何れも高地帯に産するものであり、その利用も將來大に期待せられてゐる。

Araveuria, Agathis, Callitris, Dacrydium, Libocedrus, Phyllocladus, Podocarpus.

(四) 探 檢 結 果

(1) 採集植物の種類

今回、我々がニューギニヤで採集した植物は、野帳の番號によるとナビレに於て一、四九四、モミ及びその附近に於て四九七、又アング湖往復とその湖水の周圍とに於て八六〇、合計二、八五一點であつた。

是等の標本を科別となしその種数を分類統計すると次の如くなる。

採集したる植物種數表

種	類	木	本	草	本	合	計				
								羊齒類		雙子葉類	
								裸子植物	被子植物	離瓣花	合瓣花
			一一		三四六	一	三〇〇				
			一四		七四六		一四				
					三五七	六六	三〇〇				
			八二		九三	八二二	三〇〇				
					四二二	四二二	七九九				
總	計		一一〇		七九九	二、〇〇九	二、〇〇九				

前表に依り、今回採集した全植物は木本に於て一、二一〇種、草本に於て七九九種、計二、〇〇九種となり、うち三一一種はシダ、針葉樹は僅に一四種に過ぎぬ、又單子葉は四二二種となつてゐる。

次にダルマン、アング湖、兩地方採集の植物科名を掲げ、各科に含む草本と木本とを分類して見ると左表の通り。

科名	Families	草本 Herb	木本 Woody
Proteaceae			1
Santalaceae			7
Opiliaceae			5
° Olacaceae			4
Loranthaceae			11
° Aristolochiaceae			3
Polygonaceae		5	
° Amaranthaceae		3	
Nyctaginaceae		1	3
* Caryophyllaceae			2
* Ranunculaceae			11
° Menispermaceae			9
Magnoliaceae			31
Anonaceae			13
° Myristicaceae			12
Monimiaceae		2	16
Lauraceae			1
Hernandiaceae			2
° Capparidaceae		2	
* Cruciferae			3
Nepenthaceae		1	2
* Saxifragaceae			4
Pittosporaceae			7
Cunoniaceae			2
* Hamamelidaceae			9
* Rosaceae			1
° Connaraceae		5	46
Leguminosae		1	
Oxalidaceae			2
° Linaceae			37
Rutaceae			3
Simarubaceae			6
Burseraceae			16
Meliaceae			

植物採集科名と種數

°ダルマン地方, *アング湖地方, 印無きはすべて兩地方に産す

羊類齒 <i>Pteridophyta</i>			
科名	Families	草本 Herb	木本 Woody
Marattiaceae		6	
Hymenophyllaceae		18	
Cyatheaceae		1	11
Polypodiaceae		230	
Gleicheniaceae		12	
Schizaeaceae		6	
* Equisetaceae		1	
Lycopodiaceae		12	
Selaginellaceae		12	
Psilotaceae		2	
計		300	11
裸子植物 <i>Gymnospermae</i>			
° Cycadaceae			1
Podocarpaceae			9
* Araucariaceae			1
* Cupressaceae			1
Gnetaceae			2
計		—	14
被子植物 <i>Angiospermae</i> (離瓣花) (<i>Polypetalae</i>)			
Piperaceae		2	16
Chloranthaceae		1	
Fagaceae			3
° Casuarinaceae			2
Ulmaceae			6
Moraceae			52
Urticaceae		15	32

科名	Families	草本 Herb	木本 Woody
Combretaceae			4
Myrtaceae			48
Melastomataceae			31
Oenotheraceae		2	
* Halorrhagidaceae		2	2
Araliaceae			18
Umbelliferae		6	
計		66	746
(合瓣花) (Gamopetalae)			
Clethraceae			3
Ericaceae			25
* Epacridaceae			5
Myrsinaceae			35
Sapotaceae			6
° Ebenaceae			1
Symplocaceae			7
Styracaceae			1
Oleaceae			4
Loganiaceae		1	18
* Gentianaceae		3	
Apocynaceae			25
Asclepidiaceae		1	29
° Convolvulaceae		3	1
Borraginaceae		2	6
Verbenaceae			16
Labiatae		8	
Solanaceae			4
Scrophulariaceae		5	
Bignoniaceae			4
Gesneraceae		14	7
* Lentibulariaceae		4	

科名	Families	草本 Herb	木本 Woody
Malpighiaceae			3
Polygalaceae		2	
Euphorbiaceae		1	86
Anacardiaceae			11
° Celastraceae			5
Aquifoliaceae			2
Hippocrateaceae			1
Stackhousiaceae		1	
Icacinaceae			7
Sapindaceae			20
Balsaminaceae		4	
Rhamnaceae			9
Vitaceae		1	18
Elaeocarpaceae			17
Tiliaceae			4
° Malvaceae			3
Sterculiaceae			6
Dilleniaceae			17
Theaceae			10
Hypericaceae		1	11
° Dipterocarpaceae			2
Violaceae		1	2
Flacourtiaceae			7
Datisceae			1
Begoniaceae		7	
Wikstroemiaceae			8
Lythraceae			1
Sonneratiaceae			1
Lecythidaceae			4
Rhizophoraceae			4

科名 Families	草本 Herb	木本 Woody
Acanthaceae	12	5
Rubiaceae	8	144
Cucurbitaceae	8	1
* Campanulaceae	1	
Goodeniaceae		3
Compositae	23	7
計	93	357
(單子葉植物) (Monocotyledonae)		
Pandanaceae		31
* Sparganiaceae	1	
◦ Triuridaceae	1	
Gramineae	51	7
Cyperaceae	63	
Palmae		29
Araceae	26	
◦ Flagellariaceae		2
* Xyridaceae	1	
* Eriocaulaceae	2	
Commelinaceae	6	
* Juncaceae	2	
Liliaceae	5	13
◦ Amaryllidaceae	2	
◦ Dioscoreaceae	4	
* Iridaceae	1	
Zingiberaceae	35	
◦ Marantaceae	6	
Orchidaceae	133	
Centrolepidaceae	1	
計	340	82
合計	1210	799
總計	141 科	2,009 種

前表により一屬中多くの種数を含むものは *Ficus* (四七種) *Piper* (一七種) *Freyinetia* (一七種) *Pandanus* (一五種) であつた。

なほ採集植物中、二、三特記すべき點を擧ぐれば次の通り。

羊齒類の採集品が最も多いのは植物の普偏性を示すものである、この標本は目下、東大、理學部、伊藤洋理學博士の手によりて研究せられてゐる、木性羊齒の十一種は何れも高地帯の採集である。

アカネ科は採集植物の中、第二位の數を得た、木本と草木を含むが木本のものが多い。

蘭科は第三位にある、我々の採集地域では殆ど着生蘭で地上蘭は極めて稀であつた、蘭科は熱帯のフロラの重要なものであるが、ニューギニヤの蘭は二千五百種以上に達すと云はれるほど種類に富んでゐる、蘭科は専門家が採集すべきであらう。採集標本は羊齒類と同様、東大、理學部、津山尙學士の許で研究せられつゝある。

タコノキ科中 *Pandanus* 屬は昭和十四年、東大、農學部、猪熊農學士が採集し、その研究を私に委ねられたので、今回の採集には甚だ役立つた、猪熊學士の採集品中には四新種があつたが今回も亦、四新種が加へられる見込みである。

Freydenia 屬は海岸から遠ざかつた高地帯に多いが、實を着けたものが極めて少いことは個體を採集する上に於て不利であつた、合計十七種を得た、うち三種は花序が腋生するもので斯様な種類は、ニューギニア以外には知られてゐない。既知のもの八種と、九新種を得た。

次に地理的分布上、興味を感じしめたのは、ミクロネシアで固有と考へた次の種類

Cellis palauensis K. et H., *Dipodium freydenioides* FUKUYAMA, *Hypserya ponapensis* KANEH.,
Slyra rostrata HOSOKAWA

が今回の採集品中のものと合致することである、他日の研究に俟つことにする。

(2) 採集地帯の植物相

吾々の植物採集は、大體三個所に分つことが出来る。ナビレ地帯、アング湖地帯及びモミ附近である。

(1) ナビレ地帯

(a) ナビレよりダルマン迄

ナビレを基點としてナビレ川に沿ふて上り、ダルマンに至るまでの沿道、及び歸途ブミ川沿岸の森林地帯に於ける採集である。

ナビレはヘールフィンク灣の東側に面する砂濱に近き一寒村で、茲にはダルマン地方で採集したダマルの貯藏倉庫が設けられ、南洋興發會社の社宅が數軒並び、海岸に沿ふてパプア苦力の小屋が立つてゐた。

この地帯の植物は海岸性の汎熱帯植物で、オホハマボウ、タマフリノキ、ハスノハギリ、クサトベラ、ミフクラギ、モンパノキ、ゴバンノアシ、ヤハマアヲキ、木麻黄の如き樹木や、コガネシダ、グンバイヒルガホ、シヒノキカヅラ、イソフヂ、スナザサ、ハマナタマメ、ハマアヅキなどがあつた。

この海岸の背後は密林が續く波状の丘陵地帯で、その低き凹地を縫ふてナビレ川が羊腸の如く流れてゐる、一度豪雨が降ると忽ち氾濫し、その沿岸は泥土を沈澱する濕地に化して仕舞ふ。低濕地に於ける森林は次の

Anthocephalus indicus RICH., *Sarcoccephalus undulatus* MIO., *Intsia bijuga* O. Ktze. (太平洋鐵木) *Ocmeles sumatrana* MIO., *Pometia pinnata* FORST. (バンリュウガン)

の五木が最も優勢で、就中「太平洋鐵木」は白色の滑な樹皮を有し、屢々偉大な板根を有するから最も目につき易い、バンリュウガンの大きな樹冠は強い日光の直射を遮り、その樹蔭がほの暗きまで茂つてゐた。

ナビレ川は前に述べた様に、雨期に氾濫するから河床は變化し易く、川幅も一定しない、私達はこの河床を歩みつゝ兩岸の植物を採つた、森林中優勢木に壓せられた小、中喬木も岸邊から射入する陽光を受け、花實を着けたものが多かつた。樹木中顯著のものは次の通り

Buchanania nabilensis K. et H.

Chrysophyllum Roxburghii DON

Erythrospermum caudatum GILG

Garcinia pyramida K. et H.

Garcinia waresensis K. et H.

Vatica papuana DYER

この他、現在鑑定中に係る左の諸屬がある。

Canarium, *Celtis*, *Chisocheton*, *Gynometra*, *Gonocaryum*, *Ficus*, *Horsfieldia*, *Laportea*,

Manitoca, *Polypathia*, *Terminalia*, *Syzygium*.

又蔓莖植物には次の種類があつた。

Capparis zippeliana MIQ.

Durandea parviflora STAFF

Enlada phaseoloides MERR.

Gudum gnomonoides BRONG.

Ichnocarpus frutescens R. Br.

Melodinus landolphioides LAURB. et SCHUM.

Mucuna tomentosa WARB.

Papuechites acuta MGR.

Snyghex pacifica SEM.

Tournefortia sarraementosa LAM.

この外、藤 (*Calamus*) の類が甚だ多く、又未鑑定の *Ventilago*, *Smilax* 屬などがあつた。

形態上、特に目についたのは、幹から二米にも及ぶ穂状の花序を懸垂する *Ficus myriocarpa* MIQ. や、川の中洲或は岸邊にシヤクナギに似た葉を有する *Ficus* sp. が叢生せるもの、又長ち一米半にも達する大きな楕圓形の葉をつけた *Ficus dammaropsis* DIELS などであつた。又 *Gyathea* 類もこの附近から出現した。

(b) ダルマン 附近

ナビレからダルマン迄の行程四十五キロ、心持ち少しづゝの登り道で、最後の坂道二〇〇米を登りつめると、第四期又は第三期の新層一面に蛇紋岩、斑礫岩、閃綠岩の母岩が出現し、此母岩は風化作用により熱帯特有のラテライトに變じ、表面には所々に褐鐵礦や赤鐵礦が現はれた、従つてこゝに生育する植物は特種のもが多く、植相は一變して針濶混淆林となり、*Agathis alba* FOXW., *Daerydium elatum* WALL., *Podocarpus nerifolia* DON が現はれた、その最初の種類はダマル樹で通直な幹と林表に聳立する濃綠色の樹冠が目立つた。又潤葉樹中 *Casuarina nodifolia* FORST. が川の岸邊に淺綠色の細葉を垂れ、針葉樹に似た樹相を呈してゐた。又下部に殆ど無かつたタコノキ科の植物も出現した、タコノキでは次の種類を得た。

Pandanus foveolatus KANEH.
Pandanus permicron KANEH.

Pandanus Inokunae KANEH.
Pandanus pseudosyncarpus KANEH.

最初の種類は今回、私の発見したもの、他の三種は、先年、猪熊農學士の採集したもの、このうち *Pandanus permicron* は無葉、葉はカヤの如く細長、一個の小さい紅色の實を頂生する、叢林の

密生する日蔭に生育し、本屬中その形が最も小さいもの、一つであらう。又 *Pandanus pseudosyncarpus* は穂状の果序が短縮し、擬果状をなす珍種で、この種の群はニューギニヤから四種程知られてゐる。又ツルタコノキでは次の種類を採集した。



No. 166 タコノキ(新種)(金平)
(*Pandanus foveolatus* KANEH.)

Freycinetia klossii RIDL.
Freycinetia oblanceolata MARTELLI
Freycinetia pseudo-insignis WARB.

Freycinetia Inoueii KANEH.
Freycinetia laciniolata KANEH.
Freycinetia laguncaripa WARB.
Freycinetia platyphylla KANEH.

このうち、最後の種類は、長さ一五糎、徑四—五糎にも達する大きな深紅色の美しい實を頂生

するニューギニヤ特産のものである。

ダルマン一帯には又椰子の種類が甚だ多い、その種類は二、三十種にも及ぶ、その鑑定は甚だ困難であるが次の諸屬があつた。

Adelonenga, *Areca*, *Daemonorops*,
Calypthrocalyx, *Grammophyllum*, *Licuala*,
Linosydis, *Orania*, *Ptychosperma*,
Sonnerata.

又形態上珍しいのはコップ状を呈したウツボカヅラの一種 *Nepenthes ampullaria* JACK で地上に匍匐し、或は樹木に絡まり、そのウツボは、パパアが水を飲む器として使用して居た。主林木の重なるものには、未鑑定種の外



No. 167 ツルタコノキ (金平)
Freycinetia pseudoinsignis WARB.

に次の種類があつた(前掲の針葉樹を除く)。

Calophyllum caudatum K. et H.
Garcinia riparia K. et H.

Calophyllum rufinerve K. et H.
Kayea macrophylla K. et H.

Stereulia gigantifolia WARB.

Syzygium dallmannense K. et H.

Syzygium percrassifolium K. et H.

又小喬木、灌木類で左の種類と諸屬とがあつた。

Aceratum hypoleucum K. et H.

Campnosperma montana LAUTB.

Crataeva membranifolia MIO.

Elaeocarpus dallmannensis K. et H.

Ptilosporum Ledermannii PRITZEL

Astronia, *Canthium*, *Dissochaeta*, *Drimys*, *Ficus*, *Geniostoma*, *Isora*, *Rinorea*, *Schuurmansia*,

Timonius.

又蔓莖類には左の種類と諸屬とがあつた。

Alyxia Pullii MGF.

Durandea dallmannensis K. et H.

Flagellaria indica L.

Parsonsia rubra K. et H.

Palmeria dallmannensis K. et H.

Asclema, *Columella*, *Piper*, *Schizostachyum*, *Smilax*, *Solanum*, *Tetracera* 各屬

このうち *Schizostachyum* はツル性の竹である。

この地一帯の森林は疎開し、加ふるに湿度が高き爲、着生植物多く次の諸屬を採集した。

Fagraea, *Henslowia*, *Hydnophytum*, *Medinilla*, *Myrsinodoma*, *Rhododendron*, *Schefflera*,
Timonius, *Vaccinium*.

着生植物中 *Medinilla* には美花を有するもの多く、その種類も豊富であつた、特に蘭科植物は他地方に於て見ざるほど種類に富んでゐた。

(c) ブミ川沿岸

ダルマン一帯を採集後、ブミ川を丸木舟で下つた、この河岸の植物には花、實が多く多数の種類を得たが、舟を止めつゝ採集することは相當難儀であつた、然しダルマンからビバック・ブミまで陸路四十八キロは陸地と舟とで交互に採集した、このブミは海拔三〇〇—四〇〇米、ラテライトが出現し、その植物相はダルマンと同一型で *Agathis alba*, FOXW., *Podocarpus Blumei* ENDL. の針葉樹があつた、又その森林が疎開せる爲、蘭類が多く、樹木中にも珍種が少くなかつた、即ち次の如き新種を得た。

Aemena novo-guineensis K. et H.

Aisopetalum tetramerum K. et H.

Elaeocarpus hebecarpa K. et H.

Rapanea boemiensis K. et H.

Santiera boemiensis K. et H.

又タコノキ科に屬するものに次の種類があつた。

Pandanus boemniensis KANEH.

Freycinetia angustissima RIDL.

Pandanus pseudo-papuanus MARTELLI

Freycinetia cyrtocarpa KANEH.

ブミで採集した植物には未鑑定のもものが相當に多く今茲に掲記し得ぬことを遺憾とする。



No. 168 ツルタコノキ (新種) (金平)
Freycinetia cyrtocarpa KANEH.

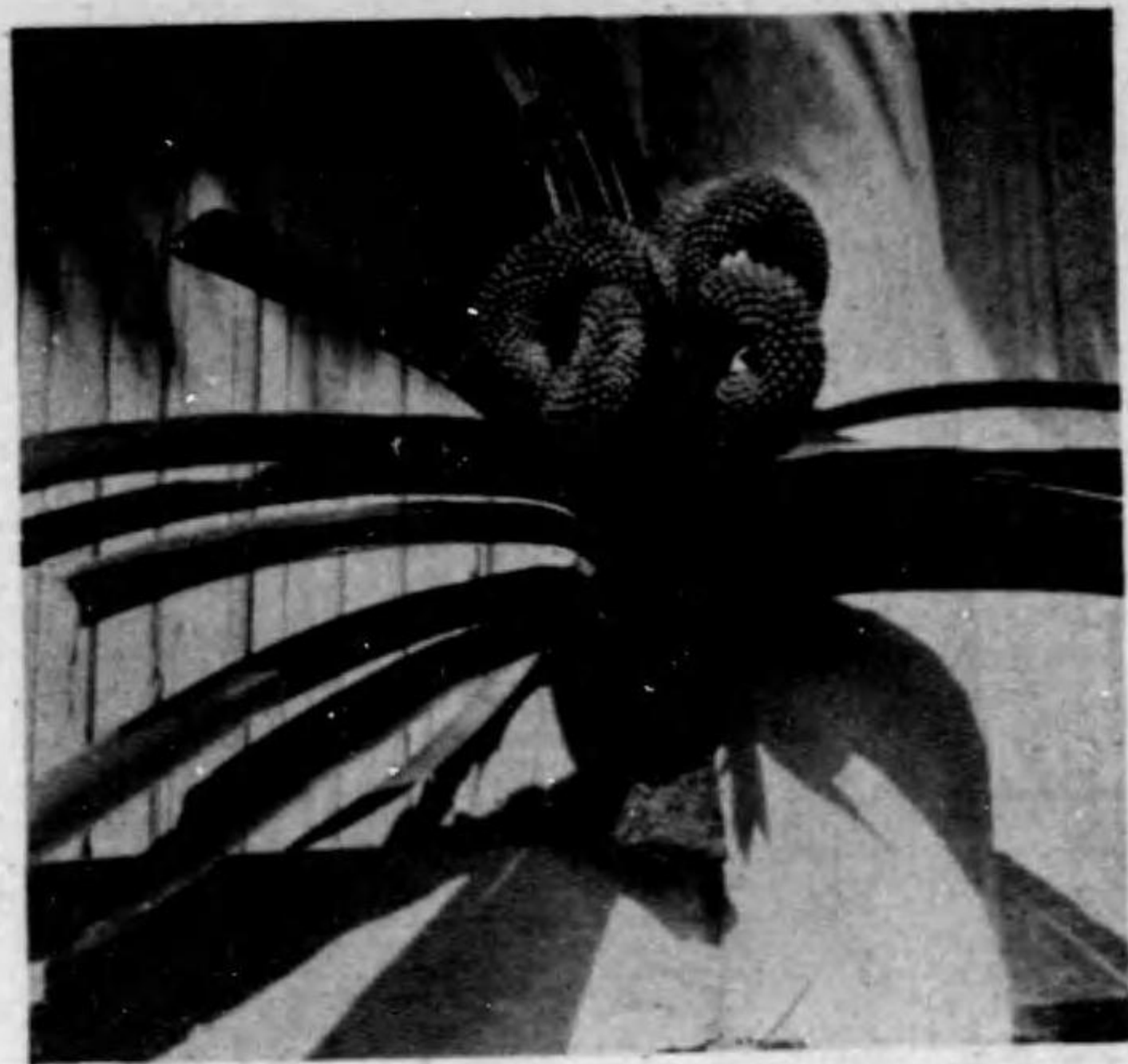


No. 169 ツルタコノキ (金平)
Freycinetia angustissima RIDL.

ブミ川の沿岸には野生の甘蔗が砂礫地に密生し、林縁の喬木には蔓莖が絡み壯觀であつた、特に *Macrozamia* の種子が空中を滑走して偉觀を呈して居たことは前に記した通りである。

(2) アンギ湖地帯

ニューギニヤの鳥頭^{ホーハコツツ}、マヌコワリの南、



No. 170 ツルタコノキ (新種) (金平)
Freycinetia spiralis KANEH.

ヘールフィンク灣に沿ふたモミ部落の西方山中、凡三十餘キロ、途中三泊行程(里程はわかつて居る筈だが蘭印官憲は之れを發表せず、又教へず)の地にアンギ湖がある、この湖は兩湖からなり、手前の近き方は女湖、奥の方を男湖と云ふ、湖面は海拔一、八〇〇米と云はれるが實際は、男湖の方が女湖よりも凡二〇〇米計り高い、この女湖の水は溢れて北の濕原をぬけ、チラン川となりランシキ川の源をなしてゐる。

吾々はこの兩湖に達する沿道、又兩湖の分水嶺コエベレ山、その湖畔の叢林及び原始林、並に男

湖畔の部落、イライ村の近郊森林を採集した。

アンギ湖に初めて探検したのはマヌコワリで十數年間、名理事官として有名であつた ^{カネ}

OOSTERZEE である、彼は一九〇四年、四月、相當困難な事情の元にこの地に往復した、その後

一九〇八年、採集家 PRATT が二人の子供を同伴して登つた、又一九一二年、ニューギニア探検隊（一九一一年—一九一二年）附、防疫官 GJELLERUP が鑛山技師と共に登り多数の標本を得て歸つた、然し不幸にしてその標本の多数は運搬中、苦力が逃げ出した爲、紛失するに至つた、その残餘の標本は研究資料となつて「Nova Guinea」に發表せられた。

一九一三年、英國の L. S. GIBBS 女史は爪哇を経由してマヌコワリに來り、同十一月、アングに登つた、この湖水に登るには北海岸からも行けるが同女史はモミの北方、ワリヤツブ、即ち吾々の登山した同じ登り口から這入り、アング湖のうち女湖の西側のコエベレ山まで採集した、その足どり、滞在日數は、その旅行記に、はつきり書き記されてゐない。

同女史が出立前、モミ海岸の日本人のプランテーションを訪問した處、その父子は同女史と同行の許可を得てゐたと前掲の書に記してゐる、此日本人は現今のモミ農場の開拓者たる、細谷十郎太氏父子と思はれる、果して同行して登山したかどうか。

ギツプス女史の採集當時は道路も無く、勿論精確な地圖があつた譯ではない、谷を隔て、首狩の蕃人が一行をジツト眺めて居たと云ふ位、無氣味な旅行であるから不自由、不便は並大抵で無かつたと思ふ、にも拘らず三百三十種の標本を持ち歸つた。

女史はロンドンに歸着後、前記の著を出版し、その採集目錄三百十七種中（内六十六種は羊齒

類以下）

Gibbsia RENDLE (Urt.),

Idenburgia GIBBS (Monim.)

Pektogyne BAK. f. (Melast.),

Palmerwandenbroeckia GIBBS (Aral.)

の四新屬と一百の新種を發表した、なほ一新科を創設したが、この科は後に至り、他科に入れられ消失した。その採集標本の數に比して新發見の種類が如何に多いかを窺ふことが出来る。

我々の今回の採集は、ギツプス女史と殆ど同一の行路であつたと思はれるが、當時と今回とは、旅行の難易に格段の差があり、従つて採集に全力を盡すことが出来た。即ち吾等の採集標本種數は八百六十で、ギツプス女史の二倍半以上に當つて居る。

今回アング地方採集の結果、次表の如き同地産新記録屬を得たのみならず Hamamelidaceae に屬する *Mytilicarpus* の新屬を發見した。同表中 *Anthobembia*, *Ocdamyrtus* 及び新屬 *Mytil' carpus* はニューギニアの固有屬であり、又 *Sieopsis*, *Langetia*, *Puleria*, *Cyathodes* は今回の採集によりニューギニアの新記録屬となつた。なほこの地帯採集中、木本の新種は相當多數に上る見込みで、後日の發表にまつことにする。

アング地帯新記録属(括弧内の数字は種数)

Apocynaceae.....	<i>Clitandropsis</i> (1), <i>Alyxia</i> (4).
Bignoniaceae.....	<i>Pandorea</i> (1)
Chloranthaceae.....	<i>Chloranthus</i> (1)
Clethraceae.....	<i>Clethra</i> (1)
Cunoniaceae.....	<i>Betchea</i> (1)
Elaeocarpaceae.....	<i>Echinocarpus</i> (1)
Epacridaceae.....	<i>Cyathodes</i> (1), <i>Leucopogon</i> (2)
Euphorbiaceae.....	<i>Acalypha</i> (1), <i>Claoxylon</i> (1) <i>Euphorbia</i> (1), <i>Mallotus</i> (2), <i>Macaranga</i> (2) <i>Langetia</i> (2)
Gramineae.....	<i>Schizostachyum</i> (1)
Guttiferae.....	<i>Calophyllum</i> (1), <i>Garcinia</i> (1)
Hamamelidaceae.....	<i>Mytilicarpus</i> (1), <i>Sycopsis</i> (1)
Lauraceae.....	<i>Cryptocaria</i> (1), <i>Actinodaphne</i> (3)
Loganiaceae.....	<i>Fagraea</i> (1), <i>Geniostoma</i> (1) <i>Buddleia</i> (1)
Loranthaceae.....	<i>Loranthus</i> (1)
Magnoliaceae.....	<i>Talauma</i> (1)
Melastomataceae.....	<i>Dissochaeta</i> (1) <i>Astronia</i> (2)
Monimiaceae.....	<i>Kibara</i> (1), <i>Levieria</i> (1), <i>Anthobembix</i> (1)
Moraceae.....	<i>Ficus</i> (4), <i>Broussonetia</i> (1) <i>Streblus</i> (1)
Myrsinaceae.....	<i>Discocalyx</i> (1), <i>Embelia</i> (2) <i>Rapanea</i> (7)
Myrtaceae.....	<i>Octamyrtus</i> (1), <i>Decaspermum</i> (2)
Oleaceae.....	<i>Platea</i> (1)
Oleaceae.....	<i>Linociera</i> (1)
Pittosporaceae.....	<i>Pittosporum</i> (1)
Rhamnaceae.....	<i>Rhamnus</i> (1), <i>Alphitonia</i> (1)
Rosaceae.....	<i>Pygeum</i> (1)
Rubiaceae.....	<i>Hydonophytum</i> (1), <i>Wendlandia</i> (1)
Rutaceae.....	<i>Evodia</i> (3), <i>Melicope</i> (1), <i>Halfordia</i> (2)
Sapindaceae.....	<i>Guioa</i> (1), <i>Sarcopteryx</i> (1)
Sapotaceae.....	<i>Pouteria</i> (1)
Saxifragaceae.....	<i>Polyosma</i> (3)
Theaceae.....	<i>Ternstroemia</i> (2), <i>Eurya</i> (2)
Thymelaeaceae.....	<i>Wikstroemia</i> (1)
Ulmaceae.....	<i>Trema</i> (1)
Urticaceae.....	<i>Cypholohpus</i> (2), <i>Procris</i> (1) <i>Boehmeria</i> (1).
Verbenaceae.....	<i>Callicarpa</i> (1)
Vitaceae.....	<i>Tetrastigma</i> (2)

さて、アング湖の植物にはどんな種類があつたか、左にその概況を記して見やう。
アングに登るに際し、我々はランシキ川の河口に近い基地から直に密林中に進んだ、この河口は一帶の低地帯で、植物には特記するものは無いが、海拔七〇〇米附近に竹林が出現したこと、森林樹種が登るに従つて次第に小喬木に變じ、蘚苔類が地上にも樹上にも、目立つて増えたことは型の通りであつた。かくて二、〇〇〇米の湖畔に達した時、林相は何時の間にか一變してゐるのに氣が付いた。

女湖の東側、男湖と女湖との間に横たはる尾根筋 *Koebre* 山は、今回の採集旅行中收穫の最も多かつた處、特に林縁や叢林では無数の珍しい、しかも立派な標本がとれた。この附近は屢々火災の被害を受けた結果、その樹木は何れも耐火性が強く、中にも *Baobab frutescens* L. が純林状をなし、又風衝の強い處には *Xanthomyrtus prostratus* Diels が地面を低く被覆し、火災の害から免れた林縁のみ固有の森林が見られた、この森林は殆ど乾性型で、樹高は通常五—六米、風衝強き所では二—三米以下のものが多かつた。

主林木の *Myrtaceae* が斷然多いことはその特色であり、又蟻植物としてニューギニヤ固有属の *Myrmecodoma arfakiana* Becc. が地上にも、樹幹や枝にも、澤山あつたことは一奇觀で、その太い莖が水分に富むことから察すると、耐火性が強く、度々の火災にも堪えたに違ひ無い。

次に重なる樹種を列記する

- (一) Myrtaceae (チンニンタン科)
Mezansia ramiflora var. *humilis* DIELS
Rhodomyrtus novo-guineensis DIELS
Syzygium angiensis K. et H.
Syzygium arfakense K. et H.
Tristania oreophylla DIELS
- (二) Elaeocarpaceae (ホルトノキ科)
Elaeocarpus amabilis K. et H.
Elaeocarpus arfakensis SCHLTR.
Elaeocarpus raphioepidifolia K. et H.
- (三) Euphorbiaceae (タカトウダイ科)
Daphniphyllum gracile GAGE
- (四) Symplocaceae (ハコノキ科)
Symplocos arfakensis GIBBS
- Xanthomyrtus arfakensis* DIELS
Xanthomyrtus caudatus K. et H.
Xanthomyrtus gracillimus K. et H.
Xanthomyrtus koebrensis DIELS
Xanthomyrtus verovutus K. et H.
- Sericolea leptophylla* K. et H.
Sericolea novo-guineensis GIBBS
- Langletia papuana* K. et H.
Symplocos novo-guineensis GIBBS

- (五) Theaceae (サザンタム科)
Ternstroemia Kanekirai KOBUSKI
Ternstroemia sphondylophora KOBUSKI
- (六) Sapotaceae (アカネン科)
Pouteria papuana K. et H. 本種は本科中ニューギニアの最高地に生育する種類であらう。
- (七) Hamamelidaceae (マンサク科)
Mytilicarpus punctatus K. et H. 本科はニューギニアの新記録、且つ本属は新に創定したもの。
- (八) Melastomataceae (ハボタン科)
Poiteilogyne arfakensis MOORE 葉が美しいので顯著。
- (九) Cunoniaceae (クノニヤ科)
Spiraeanthemum Pulleanum SCHLTR. 葉面に泡状の隆起がある。
- (十) Myrsinaceae (ヤブモミ科)
Rapanea koebrensis K. et H. *Rapanea verovula* K. et H.
Rapanea vaccinioides K. et H.

本属はすべて灌木性でこの他にも未鑑定のものが數種ある。

- (二) Araliaceae (ウロキ科)
Schefflera angiensis GIBBS, *Schefflera arfakensis* GIBBS, *Palmeriandentroecia papuana* GIBBS 等。最後の属はアンギ湖附近にのみ生育する特産の属である。
- (三) Epacridaceae (ホンタリ科)
Styphelia 属三種、*Leucopogon* 属一種、共に高さ、一米内外、林縁又は叢林中に生育する。
- (三) Bignoniaceae (ノウゼンカズラ科)
Teomanthe volubilis GIBBS 桃色の美花を開く蔓莖。
- (四) Apocynaceae (アカテツ科)
Alyxia arfakensis K. et H. *Alyxia purpureolata* K. et H. *Alyxia Pulliei* MGF.
- (五) Rubiaceae (ブカネ科)
Heliotis nutans (VAL.) K. et H. *Psychotria vaccinioides* VAL.
Myrmedonx arfakiana BECC. *Timonius filipes* WERNHAM.
- (六) Sapindaceae (ムクロシ科)
Guioa arfakensis K. et H. 稀少。 *Sarcopora alpina* K. et H. 稀少。
- (七) Rutaceae (クニルウタ科)

- Terminthoidia rotundifolia* RIDLEY *Aeronychia pyruana* GIBBS
- (六) Santalaceae (ビヤクダン科)
 本科には種類甚だ多く、このうち假葉を有する *Excoecarpus Pulliei* PRIGER の外は總べて着生植物であり、重なる種類は次の通り。
Henslowia angiensis K. et H. *Henslowia leptophylla* K. et H. *Henslowia crassifolia* GIBBS
Henslowia obovata K. et H. *Henslowia emarginata* K. et H.
- (七) Dilleniaceae (サルナシ科)
Hibbertia novo-guineensis GIBBS 濠洲系の灌木。
- (八) Nepenthaceae (ウツボカヅラ科)
Nepenthes maxima var. *minor* MAGF. 最も普通。
- (九) Loranthaceae (ヤドリギ科)
Loranthus 属一種を得たるに過ぎぬ。
- (三) Wikstroemiaceae (ガンビ科)
Wikstroemia 属は風衝強き尾根に生育する。
- (三) Ericaceae (シヤクナギ科) その種類に富み次の如き種類がある。

Rhododendron angienae Sm. 桃色花
Rhododendron Deurisanum KDS. 大形の白色花
Rhododendron Gibbse Sm. 赤色花
Rhododendron laetum Sm. 赤色花

Rhododendron undulaticalyx Sm. 桃色花
Vaccinium globosum Sm. 白色花

Vaccinium pilosiflorum Sm. } 桃色の小花を孤
Vaccinium villosiflorum Sm. } 生、高さ一米内外

(二四) Coniferae: (松柏科)

Dacrydium novo-guineense GIBBS

Libocedrus arfakensis GIBBS

Phyllocladus hypophyllus HOOK. f

(二五) Pandanaceae (タコノキ科)

Pandanus angiensis KANEH.

Pandanus humicola KANEH.

Freyinetia Gibbse RIDL. 實は側生する。

Freyinetia linearis MERR. et PERRY



No. 171 タコノキ新種
Pandanus angiensis KANEH.

次に吾々の数日間採集したイライ村(アング湖畔、海拔二〇〇〇—二二〇〇米)の植物に就き特記する。イライはギジ(男湖)に注ぐ小さい川に沿ふた部落である、私達はこの川に沿ふ森林

中を採集した、その林相は所々鬱閉が破れ、パプアの開墾地も介在してゐた、然し海拔の高いのと四周に山岳を控えて居る爲、特種の植物が尠くなかつた。その樹種は次ぎの通り、

Betehea aglatiformis K. et H. *Lithocarpus* sp. *Decaspermum angienae* K. et H.

Decaspermum arfakense DREIS *Lithocarpus arfakensis* K. et H. *Talauma arfakensis* K. et H.

Homalanthus arfakense HUTCH. *Sycopsis papuana* K. et H. *Timonius angienae* K. et H.

Leuieria montana BECC. *Symplocos luteifolia* K. et H.

なほこの外に未鑑定中であるが、次の諸屬があつた。

Acdypha, *Astronia*, *Claoxylon*, *Eurya*, *Evodia*, *Fagraea*, *Ficus*, *Glochidion*, *Macaranga*,

Rapanea, *Saurauia*, *Schefflera*, *Wendlandia*

又針葉樹には *Podocarpus imbricatus* Bl. が散在してゐた。

原始林が一度破壊せられると、第二次森林として *Dodonaea viscosa* var. *vulgaris* BADL. が發生し、特に河岸の砂礫地帯に廣がつて居た。これ等森林の下部には次の種類があつた。

Anomopanax arfakensis GIBBS *Disocalyx dissecta* K. et H. *Mesua fruticosa* GIBBS

Cyrtandra arfakensis SCHLTR. *Gibbsia insignis* RIDLEY *Rhamnus nepalensis* WALL.

なほこの外に次の諸屬を得た。

Conocephalus, Lisea, Medinilla, Pylurus, Pitosporum

蔓莖類には *Citandropsis crassifolia* K. et H. *Morinda angiensis* K. et H. の新種の外に

Rubus sp., *Vernonia* sp. があつた。

(3) モミ及びその附近

モミはヘールフィンク灣の西部、ワーレンに接する地に位し、茲に南洋興發會社、モミ農場がある、我々の採集基地として長く滞在した處である、従つてこの附近の植物は、充分に觀察することが出來た。

此附近一帯はナビレの森林とは異つた林相を呈し、熱帯森林の定型たる紅樹林、海岸林、降雨森林、第二期林を備へてゐた、その樹種は次の通り。

紅樹林

<i>Aegicera floridum</i> BOEM. et SCHLTR.	
<i>Avicennia marina</i> var. <i>resinifera</i> BAKH.	ヒルギダマシ
<i>Bruguiera conjugata</i> MERR.	ベニガクヒルギ
<i>Bruguiera parviflora</i> WIGHT et ARN.	コバナノベニヒルギ
<i>Ceriopsis Candolleana</i> ARN.	コヒルギ

<i>Excoccaria agallocha</i> L.	シマシラキ
<i>Lumnitzera littorea</i> VOIGT	ベニバナヒルギ
<i>Rhizophora apiculata</i> Bl.	フタバナヒルギ
<i>Rhizophora mucronata</i> LAM.	オホバヒルギ
<i>Scyphiphora hydrophyllacea</i> GAERTN. f.	ミヅバヒルギ
<i>Xylocarpus granatum</i> KOENIG.	ホウガンヒルギ

海岸植物

<i>Breynia cernua</i> MUELL.-ARG.	ヤラボ(タマナ)
<i>Calophyllum inophyllum</i> L.	ミフクラギ
<i>Cerbera manghas</i> L.	キバナイヌチシヤ
<i>Cordia subcordata</i> LAM.	ハウチハノキ
<i>Dodonaea viscosa</i> JACO.	ハリギリ
<i>Erythrina variegata</i> L.	ガジユマル
<i>Ficus retusa</i> L.	シマハビロ
<i>Guettarda speciosa</i> L.	

<i>Hertiera littoralis</i> DRVAND.	スハウギ
<i>Hernandia onigera</i> L.	ハスノハギリ
<i>Hibiscus tiliaceus</i> L.	オホハマボウ
<i>Limociera ramiflora</i> WALL.	ナンヨウナタヲレ
<i>Ocrotoma parviflora</i> HENSLOW	オホミフクラギ
<i>Pandanus tectorius</i> SOL.	タコノキ
<i>Planchonella obovata</i> LAM.	アカテツ
<i>Pongamia pinnata</i> MERR.	クロヨナ
<i>Prema integrifolia</i> L.	ウラクサギ
<i>Serianthes grandiflora</i> BENTH.	イツフヂ
<i>Sophora tomentosa</i> L.	ニンジンボク
<i>Tetraplasandra paucidens</i> MIO.	ナンテンカヅラ
<i>Vitex Negundo</i> L.	
蔓莖植物	
<i>Caesalpinia nuga</i> AIT.	

<i>Connarus Gaudichaudii</i> PLANCH.	ナンヤウマメモドキ
<i>Derris trifoliata</i> LOUR.	シヒノキカヅラ
<i>Entada phaseoloides</i> MERR.	モダマ
<i>Faradaya amicornum</i> SEM.	
<i>Mucuna gigantea</i> DC.	タイハイヨウカヅラ
<i>Smylhea pacifica</i> SEM.	
平地帯の主林木中、特に喬大なるものは次の通り。	
<i>Alstonia scholaris</i> R. BR.	
<i>Anthocephalus indicus</i> RICH.	テツボク
<i>Intsia bijuga</i> O. KTZE.	
<i>Ocoteles sumatrana</i> MIO.	
<i>Pometia pinnata</i> FORST.	バンリュウガン
<i>Tristylopsis</i> sp.	
<i>Wormia</i> sp.	

小中喬木としては次の樹種があつた。

Aplata, *Chisocheilon*, *Dysoxylum*, *Ficus*, *Horsfieldia*, *Myristica*, *Stereulia* 属の外 *Lepiniopsis ternatensis* VAL., *Sapium indicum* WILD.

第二期森林の主林木は次の通り。

<i>Abronia angusta</i> L. f.	トゲアフヒモドキ
<i>Melanolepis multiglandulosa</i> REICH. f.	ヤンバルアカメガシハ
<i>Clerodendron Lindavianum</i> LAUTERB.	
<i>Kleinhowia hospita</i> L.	フウセンアカメガシハ
<i>Morinda citrifolia</i> L.	ヤハマアヲキ
<i>Premna integrifolia</i> L.	ウヲクサギ
<i>Villebrunea rubescens</i> MIG.	ナンヤウイハガネ

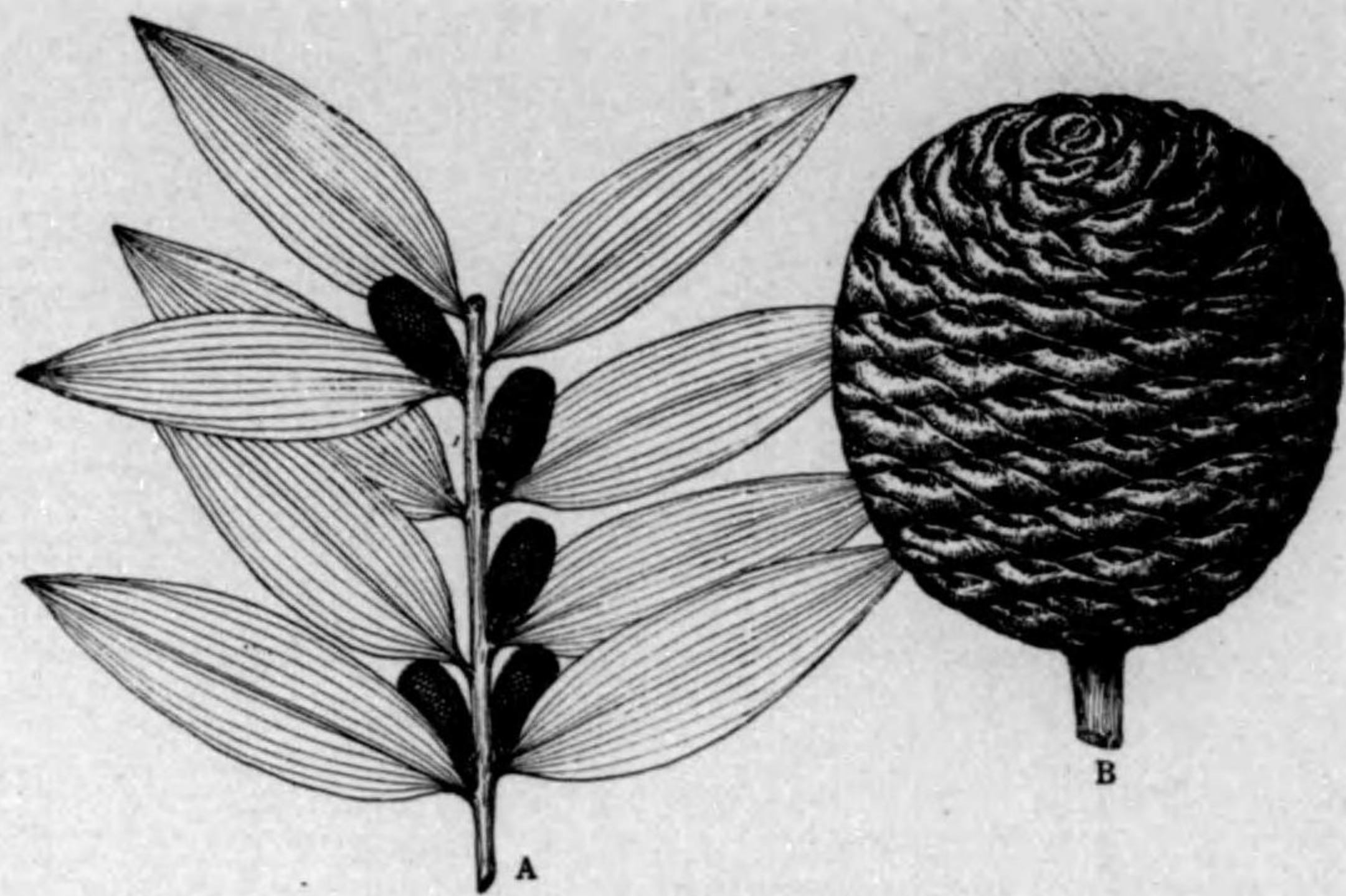
Ficus, *Laportea*, *Macaranga*, *Mallotus*, *Syzygium* の諸属

モミ農場の背後に横たはる丘陵は一帶の草原地で、地質學的にはジュラ系に屬し、千板岩千板岩と頁岩頁岩の互層からなり、所々に礫岩と砂岩とが露出してゐる特異な地質の爲か(この地質はアング附近にも達し、同地方では處々、花崗岩により貫かれてゐた)他の地方に見られない特別の樹種が純林状をなしてゐた、即ちその樹種は次の通り。

<i>Baeckea frutescens</i> L.	<i>Thomasia papuana</i> K. et H.
<i>Leptospermum parviflorum</i> VAL.	<i>Acacia</i> spp.
なほ農場周囲の平地の原始林では樹木が鬱蒼として繁茂し、花實の採集困難で、その樹種を知ること殆ど不可能であつたが、林縁地帯で特に注意すべきものは次の通り。	
<i>Breynia mollis</i> SM.	<i>Rapanea littoralis</i> K. et H.
<i>Calophyllum uerrensii</i> R. et H.	<i>Rhodania graeblis</i> K. et H.
<i>Fagraea elliptica</i> ROXB.	<i>Rhodania papuana</i> K. et H.
<i>Gordonia pyruana</i> KOBUSKI	<i>Rhodomyrtus novo-guineensis</i> DIELS
<i>Macaranga Schleinitziana</i> K. SCHUM.	<i>Scaevola Lauterbachiana</i> KRAUSE
<i>Northia fasciculata</i> LAM. ?	<i>Schizomeria homaldaeformis</i> K. et H.
<i>Pittosporum ferrugineum</i> AIT.	<i>Wendlandia buddleacea</i> MUELL.

(五) 有用植物

ニューギニヤに産する野生の有用植物には主産物たる木材、その他副産物として如何なる種類が生産せられるか。木材にはラワン材たる二羽柿科の林木が甚だ少いが太平洋鐵木やムクロジ科、



No. 172 ダルマ樹(*Agathis alba* Foxw.) (原圖) A枝×1/2 B實×1/2

脂を生産する樹木は *Agathis alba* Foxw. と云ひ、北は印度支那から南は比島、馬來、ニューギニアに分布してゐる、ニューギニアでは平地にも生育するがナビレでは三〇〇—四〇〇米、ラテライトの乾燥地帯に出現してゐる、森林中平滑な灰色の樹皮、通直な幹は聳立する濃綠色の樹皮と相俟つて林内は勿論のこと、遠方から容易に識別が出来る、直径は二米、高さ六〇米以上に達し、葉はナギの様な厚い革質、平行脈がある、結實することが甚だ稀で、標本すら中得難い、上圖に示す様な球形、徑八厘にも及び、鱗片は脱落し易い。本種の種子は世人が容易に採集し得るものと考へ、多量の種子を現地に注文してもそれは無駄に終るにすぎぬ。

ダルマは樹幹に幅の廣い剝皮をなし、其分泌液の凝固を待つて採取することは前にも記し

ニンジンボク科、ヤラボ科、アカテツ科、テンニンクワ科等に屬する樹種中には材質の優良なものが少くない、然しながら木材は運輸と密接な關係もあり、その開發は將來に俟たねばならぬ。

蘭領ニューギニアの重要産物としてはダルマを以て第一とし、その他マツヤ、籐などがある、又將來利用せらるべきものに、カツチ(紅樹林樹皮より採るタンニン)、キノ、脂油(ヤラボ、モタマナ類の種實油)、ガツタ、纖維植物(*Gnetum*, *Sereulia*, *Hibiscus* 類の樹皮)、香木(ラサマラの如き其の一つ)、藥用植物等が擧げられる、是等は植物調査の進行と共に、次第に明かにせられるであらう。サゴ椰子は海岸の低濕地帯に生育し、パプアには最も重要な植物であること前に述べた通り。

移入の有用植物に就きては枚舉に追がない、是等の植物は一應試験を経たる上、繁殖、栽培をなすべである。

(a) ダルマ 樹

本樹とダルマに就きては、猪熊農學士により「山林」(昭和十四年十月號) 雜誌に精しく記載せられてゐるから参照すればよい。

ダルマは一つにコパールとも呼ばれ、又往時比島がその重要産物たりし關係からマニラ・コパール(マニラが輸出港たりし爲)、或はアルマシガ(西班牙語)の名によりて知られてゐる、其樹

た、その用途は重に塗料であるが印刷、防水、絶縁、接合、製紙糊料等に用ゆる外、擬革の材料にも

なり、需要は年々増加を辿つてゐる、一九三七年、蘭印からの輸出は百五十四萬盾で、その三分の一は北米合衆國に仕向けられてゐる。

(b) マツソヤ

濠洲領及蘭領ニューギニヤに分布する中喬木、その樹皮はユーゲノールを含有し、往時はシンナムンと同様、高價な値段で賣買せられ、重要輸出品の一つであつた、此樹の學名は通常 *Cinnamomum massoia* SCHWE が用ひられてゐるが

Litsea grandifolia TESCHN., *Massoia aromatica* BECC., *Sassafras Goesianum* T. et B.

Cryptocarya sp., *Endiandra* sp.

等の鑑定もある、私は本樹の完全な標本を採集する

爲、ナビレ地方採集中、現地に人を派して數本を伐採させたが何れも花、實の無き標本であつた、

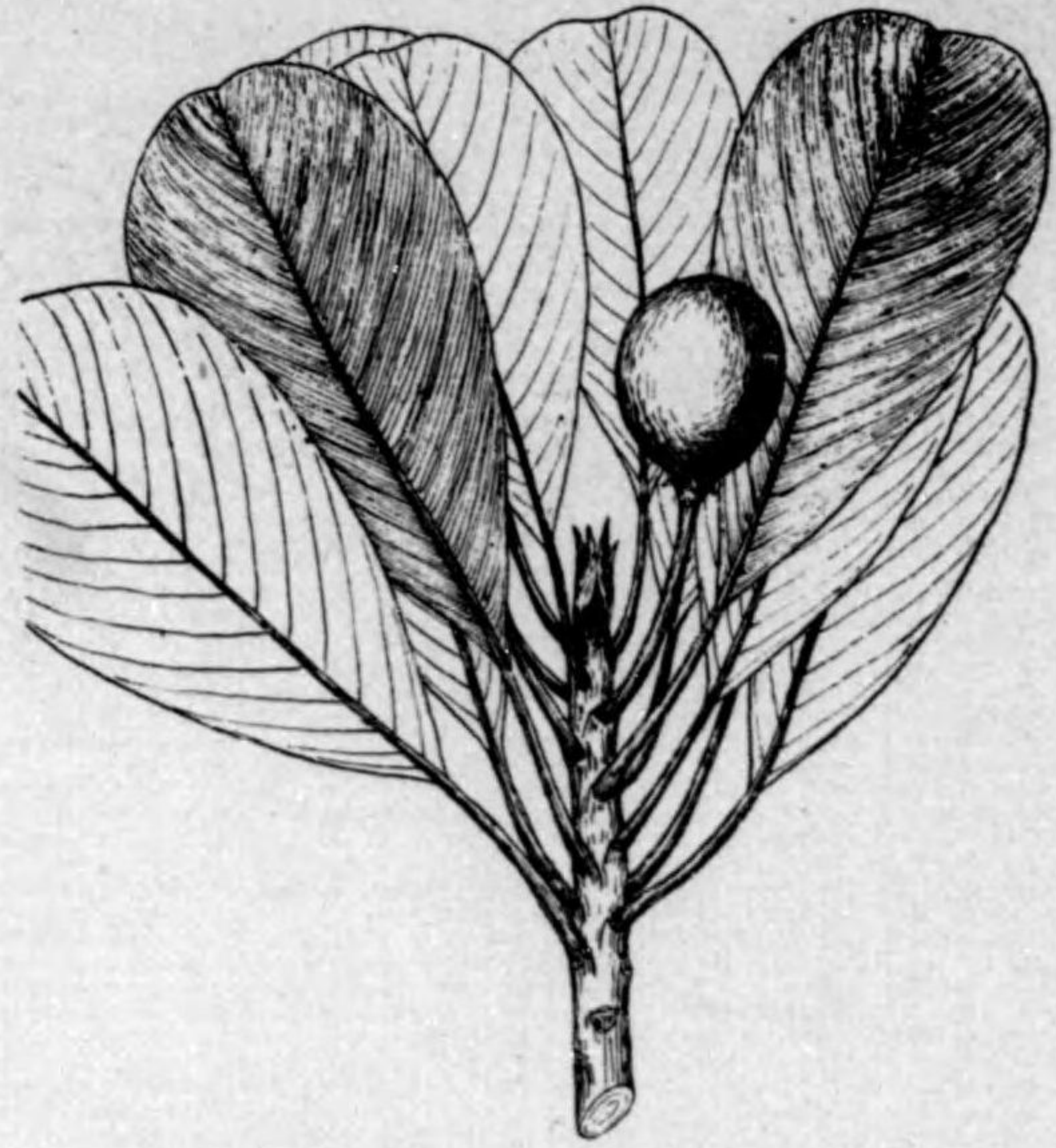


No 173 商品となつたダマル(メオス・ノエム島)
(Nieuw Guineeより)

歸朝後、爪哇のボ植物園に完全な標本の借用を申込んだ處、これ亦、全部が花、實のなきステリルのものであり、問題は依然として解決が出来ぬ、然しその葉が羽狀脈であることは本屬以外のものたるを思はしめる。

(c) カユスネル *Kajoe sner*

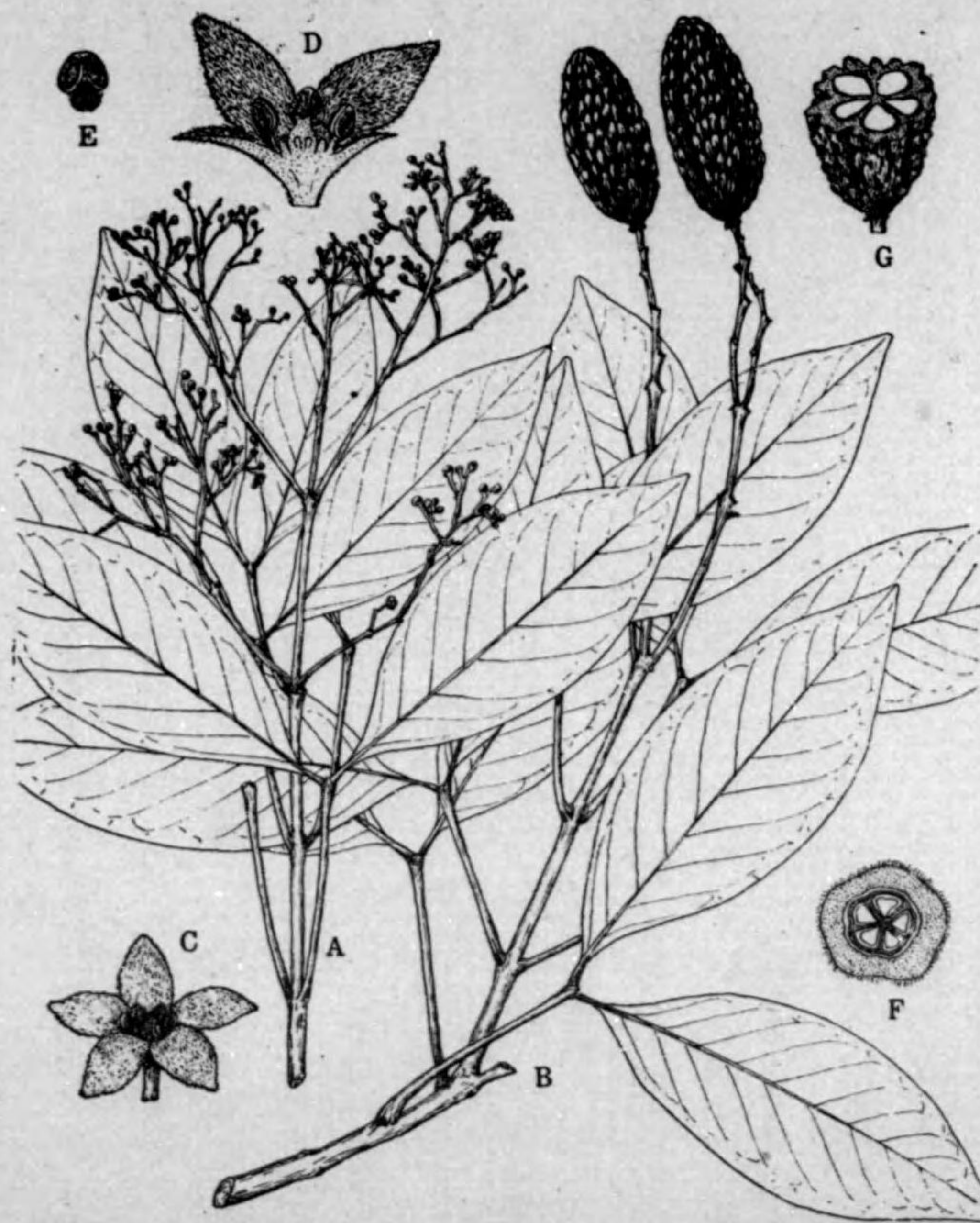
モミ附近の低地帯に産する喬木であるがその分布は明かでない。材は甚だ硬く持ち歸つた標本で調べて見ると全乾比重一、〇四七、纖維飽和點一七・二%
ブリネル硬度數八・二、Kg/mm²(渡邊農學博
同)下、黄褐色の光澤を有し土人は釘の代
用とする、本樹はモミ農場員の助力に
よりその實を有する標本を得たが未だ
花を見ず、實の基部に宿存する萼片が



No. 174 硬木カユスネル *Northia* sp.) (原圖)

六よりなるを見れば、從來考へられた *Palagium* 屬ではなく *Northia* 屬ではあるまいか。

(d) ラサマラ *Lasamala*



A花を着けた枝 B實を着けた枝 C花×6 D同縦断×8
E雄蕊 F子房横断 G實横断× $\frac{2}{3}$ (原圖)

モミヤダルマン地方の森林中に、ラサマラと名づくる香木がある、生木には香が少いが倒木の枯れた材を切り取つて見ると、相當強烈な香氣がある、材は極めて硬く美しい光澤を發する、我同胞達は洋杖や小箱を製してゐた、Rutaceae に屬する *Flindersia* 屬である。

(c) カトナニ Kajoe nani

モミ地方では一番硬い材とせられてゐる中喬木、海岸から山手にかけて生育する。持ち歸つた標本を調べて見ると、全乾比重〇・九七三、纖維飽和點二〇・七%、ブリネル硬度數は八・五 ($\frac{\text{kg.}}{\text{mm}^2}$) である。學名の鑑定が困難だが次頁の如き種類らしい。

(f) カトヤン Kajoe besi

太平洋鐵木で學名を *Intsia bijuga* O. KRZE. とし、太平洋諸島に分布し、我南洋群島にも多く、モミ農場の低濕地帯には純林狀をなし徑二米以上のものが少くない、開墾の際、地上三、四米の部分から伐り倒し焼棄してゐたが、現今は焼残りの材や根株を利用してゐる。本材は白蟻の害を受けず、水濕に對して耐久力が大きい爲、建築の土臺、柱、床板等に最も適當である、ニューギニヤと西馬來に多い、此地方には「ボルネオ鐵木」が殆ど無いから本樹は將來、貴重な用材として輸出せられるに至るであらう。

(g) サゴ椰子

No. 176 硬木: カユ・ナニ (原圖)



Xanthostemon oppositifolium RAIL.

本椰子は古々椰子と同様、土人には重要な植物で、莖幹の内部にある澱粉は、土人の食料たる

のみならず貿易品に

もなる、マルコ・ポー

ロやマゼランは早く

から土人がサゴを食

用とすることを記載

したが、初めて精し

い説明を與へたのは

實にラムヒユスであ

つた、馬來語はルン

ビヤであり、サゴは

パプアの「サグ」でパ

ンの意である、植物學上三種が重要であるが、ニュー



No. 177 サゴ椰子の幹を二つに縦断して充滿した白色の澱粉を取るパプア (南洋興發)



No. 178 野生の甘蔗 (金平)

ギニヤ産は馬來語の Rumbia duri で、トゲサゴ、即ち *Metroxylon sagu* ROTB. に相當するものであらう、一本から百キロの澱粉がとれる。

(h) 野生甘蔗

ニューギニヤの野生甘蔗は有名であり、その變種も極めて多いが、ワセヲバナ *Saccharum spontaneum* var. *glagah* の種類ではあるまいか、一八九六—一八九七年、クインスランドの H. TRYON はニューギニヤで一種の變種を發見し、之れを持ち歸つた後、交配により出來た *Badilla* は同地で廣く栽培せられてゐる、又一九二八年、Dr. BRANDES を主班とする探檢隊は一種の病菌に抵抗する變種を發見してその目的を達したと云はれる、甘蔗農業上重要な植物である。

後記

(一) 住民

何等専門的の智識の無い筆者が、茲に住民に就き、記述することはその資格の無いことは勿論、又本書の目的には添はぬであらう、然し異境に旅行し、日常、其土地の住民に接する時、何人と雖も彼等に對し、多少の關心を持たぬものはない筈、この關心は住民の文化が低ければ低い程、やがて同情心となるのが人情であり、同時に又かくなる事によつて、彼等と一所に山地奥深く旅行も出來得るのである、萬一、土人に對し心からの同情心が無いなら、その探檢旅行は不愉快であり、又必ずや失敗するに違ひ無いであらう、況んや人種、人類或は土俗學に志す者にとりては、同情心だけでは無く、親愛の情すら抱くに至ることと思ふ。

爪哇バタビヤの博物館を訪ふ者は、ニューギニヤ土人に關する種々の參考品が如何に豊富であるかを一驚する、就中、その土俗品の如き一としてその出所、用途、精密な記録を供はぬものは無く、苟も出所不明、記録不確實なものは一切陳列してゐないと當局者は説明して居る。ニュー

ギニヤに關する限り、蘭印はこの方面に、最も多くの力を用ひて居ることが察知せられる、例へば一九〇七—一九一五年の陸軍探検報告も、その大部分は住民に關するものが占めてゐる。

人類學には學説が多くして定説が少く、何れに従ふべきか、その判断に苦しむことが屢々で、ニューギニヤの如き調査が完からざる處ではなほ更、さうであるらしい。

(1) 膚 色

ニューギニヤの住民は漠然パプア (Papua) なる名稱の元に呼ばれ、「縮毛」を意味すると云ふのが一般の説だが疑を抱く者もある、何れにせよ、パプアの名は古くから傳はり、暗黒の膚色と相俟つて著しい特長である、この住民は時として、ニューギニヤ東南方諸島の住民と共にメラネシアと呼ばれることがある。此特種の人種が東は太平洋の極東イースター島から、西は印度洋の西端、マダガスカル島の一部に至る迄分布する、褐色膚のポリネシア及びマレーの兩人種により包圍せられてゐることは、不思議な現象とせられてゐる。



No. 179 メラウケ、ビヤン沿岸のパプア、中央は酋長、腕輪、鼻飾は山豚の牙、耳輪は火喰鳥の翼の軸 (或寫眞)

此黒膚の人種はニューギニヤ特有では無く、南濠洲の一部にはエチオピア人に似た濠洲ネグロ、北方比島のネグリトの如き、黒膚の人種が僅少なから存在する、是等の種族が互に血縁を有するや否や不明だが、専門學者の説明によると、膚色、毛髪、頭顱の形状等は同一の種族内では不變



No. 180 スワルト谷地方に住むパプアの縮れ髪 (Nieuw Guinee より)

性のもので、ある程度迄は區別の特長とすることが出来ると云ふ點から察すれば、是等諸地方の人種には何等かの關係があるのかも知れない。

アフリカのネグロは一に「黒人」と呼ばれパプアに對し「西の黒人」とも云はれるが、之れは全くの純黒で「黒世界」の名を有するに反し、ニューギニヤのパプアは黒人ではない。又ネグロには白子が少いが、ニューギニヤの土人には屢々白子が發生する、學者の説によると、この白化症は一つの遺傳であり、その遺傳はメンデル式單劣性に相當し、血族結婚者間に多いと云はれる。私は山中の苦力の中にも、海岸の部落や港の埠頭でも度々白子に出會した、その發生の割合は相當高いのであらう。此白子の皮膚はバラ色の多數の黄

褐色班、即ちソバカスがあり、毛髪は帶黄白色、眼球は青味が、り、視力弱く、屢々眼疾に罹つてゐる、一体に身體は虚弱、智能も劣るらしい。白人は極端に白子を嫌惡するの風が見える。

(2) 頭 髪

頭髮はアフリカのネグロは短く密生してゐるが、パプア人の頭髮は長く粗生し、海岸地方は「カール」狀、山地一帶は縮毛であるのが普通である。頭髮は人體の何れの部分よりも大切に手入れをなし、女よりも寧ろ男の方が注意を拂ふ。男子は頭髮を螺旋狀の束となし、その巧な結髮に「工藝品」の名さへ與へた者がある。私は濠洲ニューギニヤ、ラバウル地方の女が屢々レモン液で頭髮を漂白し、茶褐色又は灰色となし、又男子は黒色を貴ぶ結果、靴墨を塗つてゐたのを目撃したことがある。



No. 181 ミミカ地方に住むパプアの結髮 (同)

(3) 體 格

パプア人の體格は種族により一様で無いが一體に瘠形である、私は先年、ボナベから我南洋群島の土人を水夫にしたカロリン丸で、ラバウルに着いたことがある、我南洋土人の體格が彼等に



No. 182 マネキオン男子、頸飾 (金平) は山脈の牙

比し餘りにも立派であつたのに一驚した。尤も北部海岸のパプアは南海岸の者に比して悪いのではあるが、一般に女は幼時によく發育し、成人すると悪くなり、男女とも胸が著しく厚味を帯びてゐるのが目につく。身長は一六〇糎内外で、マレー人と大差は無い、腰部以上の筋肉が逞しく發達してゐるに對し、脚部が細く鶴の様なのが少くな

い、學者によると、彼等は海岸や低地で絶えず丸木舟で往來する爲だと説明するが、山中に住むパプアも殆ど同様なのは不思議で、彼等は鶴の様な細い脚で、狭い山路や樹林の間を巧に潜り、如何にも身輕な足取りで坂道を上下するのを見ると、寧ろ山地居住に適する爲、脚が細くなつたのかと思ふ様であつた。

(4) ニューギニヤ侏儒



No. 183 マネキオン婦 (金平)

一般に、ニューギニヤの山地帯の住民は低地よりも膚色浅く、その體軀が小であることは總べての探検家の一致してゐる處で、「ニューギニヤ侏儒」が古くから名高いのもその爲であらう。此侏儒の所在地とその種族とをつき留めるには長い年月を要した、即ち一九〇七年及び一九〇



No. 184 武装したマネキオン、體格に比し脚の細いのが目だつ (金平)

トリチエリ山中にも之れを發見した。

發見の當時は、その分布が餘りに不規則で、一つの謎とさへ考へられた、現在ではニューギニヤの高地に廣く分布することが判明し、西はカールステンツの最高峯から東は濠洲領の Scratchley

九年、ローレンツが初めて之れを發見し、引續き英國の GODFELLOW (1910) 及 WOLLASTON (1912) とは蘭領ニューギニヤ探検の際、ミミカ河でタピロ族の侏儒を發見した、最も有名になつたのはこれと前後して行はれた蘭印陸軍の探検隊(一九〇七—一九一五年)により、アイランデン川の上流、海拔二一三、〇〇〇米の高地に發見せられた Goliath 侏儒である、その後、濠洲領では SELIGMAN 及び STRONG が Kamaweka 侏儒を發見し、又北海岸の

に至る迄居住することが明になつた。

侏儒には中央アフリカの内部や、馬來半島の一部に住むセマング族、ベンゴール灣、アングマン島のミンコビー族、又比島のアエタ族などがある、彼等は短軀、暗色膚、縮毛、扁平なる廣



No. 185 マネキオン(カールした頭髪) 左ムルダー君 (金平)

鼻、突顎、短頭等、所謂ネグリト(小ネグロの意)要素を備へてゐるが、これ等が共通の祖先から出たものかどうかは諸説がある、然しこの矮人は最も原始的な古代人種で、後の侵入族により次第に奥地、山岳地帯に追ひやられたものと云ふことは定説である。

ニューギニヤの侏儒の身長はどの位あるかと云ふに、タピロ族は平均一四四、九糎(凡四尺七寸)(平均人數不明)、ゴライヤス族は平均一四九、二糎(十二人平均)、カマウエカ族は一四八、七糎(一一人の平均)となつてゐる。

(5) 頭指數

パプアの頭顱は世界の人類中最下位にあり、如何なる人種も、パプアと智識的競争の相手とな

り得無いから全然心配するの要は無いと白人は述べてゐる。

頭顱の形状はマレー、ポリネシヤの多數が短頭顱ブラキセファラ若くは中頭顱メソセファラであるに反し、パプアは長頭顱ドリモセファラである、尤も濠洲ニューギニヤの一部では長頭形を好み、幼齡時に頭部を紐で巻きつけ、人工的に、細長い形の頭とする種族すらあることは、アフリカ黒人間の習慣と軌を一にする、この方法は甚だ危険で、幼兒を致死に至らしめることがある。何れにせよ、パプアが長頭顱であるに反し、前記の侏儒がすべて短頭顱に屬してゐることは不思議である。

次に頭指數セファリックインデックスを見ると、その平均は七四・八〇、最低は Duadai-Papua の七一・〇となつてゐる。頭の形や又その指數のみが智能を量る標準（セジック、タイラーの「自然科學史」中の「原始文化」参照）



No. 186 黒く化粧したマネキオン婦 (金平)

とはなり得ないが、ニューギニヤ侏儒中、カマウエカ族の七八・〇を除けば、タビロ族は八〇・〇、ゴライヤス族は八三・四で、全パプア族のうち最高指數であることは皮肉である。

パプアの「數」の觀念は甚だ幼稚で一、二の例をとると、ワンダメン（ヘールフィンク灣に沿

ふた凹部海岸地方)のパプアは

一、二、三、四、五、五ノ一(六)、五ノ二(七)、五ノ三(八)、五ノ四(九)、一〇、一一、一二、十三、十四、十五、十五ノ一(十六)、十五ノ二(十七)、……………二〇

即ち六、七、八、九の數字を用ひない、然し十の數を知つてゐる。

又ホランジャ地方のパプアは右手指

一、二、三、四、五。左手指一(六)、左二(七)、左三(八)、左四(九)左五(一〇)。右足指一(十一)、右足二(十二)、右足三(十三)、右足四(十四)、右足五(十五)、左足指一(十六)、左足二(十七)、左足三(十八)、左足四(十九)。



No. 187 侏儒(兩端の二人)と海岸パプア (Nieuw Guineeより)

一人(二十)、二人(四十)、三人(六十)……

となり、一人は二十を意味し、二人は四十となる。即ち右の手指から左手の指に進み、十以上十五迄は右足の指を數へ、十五以上二十までは左足の指で現はし、二十以上は一人となつてゐる。

何れも指を以て數へることは、吾々の十進法の依つて生じた起原と見るべきであらう。

(6) 食物

パプアの食料は大體三種に分類することが出来る、その一はサゴ澱粉を常食とする者である。サゴ椰子は海岸の潮水が浸入する低濕地に生じ、偉大な幹を有する羽狀葉の椰子で、充分な生育を遂げ、將に開花せんとする頃、幹の内部にある澱粉は完熟する、男子はその時期を見計らつて伐り倒し、適當の長さに玉切り之れを二つ割りにする、女子はこの澱粉を削つて掻き出し、水で洗滌した後、沈澱する澱粉を集め、バナナの葉に包んで貯へ、隨時に煮て食べる、之れをサゴ・ポベダ(粥サゴ)と云ふ、一種の糊であり、之れを金盞に盛り、一族が團樂して匙で食べる、このサゴは吾人の米に相當するもので、その執着は甚だ強く、サゴ食から離れることは堪え難い苦痛らしい、サゴ食のパプアは不思議にも體格が最も優れてゐる、然し一番怠惰で且つ享樂的である。然しながらサゴ椰子の生育する地域は極限せられてゐる、従つてこの椰子の無い地方の海岸のパプアは、古々椰子の外に丸木舟ワカボネを操り海に漁して食を求め、その日その日を過す輩で、勤勉の風が無く、農事は放漫、家屋も一時的で隣村の者と和せず、外來人に對して猜疑と恐怖心とを抱き、爲に彼等に接觸することは困難で、海岸のパプアの中、文化も亦一番遅れてゐる、これ第二の部類に屬する者である。



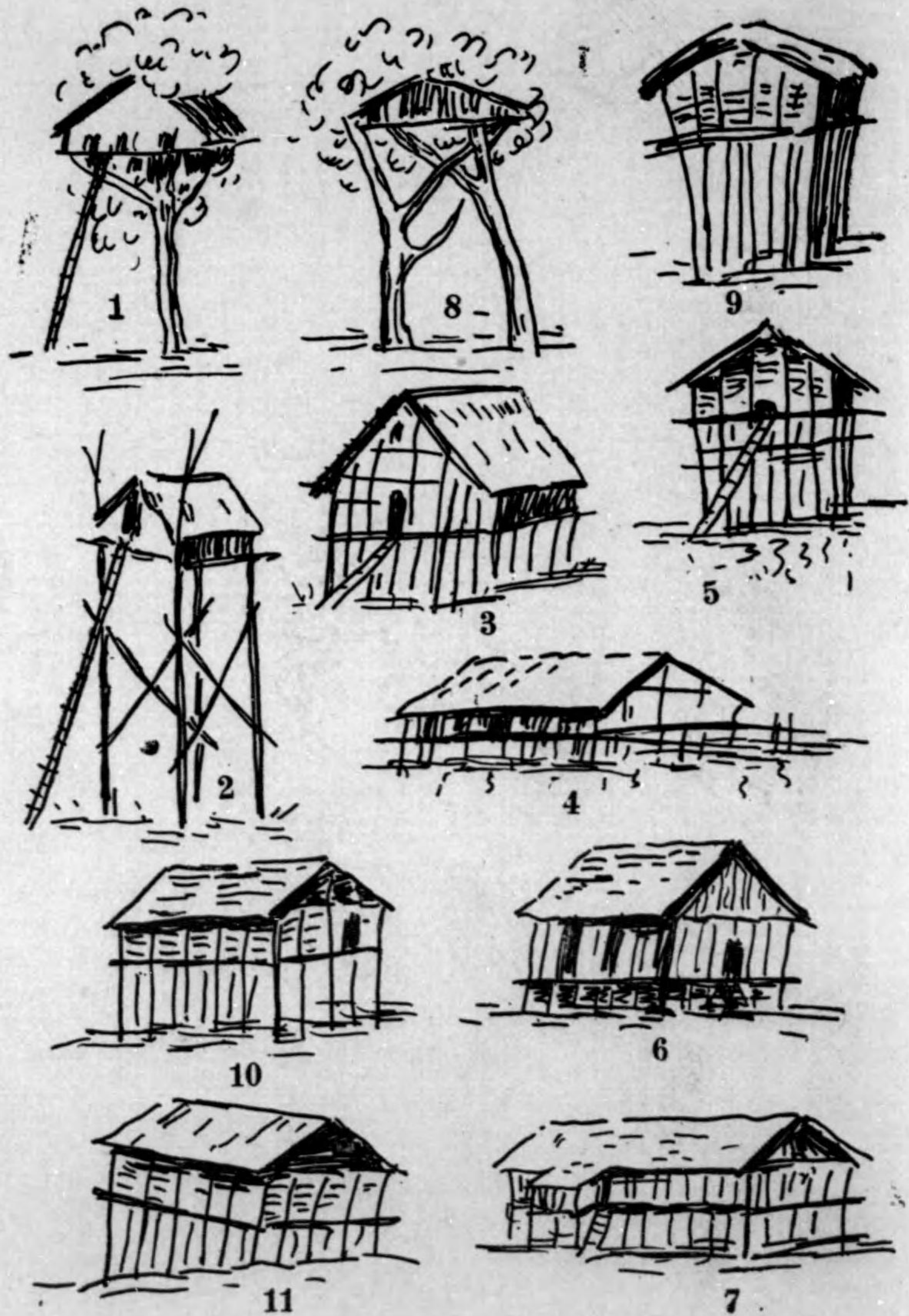
No. 188 海に魚を獲るパプア
(Nieuw Guineeより)

第三は農業を營むパプアである、タウモロコシ、サツマイモ、ヤム等をつくり、又タピオカを栽培する、時には弓矢を携へ禽鳥、野獸を狩つて食料となし、又海岸では長いモリで魚類を獲ることもある、この部類の者には猥惡の種族も少くないが、本心は案外親切で盗心無く、勤勉、清潔である、殊に高地帯には良民族が居り、一度彼等と交るとよく人を信用する。

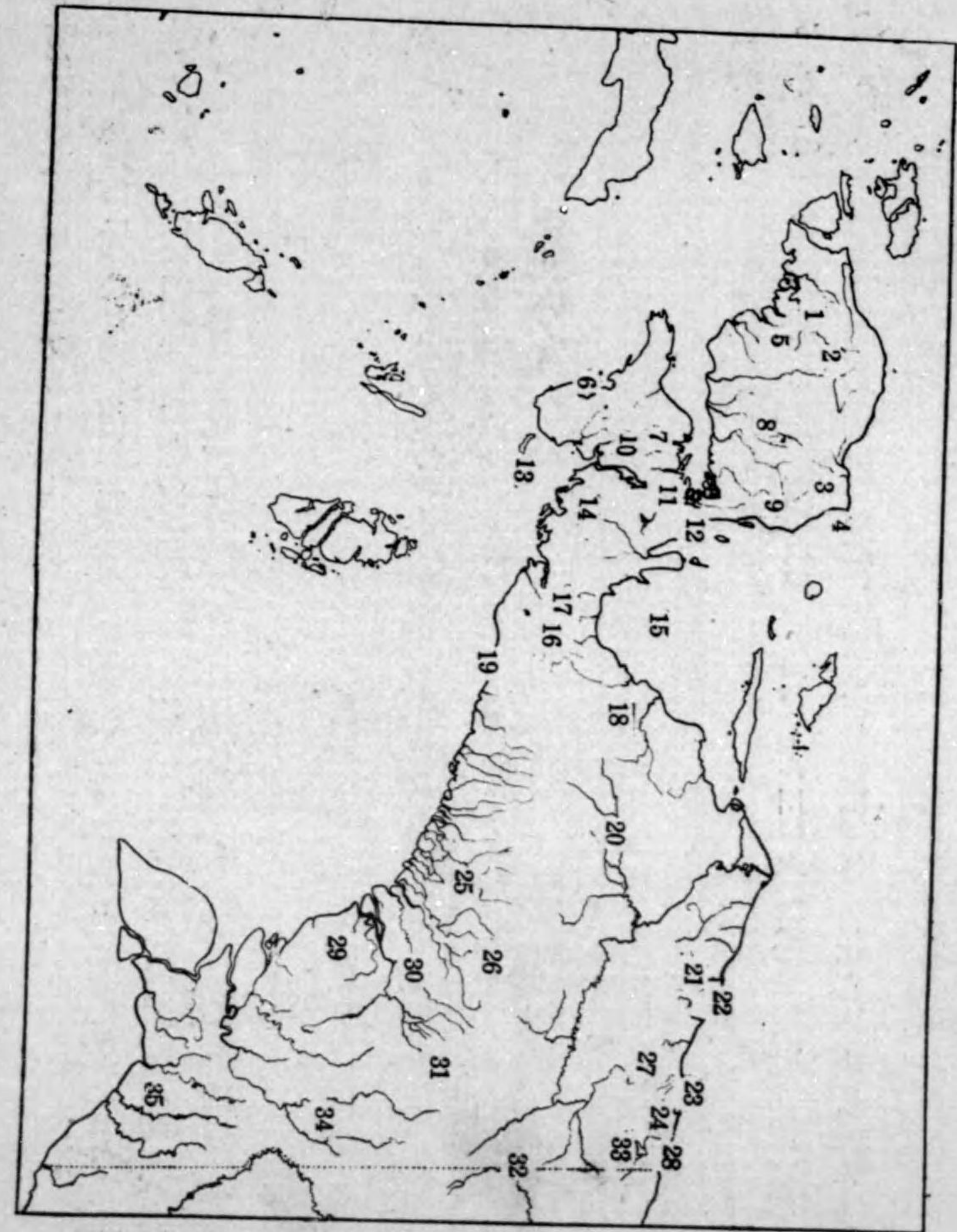
何れの種族も煙草を嗜好し、シリスは海岸地方でも、あまり使用しないらしい。

(7) 家屋

家屋の構造は種族により千差萬別、陸軍探檢隊の報告を見てもその一端が窺はれる、鳥頭フオヘルコツの内部や、チゴール川の上流地方では樹の枝に家屋を造る種族がある、一般に床を高くするのは外敵の防禦と、無意識ではあるが衛生上から來たものではあるまいか(挿入圖参照)。



No. 190 ニューギニア土人の家屋(番號により附圖と對照) 其一



No. 189

次頁の家屋の番號の位置を示す
(陸軍探檢隊報告より)



26



29



31



30



33



27



28



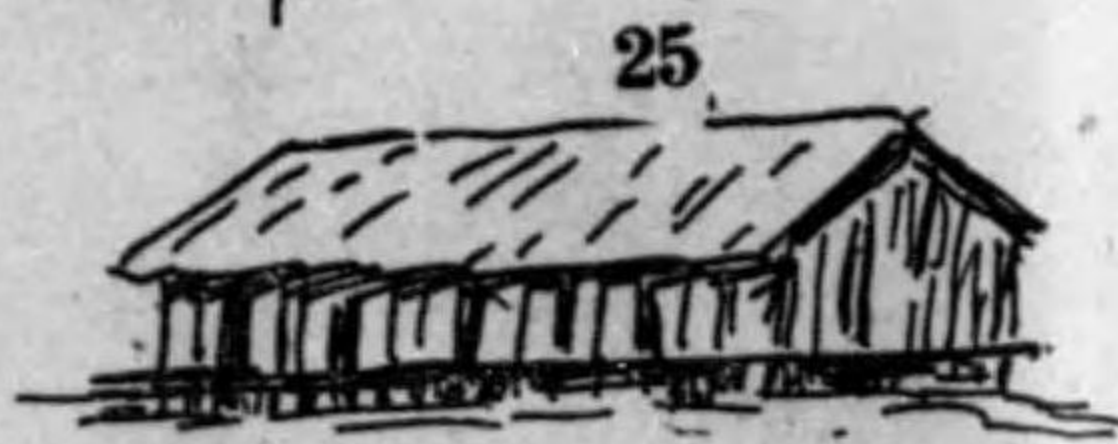
34



32



35



25

No. 192 其三



14



13



17



16



18



15



19



20



22



12



23



24



21

No. 191 其二

(8) 裝身具

土人の裝飾に對する憧憬は極めて熾烈で、文身、亂刺（皮膚に疵をつけて凸部をつくる）を施し、或は鼻飾、耳飾等、多種、多様であり、女子よりも男子が浮身をやつす様である、殊に鳥毛を好むことは太平洋洲の土人と同様である。奥地のパプアには屢々陽根筒を使用する奇習がある、その筒は竹程、貝殻、ヘウタンが用ひられ、之れを男根帶で下服部を括る、又フンボルト灣、セントタニ湖地方の土人は全然裸體である。又頸飾に獸類の齒牙、貝類が用ひられることは馬來地方の未開人と同一である。

(9) 宗教

パプアの様な外界から全く鎖されてゐる民族は、外來の宗教に接せざる限り、依然として活力崇拜であり、西部地帯では水力靈が威大な力を備へてゐると考へ、又死靈、亡靈を信じて畏敬する。

迷信として最も恐ろしいのは「アワンギ」と名づくる信仰で、自然の死（病死）を信ぜず、その死因を妖術に歸し、亡靈を媒介したものが責任者だと考へ、之れを殺す如きその一例である。

人肉を喰ふ所謂食人種説は世間に名高いが、その真相は明かでない、食人習慣の中心であつたポリネシアのフィジーや、ニュー・ヘブライドの諸島は兎に角、ニューギニアに於ける從來の諸説は

狩獵者、交易者、案内者などの誇張報告もあるが實際に目撃した者は殆ど無い、勿論彼等は、食料として人肉を喰ふのではなく、迷信から來る場合が多い、例へば前に述べた亡靈の媒介者を判定する時、その死人の肉を食つて占をなすが如き、或は仇敵を殺戮して更らにその讐愾をはらさんとする場合その肉を食ふ如きである、この習慣は勿論、現今警察權の及ぶ所嚴禁じられてゐる。



No. 193 パプアの彫刻 (原圖)

飛行機でニューギニアの山中深く着陸した時、そこに住むパプアは白人を精靈であると信じ切り、種々の食料品を彼等に與へんとしてもそれが眞實、食料であるか否かを疑ひ、又彼の最も欲しがらる貝の貨幣を出しても之れを受取ら

なかつたと、前記テラー氏がハーゲン山附近を探検した時の報告に書いてゐるが、白人や飛行機を、精靈や天上界のものとして信じて居る彼等には、文明の利器に對し、驚異も不思議も無かつたに違ひ無い。

(10) 文化の淺淵

現在なほ石器時代にあるパプアにも、文化の波は何時とはなく押し寄せ來り、次第にその波に浸る様になつた事は、彼等の生活は勿論、その性質にも、亦種族そのものにも大きな影響を與へずには置かなんだ。

ニューギニヤの西部には、早くから極樂島やその他の物品を交換する商人達が來往し、その多數は土着して混血した、殊に支那人は政治の布かれる前、既にアルグニ灣（マツクルア灣）の奥深く侵入し、この地方に一番多い極樂島や、ダマル樹脂、マツソヤ樹皮を提供させ、その代償として鹽、マツチ、粗惡な綿布類を與へ、狡猾なれど「天國の子」として次第に勢力を伸べ、「質朴なるも安逸で思慮の無い」土人から巨利を占めた。

又オニン半島には純血のセラム人が居住する外、西部の各地にはマカツサー、チドレ、ギサー、アンボン、トラウ島の土人が移住した。

初めてパプアに接した教養の無い他國人が、屢々彼等を欺瞞することにより、法外の利益を得たことは何れの末開化國にも見る通りで、パプア人の性質を惡化せしめたことも拒め無い。然しながら、一方にはキリスト教の傳播が、彼等に文化の曙光を與へたことも見逃してはならぬ。

一八五五年、獨乙宣教師はマヌコワリの沖にある一小島、マンシマン島に布教を開始した後、和蘭のユトレヒト傳道教會はこの布教を助けて今日に及び、その勢力は北海岸一帯に擴がり、蘭

領だけでも五萬の信徒があると云はれ、ヘルフィンク灣の沿岸ワシオールに設けた神學校ではパプアの布教師を養成してゐる。又濠洲領では一八七〇年、ロンドン・ミツションが傳道を開始し、ポート・モレスビーを基地として勢力を擴大し、既に七萬の信徒を獲得したと云はれ、又元獨領ニューギニヤでは一八六六年以來、布教を始め、現在十萬の信者があると稱せられる。彼等宣教師は未開人の中に入り、幾多の困苦と戦ひ教化に専念した、又彼等のうちには人類學や言語學の研究をなし、學界に貢献した者も尠く無い。

舊教は一八四五年、既にローマからニューギニヤに宣教師を送つたが、惡疫の爲に仆れ、或は虐殺の非運に會し成功を見なんだ。然るに一八八一年、佛人 NAVARRE がニューブリテン島のラバウル近郊に根據を置き、古々椰子園を經營してその基礎を固め、着々とその勢力を伸展してゐる、而して蘭領にあつては一九〇五年、南部のフレッドリック・ヘンドリック島及び南岸地方に手を染め、學校經營により兒童の教化に力を注ぎ、古々椰子園と製材の經營をなし、根強き根據を有してゐる。如此キリスト教がニューギニヤ全人口の五分の一にも近い數に上ぼつてゐることは、たとへそれが過大な報告とは云へ、彼等の生活に大なる變化を及ぼしたことは云ふ迄もない。

最後に言語である、パプアは種族により夫々獨特の言葉を有するも、交通が開けて外來人と接觸するに連れ、馬來語が通用語となりつゝある、馬來語は西はマダガスカル、東はイースター島に

及び、元、スマトラのメナンカバウから起つたと云はれ、母語としてはスマトラと馬來半島の一部に用ひられ、その他の地方は蘭領東印度に關する限り、如何なる僻諷の地にも浸潤して共通語として用ひられてゐることは、和蘭の巧妙な殖民政策の現はれである。馬來語中、不思議にも、日本語と同音同意義のものか、偶然の一致であるのか可なり多く、又母音を以て終るから其發音も仕易い。同地方に旅行する者はその修得を必要とする。

(二) 動物

私達、植物採集がその目的であつても異境の森林に入り、或は山に登り、或は川を渉る際、吾々がそこに遭遇する動物に對し、無關心たり得るものではない、吾々に動物の智識は無くとも、一行の話題は何日も植物よりも動物に花が咲いた、私は動物に關し豫備智識さへ無かつたことを甚だ遺憾に思ふ。

ニューギニヤは前世紀の後半頃から、單獨の探檢により動物の智識が漸く進められた、就中、ワリス (A. R. WALLACE) の貢獻が今もなほ讃へられてゐる。本世紀になつてからは大規模の探檢が幾度か行はれ、動物學上の新事實が次第に明かになつた。

(1) 獸類

ニューギニヤの植物が濠洲と其類縁が薄弱であることは前にも説明したが、反之、動物は濠洲と極めて近似する。其多くは古い型のもので新しい型は少い、哺乳動物中、猿類、有蹄類、食虫動物、齧齒類を缺き、猛獸が棲息しないことは其特長である、古い型にはアリクヒと云はれるハリモグラ (*Echidna, Zaglossus*) 及び有袋類がある、前者は體に刺があり、細長い嘴を持つて居る。ニューギニヤに有袋類の多いことは濠洲と同一である、此内カンガルー(土名ラウラウ)はその尾を支へとして直立する不思議な姿態が、古い昔から知られて居た、その種類は甚だ多く、今回の探檢旅行でも數匹を射止めた、樹上に棲息する有袋類は特にその種類に富む様であり、有名なクスクスもその一つである。面白いことには、我々が植物標本を採る爲、大きな樹木でも伐り倒すと、土人は直に梢の方に走つて行き、樹の枝に隠れて居るであらう此有袋動物を探す、捕へて來れば彼等は夕餉の食料にする。此樹上の有袋類には鼠位のもが多い、所謂、袋鼠かも知れぬ、この類の一種を私は内地迄持ち歸つた、その袋は極めて小さく、幼兒がこの袋に這入り得るものとは考へられぬ、或は退化したのかも知れぬ、果して然らば同じ有袋類でも袋の中に幼兒を入れるものと、入れぬものとがあるのでは無いか、今もなほ疑問に考へてゐる。

(2) 鳥類

禽鳥類は最も人目に着き易く興味も亦深い、その種類は甚だ多いに違ひ無い。鳥類學者の説明



No. 194 黄 極 樂 鳥 $\times \frac{2}{5}$ (原圖)

によると、ニューギニヤは密林で覆はれてゐるに拘らず、キツツキが居ない、又獵禽は雪山地方に、なほ種名不明の雷鳥が棲息する以外、全く産しないらしい、反之、馬來地方に稀な鶉類、例へばツカツクリ鳥 (*Megalyodius* 屬) が甚だ多く、濠洲と共にその分布の中心をなしてゐると云ふ。此他翡翠類の美しい鳥が少く無い。

(a) 極樂鳥

鳥のうち最も有名なのは極樂鳥である、濠洲やモルッカ群島にも多少産するが、ニューギニヤの特産と云ふてよい、ワレースの名著「馬來群島」中、極樂鳥の記事に讀者は誰しも興味を感じるであらう。實に極樂鳥はニューギニヤで最高度の發育を遂げ、其雄は一般に美しい羽毛を有し、古くからバプア土人の狩獵の目的物となり、高い値段で歐洲に輸出せられ、遂には「極樂鳥狩」の職業者が、政府の特許を得て危険を冒しながら蕃界深く、鐵砲で亂獲するに至つた、殊に蘭領ニューギニヤの東南、メラウケは其中心で、一九一九年頃、其全盛を極め、「大極樂鳥」一羽の相場が六磅十五志の最高記録に騰貴し、此鳥の成金時代を出現した、當時「極樂鳥狩りの後から和蘭の三色旗が進んだ」とさへ云はれた程であつた。

然し、亂獲の結果、極樂鳥は漸次に減少するに至つた、政府は一九三一年、遂にその捕獲と輸出とを禁止し、違反者には莫大な罰金を課する様になつた。十六世紀の頃、歐洲の航海者が香料を

求めてモルツカ群島に來た時、アンボン、タルナテの土人はニューギニヤで手に入れたこの鳥の乾皮を彼等に贈つた、萬里の波濤を越えて來た冒險男も、この鳥の美しさに嘆美の聲を惜まなかつたと云ふ。馬來人はこの鳥を *Manuk dewata* 即ち「神の鳥」と云つた、然しポルトガル人は剝製にした極樂鳥に脚が無く爲、*Passoros de Sol* 即ち「陽の鳥」と稱へた、この鳥の剝製が歐洲に齎せられた時、人々はその美を感嘆し、やがて歐洲婦人の帽子の裝飾用として流行するに至つた。

極樂鳥はその種類が甚だ多い、然しニューギニヤから商品として從來歐洲に輸出せられた種類は次の黄極樂鳥である。

黄極樂鳥 *Paradisaea minor* G. SHAW

馬來語の *Brong kunin* (黄色鳥) で最も多く、又最も美しい種類であり、私達がアンギ湖探検の途上、その一群の舞踏を見たのはこれである、全體に紅色が、つたチヨコレート色で、翼の下に附着する黄色の細い房々した胸毛が特に美しい、二本の圓い針金の様な眞直の長き尾が「極樂鳥」としての特色をなしてゐる。

この極樂鳥と外觀は似てゐるが、二本の細長い針金狀の尾が多少扁平、且つ波の様に彎曲してゐる種類は、ニューギニヤの西方、ワイジヨウとバタンタ島にのみ知られてゐる *Paradisaea rubra*

DAUD. である。又アルー群島(ニューギヤの西南)固有の極樂鳥で、この類の最大のものといふ *Paradisaea apoda* L. は一七六〇年、リンネヤスが脚の無い標本を、タイプとして命名したものであり *apoda* は即ち「無脚」の意味である。この鳥は羽毛の色やその他の形が前記黄極樂鳥に酷似してゐるが、體が凡二倍もあり、その胸毛が粗である爲、區別する。

極樂鳥の美しいのは總べて雄鳥に限られ、雌には何等の特長もなく、この鳥の "*Sacale!*" (舞踏群) は交尾期前の舞踏で羽毛は最も美しくなる。黄極樂鳥は森林中特種の樹木、即ちその樹木は成るべく伸長した枝を有し、鳥の群が嬉戯して自由にその美しい羽毛を誇示することの出来るものを撰び、十羽乃至二十羽の雄鳥が群をなしてその翼を揚げ、絶えず體を振動しつゝ戯れる、それが次第に興奮すると兩翼を眞直に立て、枝から枝に小さきみに飛翔する運動は、小枝を波の如く揺がし、その光景は誠に極樂鳥の名の如く人をして恍惚たらしめる、土人はか様な樹木を豫め捜し求めて置く、鳥は何日かは必ず同じ樹に飛んで來るから容易に捕ることが出来る。土人は早朝、此樹の枝に椰子の葉で出來た隠場に身を潜め、鳥の來るのを何時までも待つ、いよく鳥がやつて來ると先端に圓錐形の木を着けた矢で狙を定めて射つ、鳥はその木の打撲で氣絶し地上に落下する、下で落ちるのを待つてゐる少年は、之れを捕へて羽毛を損せぬ様に壓殺する、他の鳥は之れに氣付かず猶舞踏を続けるが次から次に射落され、遂には氣が付き始めて驚いて飛び



No. 196 王極樂鳥 1/2 (原圖)

此極樂鳥は形は小さいが最も美しい種類で學名を *Cinnyris regius* (L.) と云ふ、馬來語の *Brong rajah* や King bird of Paradise と呼ばれてゐる、羽毛は緋の衣の様に美しく、胸には瑠璃色のバンドを巻き、總べて金屬性の光澤がある、又兩翼の下には灰白色で先端に綠色の羽毛があり、平常は翼の下に蔽はれてゐるが舞踏の時には之れを擴げ、肩の上に美しい半圓形の扇状をつくる、又尾の中にある二本の針状毛の末端には濃綠色、螺旋狀の平圓をなした附屬物を有し、その美しさを一層引立たしむるものがある。私達の旅行中、プミ川を丸木舟で下る際、岸邊の樹の枝に一羽の此鳥が恰も花と見紛う様に止まつてゐたが、近よると直に森の中に飛び去つた。以上の外になほ二、三の著名な極樂鳥を紹介すると次の通り。



No. 195 黃極樂鳥の舞踏 (或寫眞)

世人はこの鳥を「死に至る迄太陽に向つて飛翔し靜止することをしなない靈鳥」と考へ、「太陽の鳥」とか「極樂鳥」とか稱へて來た、幸、極樂鳥の皮は丈夫で厚い爲、土人の

亂暴な假剝製でも立派に仕上がつたのである。
王極樂鳥

去る。パプアは鳥の腹を割き内臓を取り出し貝灰の粉末を内部に塗り、兩脚を切り落して乾燥し商品として市場に出した。ポルトガル人がこの鳥を入手した時には「無脚」の極樂鳥ばかりで、



No. 198 超美極樂鳥 (×1/2) (原圖)

は青色で鱗状をなしてゐる、更に頸部には純青緑色の稍硬い羽毛が楕形の形に生え、脇腹まで延びてゐる、この鳥の最も特異な飾は頭の後方から脊中に簀を着せた様な羽毛である、天鵞絨の如き黒色を呈し、光線の反射工合で青銅色或は紫色に輝いて来る、この大きな楕形の羽毛が喉の同じ形の羽毛と共に隆起すると體は著しく大きくなり、その外觀は全く別の相貌に變つて来る、この鳥は鳥頭^{キヘ、ヒョウ}地方の内地に棲息するが稀である。

華麗極樂鳥

(*Diphyllodes speciosa* Bodd.)

此の鳥は前者よりは稍小さい、頭部



No. 197 六箭極樂鳥 1/2 (原圖)

六箭極樂鳥

一名金色極樂鳥 (*Parotia scarpensis* Bodd.) はその大きさ鳩位で、一見黒色の様であるが光線に當ると青銅色か又は深紫色に反射する、喉及び胸部にある鱗の様な羽毛は、光線の反射工合で綠色又は青色に見える、又頭の兩側からは六本の不思議な羽毛が後方に突出してゐるので六箭極樂鳥の名が起つた、是は針金の様な細い線状羽毛で、その末端に楕圓形の翔がある、又胸部兩側にある柔い房状の羽毛は隆起すると全く翼を隠し、鳥は二倍もの大きさに見える。

超美極樂鳥 (*Lophorina superba* Vieill.)

超美極樂鳥も亦その羽毛が全體に黒い、然し仔細に觀察すると金屬光澤の美しい鳥である、大きさはモヅ位であらうか、その頸部の羽毛は綠色又



No. 199 華麗極樂鳥 (×1/2) (原圖)

は天鷲絨の如き褐色の羽毛に蔽はれ、又頸背部にある半圓狀の羽毛は黄色であり、脊部の羽毛は橙褐色、翼は薄い橙黄色、胸部の羽色は紫色の反射を有する濃綠色、胸部の中程には鱗狀羽毛の廣い帯がある、尾の中央から二本の細い羽毛が抽出し、内側にだけ翔があり、外部に彎曲して二つの輪を畫いてゐる。

十二線極樂鳥 (*Scleroides nigricans?*)

尾に十二本の針狀毛を有する相當大きな鳥で、全體黒味がかつた羽毛だが、濃い青銅色に光澤のある莖紫色、又は紫色を混へた美しい鳥である。

以上は重なる數種だが、極樂鳥はその屬だけでも十數を算すから、その種類は蓋、夥しい數に上ぶることであらう。

(b) 王冠鳩

極樂鳥に亞

ぎ珍らしいの

は王冠鳩

Goura coro-

nata (L.) 也

ある。土名を

マンブロツクと云ふ、*Goura* 屬に屬し、ニューギニ

ヤ及び隣接諸島に限られ凡五、六種を算し、各々の

固有の地域に棲息するが雜種も少く無い、名の示す

如く扇を擴げた様な羽狀の冠毛を頭上に備へてゐる、又扇鳩

と稱するのは *Goura beccarii* SALVAD. で三角形の冠毛を備へ

てゐる、此等の冠毛は婦人帽子の裝飾用として古くから高價

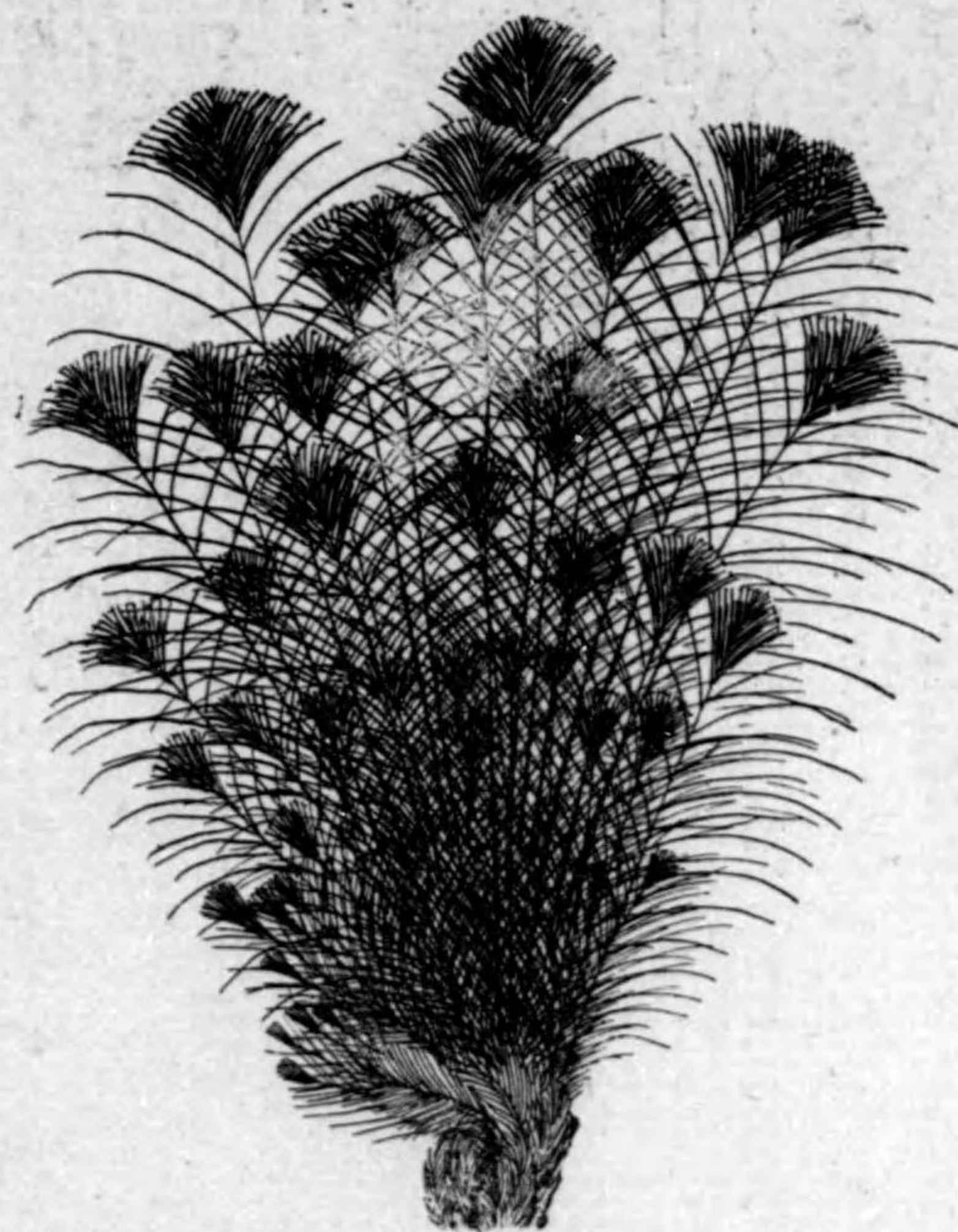
に賣買せられた、大きさは何れも家鶏の一倍半位で、紺色の

羽毛に白色の班點がある、叢林中若くは林縁、河岸の林に棲



No. 200 王冠鳩 (×1/3) (原圖)

み、遠く飛翔せず、禁鳥ではあるがその肉が美味なる爲、森林中で捕獲食用に供するには豫め地方官憲の了解を得て置けば差支へが無い。



No. 201 扇鳩の冠毛 (×1/2) (原圖)

(c) 扇鳩類

扇鳩類はニューギニヤに極めて多い、前記、ワレースの著にもある様に最も有名なのは土名ラジャヤ・カガツ1即ち一名「黒扇鳩」とも呼ばれる *Microglossus alerivus* WAGL. で、全體は黒色、咽喉の部分が紅色、又その舌は深紅色、圓筒形、體は細長く見える、カガツ1中の最大のもので、下嘴には特に大きなグラインダーを備へてゐる、ワレースは始めてこの鳥を得た時非常に喜んだ。氏はその形状と習性とを次の様に記してゐる。

「稍小さな孱弱な身體は長く、弱い脚と、大きな翼を有つてゐる、頭部は異常に發達し、著しく大きな鳥冠で飾られ、巨大にして強力な尖端の鋭い釣状の嘴を以て武装されてゐる、森の低い處を一羽又は多くとも二、三羽で、音もなくゆつくりと飛翔する、僅の傷でも死ぬる、カナリユムの樹實を最も好み、重い槌で叩いても割れぬ様な堅い實を巧みな方法で食べる」。

私達がこの鳥をナビレの山奥で見たことは前の日記にも記した、その頭部の冠毛を立て、颯爽として枯木の枝に止まつた雌雄が互に戯れてゐたのは壯觀であつた。

この他、羽毛が白色で黄色の冠毛を有する體の大きな扇鳩 (*Caetua triton*) は到る所に多く、朝夕、森のあちこちに騒がしい大きな唳聲で飛んでゐた、又羽毛が五色に彩られたルリ鳥はその種類多く、特にヘールフィンク



No. 202 扇鳩 (小林氏)

灣の北部にある島々には人眞似の巧な種類を産するので有名である。

又インコの大形のものゝ學名を *Felchus pectoralis* (St. Muell.) と云ひ、その羽毛の濃赤色な



No. 203 黒オーム(×1/2)
(ワレス: 馬來群島)

のが雌で、緑色なのは雄である、特に濠洲ニューギニアに多く、ラバウル地方の山中では群をなして飛んで居るのを見たことがある。

(d) 犀鳥

犀鳥即ち馬來名歲鳥フロンクランは南アジャ、馬來地方に多い、ニューギニアに棲息するのは *Phalacrocorax*

phicatus が東漸したものである、その大きな羽を「汽車の煙」の様な音で羽搏しながら森から森へと飛んで居た。

(e) 火喰鳥

火喰鳥 (*Cassidix* 屬) 即ち「カソワリ」は密林中に相当多く棲息してゐるらしい、砂漠に棲む駝鳥と同じ様に翅は全然退化して用をなさず、兩脚は太い枯枝の



No. 204 犀鳥(歲鳥) (小林氏)

如く強健で叢林中を疾走して居た、此鳥の長い頸の前の附着物は種類の識別となると云ふ。又脚の筋は乾燥すると白色、半透明、支那料理に珍重せられて居る、卵はオリーブ色で楕圓形、兩尖、長さ十二糎もある。

(3) 爬虫類

爬虫類はニューギニアではその種類が多いと云はれるが、目に付いたものは尠かつた、土名「カキアンパ」と稱する蛇と、トカゲの中間の形をした有毒のものや、ヤモリ、トカゲなどがあ

り、森には小さなカメラオンも居た。

鱷

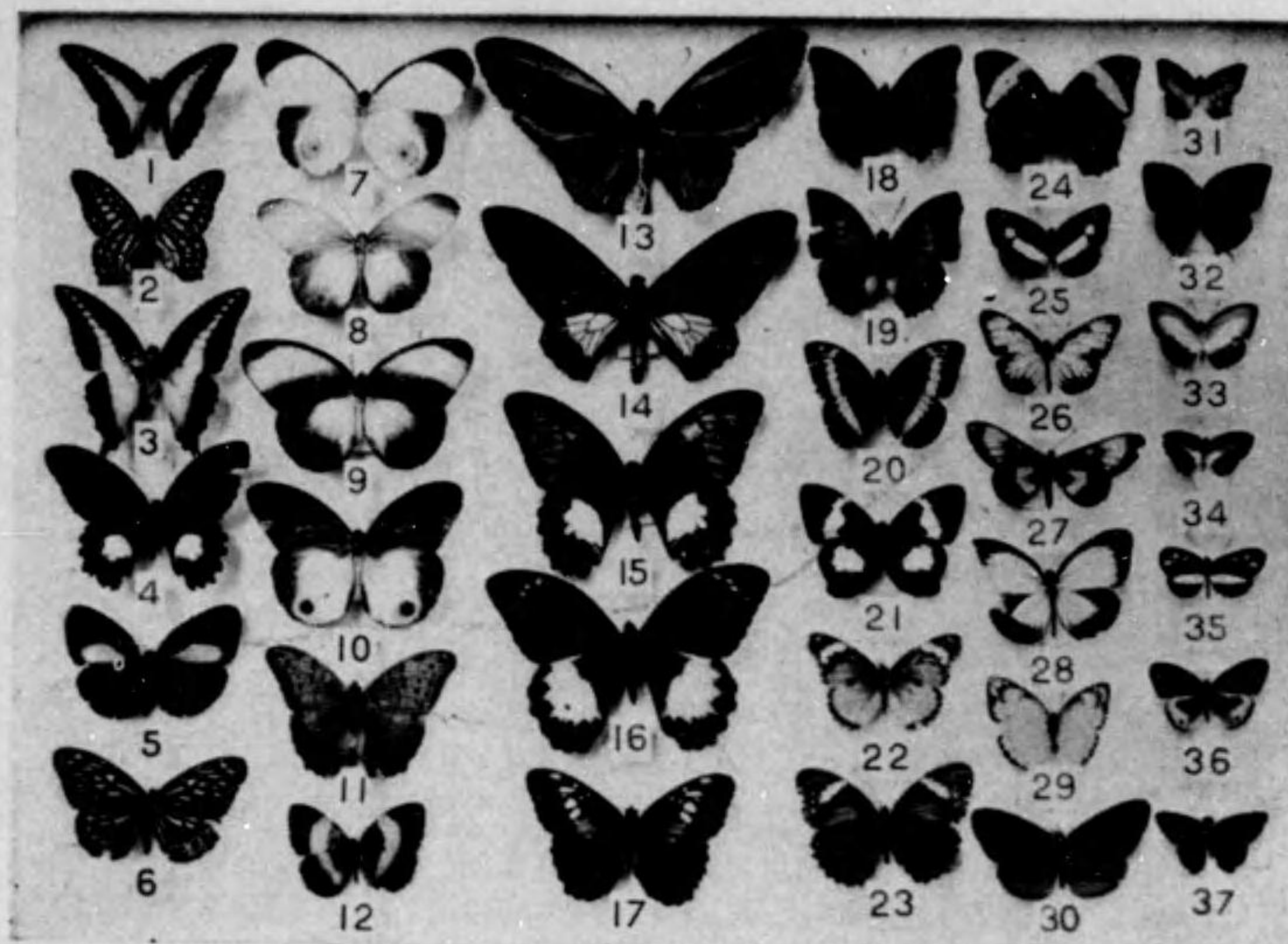
鱷も相當居るが目撃する機會は無かつた、印度、馬來産と同じ種類である。

蛇

ニューギニアに蛇の類が比較的知られて居ない理由として、土人は蛇に對し異常な恐怖を有し、採集する機會の少いことが擧げられてゐるが首肯出来ない。毒蛇類も既知種は少いが最も普通のものは *Acanthophis antarctica* WAGL. である。コブラはゐないが、これと近似のものがニューギニアの特産となつてゐる。

カヘル

兩棲類や眞正のカヘルは僅に存在し、ヒキガヘルには固有のものが少くない。



No. 205 採集した蝶類(番號は322-4頁参照) (江崎博士)

(4) 魚類
魚類中眞の淡水魚は *Saleropages leichhardtii* のみであり、本種はチゴール川に知られ、クインズランドにも産すると云ふ。又陸封魚ではニューギニヤと濠洲との固有のものが存在する。なほニューギニヤには、陸貝で美しいので有名な *Papinia* がある、屢々樹の枝に附着すると云ふ。

(5) 蝶類
私達は植物採集の傍、蝶類も手當り次第に捕へた、山中では一個所に澤山な蝶類に出會することがあつたが、又殆ど見當らぬこともあつた、天候や環境によるのかも知れない。何分専門的の智識がないので捕れた蝶の個體数の多きに反し、其種類は比較的少數であつた。

ニューギニヤの蝶類は海岸や附近の島一帯は割合調査が出来てゐるが、高山地帯のものは殆ど知られてゐない。分布の系統は印度、馬來地方とメラネシヤとが混生し、更に多數の固有型が見られ、濠洲系のものが比較的少いことは、植物の分布區系と同様で注意すべき點である。

ニューギニヤの蝶類中、特記すべきはアゲハテフ、即ち *Papilio* 類中の *Troides* (*Ornithoptera*) で、金緑色の美しい色彩を持つた大形の華麗蝶の一群をなし、特に *T. tithonus*, *T. goliath*, *T. paradisea*, *T. chinavera*, *T. poseidon* は世界では屈指の華麗蝶であり、このうち *Troides poseidon* はナビレの海岸地方に多く數個の標本を得た。ワレーヌがアンボン滞在中、初めて完全な標本を捕り狂喜した種類である。

Troides に亞ぎ、通常のアゲハ屬 (*Papilio*) も異常な發展を示し、多數の種を含み美麗なものが少くない。

シロテフ科では *Elodina*, *Delias* マダラテフ科では *Draus*, *Euphoca* ジャノメテフ科では *Lamprotaenis* *Hypoecysta*, *Elymnias* ワモンテフ科では *Taenaris*, *Morphopsis* タテハテフ科では *Dolichotilia*, *Prohoi*, *Terinos* 等が特に種類が多く、或は特有の屬として知られて居り、全體として非常に豊富なファウナをつくつてゐる。

今左に私達の捕へた蝶の重なるものを掲記する、表の番號は標本寫眞の番號である。
なほ標本の鑑定につきては九大教授、江崎悌三博士の助力を得た、茲に深謝の意を表し度い。

採集した蝶類 (番號は寫眞第 202 圖を参照)

Papilionidae		月	日	採	集	地
番號	學名					
1	<i>Graphium sarpedon messogis</i> FRUHSTORFER	10.	III	ス	リール、モミ	
2	<i>Graphium aganemnon ligatus</i> ROTHSCCHILD	10.	III		"	
3	<i>Graphium colrus meton</i> FELDER	25.	III	ク	ー	ン
15	<i>Papilio aegaeus</i> DONOVAN	1.	III	ク	ダール	ン
16	<i>Papilio woodfordi laevulus</i> GODMAN	23.	III	ク	ー	ン
4	<i>Papilio ambracae</i> BOISDUVAL	24.	III		"	
13	<i>Troides priamus poseidon</i> DOUBLEDAY	25.	I	ナ	ー	ン
14	<i>Troides helena papuensis</i> WALLACE	11.	IV	ク	ー	ン
Pieridae						
29	<i>Catopsilia crocale flavo</i> BUTLER	26.	II	ク	ー	ン
28	<i>Paretonia jobaea luertia</i> FRUHSTORFER	11.	IV	ク	ン	キ
Danaiidae						
5	<i>Euploea usipides</i> HEWITSON	26.	II	ナ	ビ	ン
30	<i>Euploea guertini</i> FELDER	10.	IV	ク	ン	キ
26	<i>Danaus aspasia</i> FABRICIUS	27.	III	ク	ー	ン

6	<i>Danaus molysa</i> CRAMER	21.	III			?
35	<i>Telero zolus fallax</i> STAUDINGER					
Nymphalidae						
23	<i>Cebosisia chryssipe praedabilis</i> FRUHSTORFER	7.	IV	ク	ン	キ
19	<i>Charaxes latona stephanus</i> ROTHSCCHILD & JORDAN	29.	II	ク	チャ	ン
18	<i>Dalmanella dasephus</i> GODMAN	11.	III	ク	ン	ミ
11	<i>Gynthia arsinöe figalea</i> FRUHSTORFER	7.	IV	ク	ン	キ
20	<i>Euthalia aeorpus eutycheus</i> FRUHSTORFER	9.	III	ク	イル・ジ	キ
27	<i>Miyana meyeri</i> KIRSCH	11.	IV	ク	ン	キ
25	<i>Nepitís satina satina</i> SMITH	26.	II	ク	ン	キ
31	<i>Symbrenthia hippodamus hyalaus</i> WALLACE	11.	IV	ク	ン	キ
17	<i>Parthenos tigrina tigrina</i> VOLLENHOVEN	5.	III	ク	ン	キ
21	<i>Prothoe australis heuissoni</i> WALLACE	9.	III	ク	イル	キ
12	<i>Yona algrina vestina</i> FRUHSTORFER	26.	II	ク	ン	キ
22	<i>Hypokimmas misippus</i> LINNÉ	25.	II		"	
Satyridae						
24	<i>Melanitis amabilis valentina</i> FRUHSTORFER				"	
36	<i>Mycalesis duponchelii kapoura</i> FRUHSTORFER	7.	III	ク	ン	キ

Anathusidae			
8	<i>Taenaris laivia amella</i> STICHEL	7. III	セ
7	<i>Taenaris atlops appina</i> FRUHSTORFER	7. IV	ア
9	<i>Taenaris rollechidi merana</i> FRUHSTORFER	7. III	〃
10	<i>Taenaris onodus saturator</i> FRUHSTORFER	11. IV	〃
Lycenidae			
32	<i>Amblypodia hercules leo</i> DRUCE	11. IV	ア
34	<i>Thysonotis drucei</i> SMITH & KIRBY		ン
33	<i>Thysonotis phlostratus</i> FELDER	6. III	バ
Hesperidae			
37	<i>Haemora discolor</i> FELDER	10. III	ス
			リ
			ー
			ン
			ル

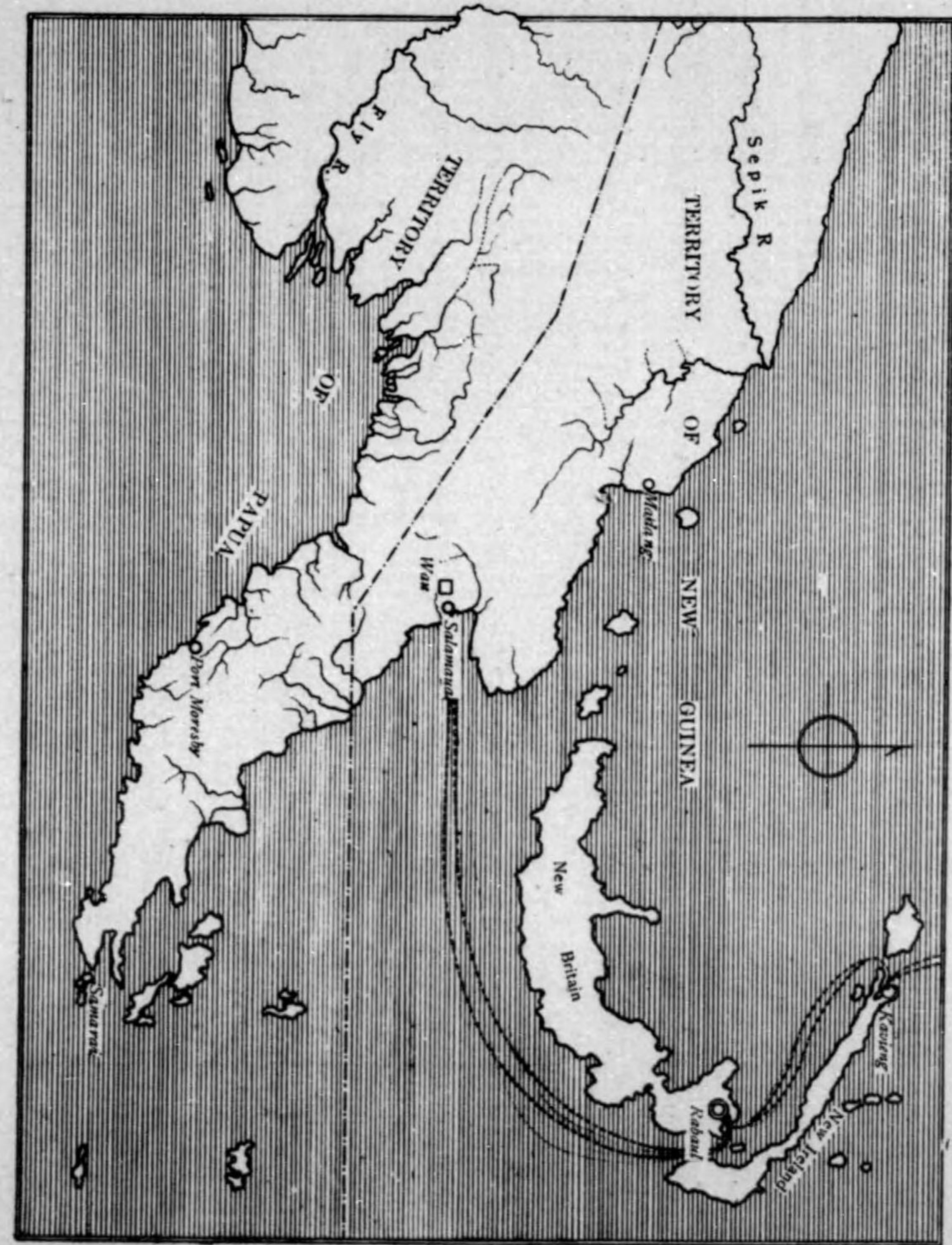
(三) 産 業

注意—俗に「英領ニューギニヤ」と云ふはニューギニヤ島の中央を貫通する東經一四一度以東の地域である、更に精確に云ふならその北半は「Territory of New Guinea」で、現在は濠洲委任統治下にあり、本書には「濠洲ニューギニヤ」とした。又南半は「Territory of Papua」で本書には「バプア・ニューギニヤ」となしこの兩地域全體を「濠洲領」と記した(次頁地圖参照)。

(1) 鑛 産

ニューギニヤの産業中、最も重要視せられて居るのは鑛物資源であり、この内、金と石油とが特に探査の的となつて居る。ニューギニヤの金鑛探査史は興味の深いものがある、今その概況を述べて見やう。

「ニューギニヤに金が出る」と云ふ語り傳へは既に十六世紀、此島の發見當時から續いたが、誰れも關心を寄せる者は無かつた、然し一八七七年頃から、金の評判が誰れ云ふと無く高まつて來た、それは前獨領即ち現在の濠洲ニューギニヤで、一八八八年頃から、その發掘が始まつたが思はしく無かつた、一八九六年、獨逸ニューギニヤ會社は、ラウテルバツハ博士(Dr. LAUTERBACH)を探檢隊長とし、ラム河の西部地帯を探査したが成功するに至らなんだ。廿世紀の初頭になつて獨逸人や濠洲人はモロベ、即ち現在のサルモアの奥地に探檢したが、是れも兇惡なバプアに



No. 206 濠洲領ニユーギニヤ地圖、點線は日本船の航路(現在中止) (原圖)

前進を阻止せられ失敗に終つた。

然し此附近に金鑛が存在することは種々の事情から次第にその確實性を増し、幾度か探検が敢行せられた、中にも濠洲人クラウエ及びダーリング (M. Crowe, A. Darling) 及び「鯨の目」(Shark-eye) の綽名のあるパーク (Park) は獨逸官憲の目を盗んで、極樂島を獵する如く見せかけ探検に出掛けた、途中でその計畫が曝露し、追はれて逃げると云ふことも一再ならずあつた。

然るに一九一三年、前記のダーリングはマークハム河を遡江し、プロロ河床に採算の取れる金鑛を発見するに至つた、然しその時歐洲の大戦が勃發したので此附近一帯の所謂「モロベ金鑛」は手を着けることが出来ず、その儘放棄の状態になつた、大战が終ると金の探検熱が再び高まつた。

所がダーリングが折角発見した金鑛地は、數年間顧なかつた爲、その所在地の再発見が容易では無かつた、然し前記の「闘士」と云ふ名で知られた「鯨の目」のパークが幾多の冒險の後、一九二一年の終り頃、その不明の箇所を突き止める事が出来た、現今のコランガ・クリークである、パークは之れを公表せず、數年間秘密にして置いたが幾多の探検者が徐々に入り込み、遂に一九二六年二月、濠洲人ロイヤル (W. G. Royal) グラッソン (R. M. Glasson) の二人がマークハム河上流、即ちプロロ川の源頭、海拔六千五百呎の地にヤード、英貨二拾磅もある、含有率のすば



No. 207 サルモア港：山の背後にワウの町がある (金平)

らしい金鑛を発見した、今日有名なエデー・クリーク (Eddie Creek) である。

此発見が一大センセーションを捲き起したのは自然で、眞のゴールド・ラッシュが始つた、濠洲からも、ラバウル(ニュー・ブリテン島)にあり、濠洲(ニューギニアの首府)からも續々と山師が集つた、然しこの山師の前には一大障壁が横たはつて居た、即ち金鑛の所在地は高山地帯で、海岸からこの地に達するにはパプアの襲撃を受ける危険と、降雨による困難と疫病の流行があり、然もその途上、一夜を完全に過すことの出来得る平坦地すらも無い地勢であつた、特に金鑛発見の年の九月に發生した赤痢病は、鑛山業者を全滅せしめ、折角獲得した財を、一朝にして無一物にして仕舞つた、私は先年、これ等の病没者の墓をサルモア港の郊外に訪づれ、その犠牲者の多きを見て創業時の困難を思ひ、淋しい異境に眠むるパイオニヤーの人達に一掬の涙無きを得なんだ。

金鑛の開発には幾多の困難があつたが、これを克服する一人の



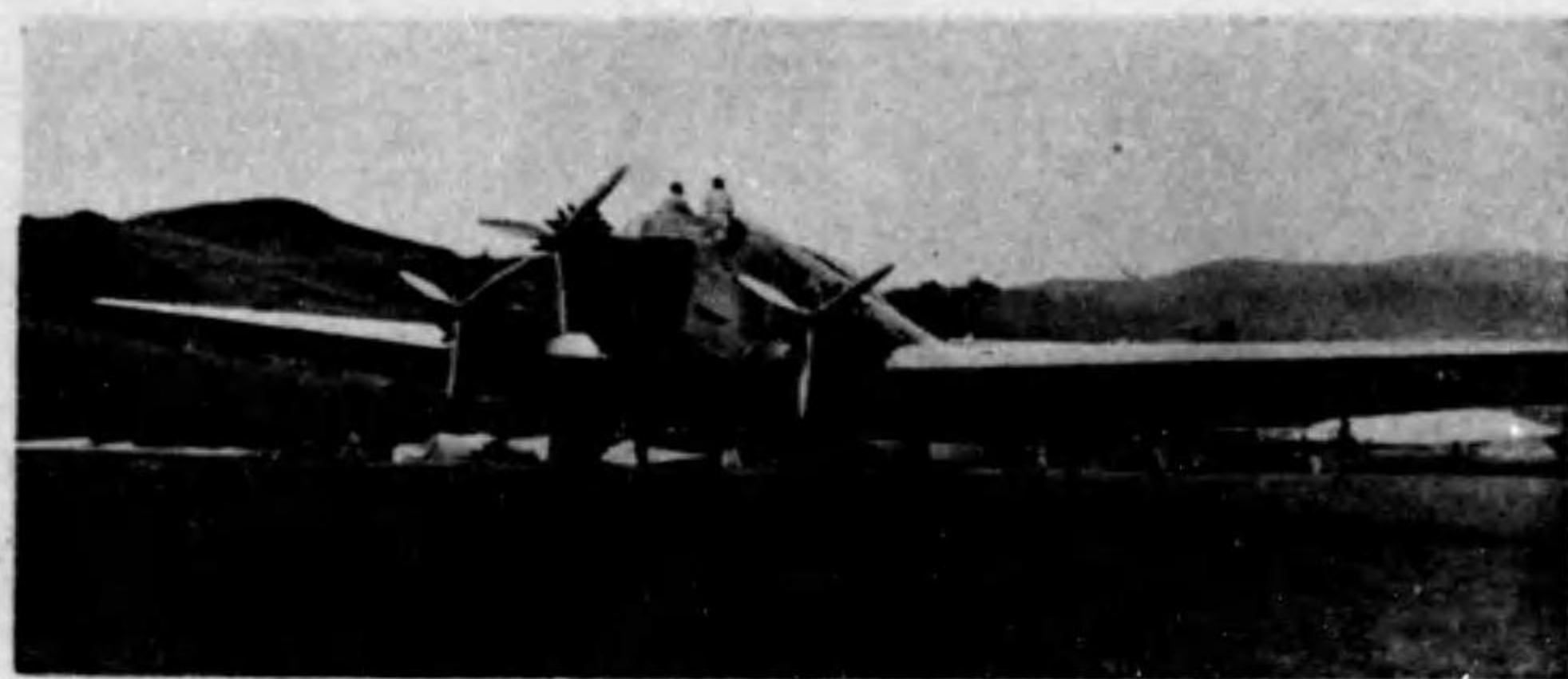
No. 208 ワウの市街、遠方へ見へる芝生は飛行場 (金平)

闘士が登場した、即ちモロベ支廳長レビヤン (Cecil J. Leven) その人であつた、彼はユダヤ

系の濠洲人と云はれ、元、貧乏な百姓であつたが下級官吏から叩き上げ、事務と理財に長じた果斷な人物であつたらしい。

彼は先づ金鑛開発には豊富な資本、大規模の探掘、完備した輸送機關、この三要素が大切であることを主張してニューギニア産金會社を設立し同時に飛行機による輸送を計畫した。

レビヤンが招聘した飛行士は濠洲の島人ムスター (Captain E. Mustar) で、彼は先づ濠洲からラバウルに飛來した後、ニュー・ブリテン島に沿ふて南下し、サルモアの北、ラエに飛んだ、ラエは一九三七年、米國女流飛行家イヤハート女史が飛び立つたまゝ不明になつた飛行場のある處で、世界的にも有名になつたが、このラエから蕃界の上空



No. 209 四トン半の重貨物を運搬する荷物を積み
ユンケル機(ワウ飛行場にて) (金平)

を掠め、ブルボ川に沿ふワウに無事着陸することに成功した、これは一九二七年四月十八日のことで、エデー・クリーク発見の翌年であつた。

飛行機の乗り入れに成功を納めてから、初めて金鑛の扉は開かれ、事業は急速に進捗した、ワウはサルモアから直距離四十哩もあろうか、このワウを根據として近くのエデー・クリークの砂金が近代装備の元に發掘せられ、その産金額は次第に増加し、一九三五年に二百萬磅であつたが現在はその倍額にも達してゐるであらう。

私は昭年十二年ワウを訪ふた、サルモアからワウまで飛行機で僅に十五分位を要するのみ、ワウの市街は海拔五千呎、人家五百内外、金鑛に従事する勞務者の住宅地であり、新聞地としては立派な町でホテルやシネマ館もあり、然もその日常の必需品は一として飛行機によらぬ物は無い、當時大型のユンケル機はドレツジャー、自動車、ピアノ、家畜、鐵管、電柱なども運んでゐた、然し雷管だ



No. 210 ワウの飛行場 (金平)

けは今もなほパプアが擔送して居る筈、毎日四十臺の飛行機が短距離ではあるが、六千呎の山を越えて往復してゐる様は壯觀であつた、此飛行機により當時ですら金鑛その他の貨物一ヶ年六千噸、一萬人以上の乗客を運搬してゐた、その運賃は一九二八年頃、一人の往復賃金三〇磅、荷物は一封度、十二ペンスであつたが現在はその三分の一になつて居る。

プロロ川の金鑛が開發せられて以來、その探査は益々活潑な動きを見せ、現在はセビツク河とフライ河の分水嶺が有望視せられ、多くの探検隊が入込んで居ることは前にも述べた、反之、蘭領側の鑛物探査は甚だ振はない、その原因の一は鑛業法の不備と不適當とに起因する、「砂金の土を皿に入れて洗つただけでも罰せられる」と云はれる位やかましい法律は、鑛業を奨励、助長させるのでは

無く禁止させてゐると云ふても過言でない、然し何時迄もか様な状態に置くことはニューギニア開發の聲が高まるにつれ、識者間にも問題となり、遂に一九三二年、和蘭、蘭印の有力者がヘーグに會し、「ニューギニア委員會」を組織し、翌年から資源の調査を開始し、英濠シンジケートは金、石油その他を採掘し、ニューギニア石油會社（スタンダード四〇%、セル四〇%、アトランチック二〇%）は石油を試掘することになり、現在タナ・メラとバブとが發掘せられつゝあるがその産額は不明である、兎に角、最近石油は蘭領側に於て、頗る活氣を呈するに至つた。

ニューギニアは、内部の交通が長い間、閉ざされてゐる、故に地質調査が未完成であるのは已むを得なく、Dr. J. TWIERZOCKの調査した、蘭領ニューギニア、百萬分の一の地質圖は、一九三〇年出版せられてゐるが、未調査の白地の部分も少くなく、又多少の誤謬があるにしても良くも遂行したものと云はねばならぬ。この地圖の解説書によると礦物資源にも一言し、石油、石炭、金、銀、銅、燐礦等賦存するが現在の處、石油を除いては有望のものは少いとなし、石油は構造地質學上の見地から、本島の南斜面（中央山脈以南）のみが經濟的價值を有し、北斜面では地層が直立してゐる故、構造上石油の噴出は望み薄だと云ふ、尤もこの調査以來、各地の事情が明かになつてゐるから、この説が今日もなほ、成立つと云ふ譯のものではないであらう。

銅は濠洲ニューギニアの東南、ポート・モレスビーに近いアストロラベ山から産出し、一九二

五年頃最も盛で、同年、一萬一千トンを生産したがその價額の下落により衰退した、最近再び勢を取戻したに違無い。蘭領側で有望視せられてゐる地方は鳥頭^{ヘイ、ムンツ}方面である。

石炭は熱帯地では、良質のものを期待出来ぬのが通則とせられてゐるが、鳥頭地方、古第三期層に良質（八百カロリーに近い）のものが發見せられてゐるから絶望ではないと云はれる。

この他、蘭領では恒雪帯地方に金、銅、錫の望みがかけられ、最近ウイツセルにより發見せられたウイツセル湖の周邊も亦探査の中心となつてゐる。

(2) 農 産

ニューギニアには農業と稱すべきものが無い、しかしパプアの食料が全く天然の樹實にのみ依存してゐる譯でも無い、野生植物として最も大切なのはサゴ椰子（*Metroxylon* spp.）である、この植物は海岸の低濕地帯にのみ生育するから、これを食料とする者は限定せられてゐる。

パプアの最も普遍的な栽培作物はヤム（*Dioscorea* spp.）、タロー芋（*Coccosia esculenta*）、バタタス（*Ipomoea batatas*）である、メラウケ地方の低濕地では古くからタバコカが栽培せられ、その東方の爪哇人の植民地では家畜を養ひ、玉蜀黍、ピーナツが植えられ、又西部ニューギニアには肉豆蔻が少額ながら産出する、この他、北海岸のアンベバケンには陸稻、アンギ湖には野菜が出来る、又マヌコワリや東部のセンタニ湖は早くから開けた爲、野菜類の外に珈琲、カボツク、

綿花が産出する。

蘭領ニューギニヤでプランテーションと見做すべきは僅少の古々椰子園の外に、ランシキの官營ゴム園があるのみ。同園は目下七百餘町の植付けを終つてゐるが、更に擴張せられるであらう、然るに我南洋興發會社が昭和三年、ナビレの山中に、獨逸フォニックス會社からダマルの採集權を買収、更に一九三七年以來、モミとサルミに各九百町歩（外に三百六十町の永代租借地）と、外に三百町の租借地を得て農場を經營しつゝあることは特筆すべきである。

濠洲領ニューギニヤが、白人以外の移民を禁止し、門戸を閉鎖してゐるに比べ、蘭印がニューギニヤの一角を解放して呉れたことは重大な意義がある。

(3) 林産

極樂島、マツツヤ、ダマルはニューギニヤの森林から産出する主要産物であつた、然るに極樂島が往時の如き流行から衰れたのみならず、一九三二年、採集と輸出とが禁止せられる様になつてからは、他の林産物は寥々たるもので前記二種の外、木材、サゴ、僅少のタンニン原料があるに過ぎぬ。このうち木材は最も有望な産物で、各種硬材の外、パルプ資材としても適當の樹種が少くない、將來日本が要求する資材の給源地たるに至るであらう。

(4) 海産

ニューギニヤの海産物の主なるは鼈甲龜、正覺坊、ソウダガツヲ、イワシ、眞珠貝、高瀬貝、夜光貝、海鼠等である。

正覺坊 (*Chelonia mydas* (L.)) は其肉を利用し、鼈甲龜 (*Chelonia imbricata* (L.)) は名の

如く所謂鼈甲をとる、その優良品は大陸の附屬島、南モルツカ群島のタニバ島附近で捕れるものである。

ソウダガツヲ (*Scorpaenopsis commersonii* (Lacép.))

はワイジョー島サオネツクが漁獵の中心となつてゐる。

イワシは *Clupea* 屬 *Amblygaster*, *Harengula* の亞屬に屬するものが多い。

貝類中眞珠貝は濠洲領ニューギニヤに多く、高瀬貝

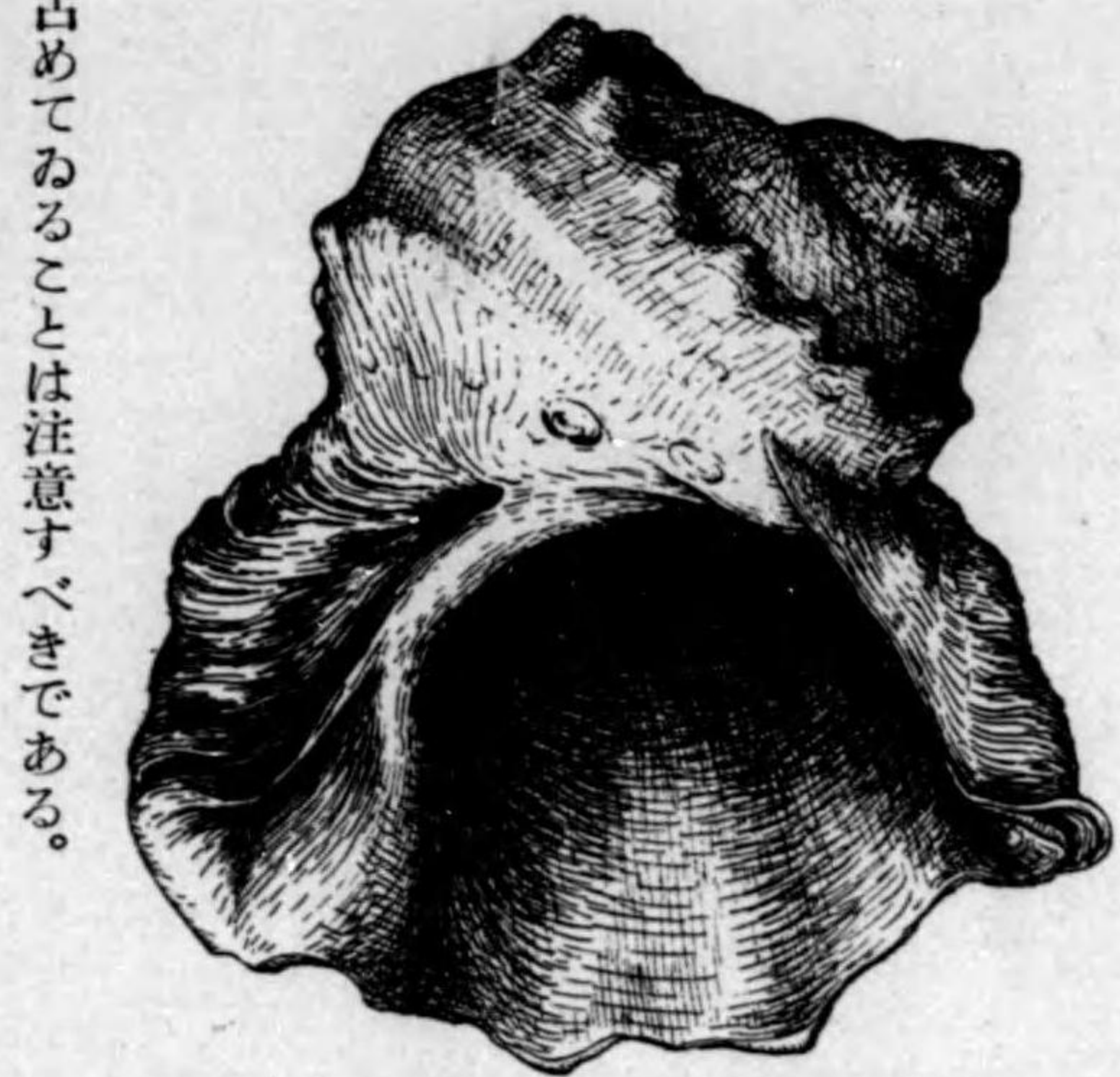
(*Trochus niloticus* L.) は鳥頭の北部とパラオとの中間、

マビヤ島附近が有名である、夜光貝 (*Turbo marmoratus* L.) と共にボタン細工の材料となる。

海鼠はその種類が甚だ多い、*Sichopus*, *Muelleria*, *Holothuria* の諸屬のもので、煙製又は乾燥して支那に輸出する、その品質により價額に格段の差がある。



高瀬貝 (×1/3) (原圖) No. 211



No. 212 夜光貝 (×1/2) (原圖)

ニュージーニヤの産業はアジア熱帯中最も開發が遅れ、特に蘭領ニュージーニヤは濠洲領ニュージーニヤに比し、遙に立ち遅れの状態にある、一九三六年、蘭領ニュージーニヤの輸入は百三十六萬三千盾、輸出九十四萬九千盾、合計二百三十一萬二千盾、之れに對し濠洲領ニュージーニヤは輸入百二十一萬八千磅(一九三四年)、輸出二百六十三萬六千磅(同上)、合計三百八十五萬四千磅で、過去三十年間、蘭領は七割を増加したのみであるに對し、濠洲側は凡十倍の躍進振りを示し、このうち前獨領ニュージーニヤが、増進の大部分を

占めてゐることは注意すべきである。
コブラはニュージーニヤの最も重要な産物で、蘭領は四千五百八十六トン(一九三五年)なるに對し、濠洲ニュージーニヤ(前獨領)は五萬六千二百五十一トン(自一九三四年、至一九三五年)、パプア・ニュージー

ニヤは八千五百七十トンである、尤もこのうちには、大陸附屬の島嶼から産出するものをも加算してあるが、大陸だけに就いて云へば、蘭領は二千三百五十トン、濠洲領は二萬一千トンである。

蘭領と濠洲領との産物の種類は殆ど同一であるが多少の例外はある、ダマルは蘭領から千六百三十六トン(一九三五年)を産出してゐるが、濠洲領は僅に四百九十四トン(自一九三四年、至一九三五年)に過ぎぬ、又濠洲領から象牙椰子の實(*Phytolophus* sp.)二十四トンを出してゐるが、僅少の額だが、蘭領には無い、之れに對し、籐及び肉豆蔻は蘭領から少額ながら輸出するも濠洲領は皆無である。又蘭領側からは木材四百四十五トン(自一九三四年、至一九三五年)、マツヤ樹皮(同上)六十八トンの輸出があるに過ぎぬ。

輸入の大衆は米と雜貨であり、前者は主にサイゴン米である、この他、肉及び魚罐詰、煙草、綿布、金屬製品、ガソリン等がある、我國からは綿布、蠟燭詰、金具類が輸出せられてゐる、このうち土人用の日本製双物は彼等に最も評判が悪く。

貿易が交通の發達と、不離不即の關係にあり、濠洲領ニュージーニヤが距離に於て濠洲に近く、各地に整備した港灣を有してゐることは、自然に船舶の出入を便にし、蘭領側より遙に有利な地位にある、従つて濠洲の大會社 *BURNS PHILIP & Co.* や *CARPENTER Co., Ltd.* の如き、自分の

船舶で貿易に従事し各地に資本を根強く投下して縦横に活躍してゐるが、南領側ではK・P・M線が北海岸に一ヶ月、一往復するの外、他に見るべきものがない。

(四) 結 言

(1) 産業開發

ニューギニアを開發するには如何なる産業が起り得るか、地下資源に就いてはブルボ川のエデ1・クリークの様な金礦が南領にも發見せらるゝかどうか、又豊富な石油礦が見付かるかどうかにより決せらるゝであらう。

鑛業に亞ぎ着手せらるゝのは農林業である、ニューギニア一帯の地勢から見ると、開發の端緒は北海岸、山岳地帯の裾野に展開、分布する肥沃地帯であり、又氣候の溫和なアンギ湖、アマロエ湖一帯も有望であらう、南海岸の低濕地帯は移住に不適當である、又マンベラモ河の上流にある湖原^{メヤフラケ}は一帯の大平野であるが排水の難問題がある。

最近、飛行機により奥地の調査が行はれ、地形や林相は勿論、アガチス、アラウカリヤ、太平洋鐵木の如きその樹冠の形、葉色により樹種も識別することが出来るに至つたから、樹木の種類と發育の状態を知り、農業上重要な諸因子を豫察することが可能になつた、故にニューギニアの

氣候溫和な地にはアフリカ、ケニヤの様な高地帯農業が出来るに至るであらう。

ニューギニアに如何なる農業が適するかは、その土地の環境により決定せらるべきものであるが、一應の試験をする必要がある、南領ニューギニアでは獨領時代に於てニュー・ブリテン島、ラバウルに一大植物園を設け、有用植物の栽培試験と繁殖とに力を入れた、濠洲委任統治領となつてからはその近郊ケラバットに可なり大規模の試験場を設け、ココア、油椰子、コーヒー、果樹類、藥用植物等の試作を行つてゐる、然るに南領側に於ては、前記ランシキの官營ゴム園以外に何等の試験場がない。ニューギニア開發の先驅は何よりも先づ試験場の施設が急務である。

(2) 労働問題

次ぎは労働問題である、南領ニューギニアの面積はスマトラ島と稍等しく、パプア人凡三十萬、一平方キロにつき一人未満の稀薄さであり、勞力不足は一番の大きな悩みである。

隣接の濠洲領ニューギニアは南領とほぼ同一面積で、パプア人三十萬餘(推定なれどパプア領では二十七萬、ニューギニア領では十五萬人)で南領に比し多いが、白人以外の労働者の移住を禁止し、その勞力は全部パプアに依存して居る。その産業は南領に比し格段の差があり、年産七百萬トンのコプラ、二百萬磅の産金の外、林産物も海産物も著しく多い。

濠洲領ニューギニアが南領に比べて開發の進んだ原因の一つは、前者は契約労働者を使用する

ことが擧げられてゐる、即ちパプア人の労働者五萬人中、僅に四千人が自由労働者たるに過ぎず、この他カトリック及びルーテル教會の有する栽培園には三千人の契約労働者が居る。

反之、蘭領側では我南洋興發の農場、ランシキ官營ゴム園を除けば、個人經營の小栽培園があるに過ぎぬ、何れも自由労働者を使用してゐるから、その募集には一方ならぬ苦心を要し、然も労働能率が甚だ悪い。是等の労働者を備ふには、北海岸のワシオールとその離島、ヤツペン島やビヤツク島から、絶えず苦力を募集して補充を計らねばならぬ。又ランシキ官營ゴム園では爪哇の苦力を移入したが經費の關係もあり、又罹病率が高い爲、思はしくない様である。

それでは奥地に居住するパプアを移し、勞力を得れば良いではないかと考へられる、然し山中のパプアの生活は、吾々が想像する様に暇で餘力がある譯では無い、彼等の生活は晝夜を通じて「警戒」である、何時、他種族或は他部落の襲撃があるか豫期出来ぬ、常住、戦争への待機であり、絶えず不安がある、従つて彼等は常に神助を頼みにする、而して神の意思は種々の現象で彼等に示され、これに服従する爲には自分勝手な行動や労働が出来ない、故にこれ等のパプアを農場に連れて来て、労働に従事させる様にする迄には長い時日と忍耐とが必要である。

一日の長ある濠洲領では、パプアに對する訓練がよく行はれてゐる、嘗てラバウル市に滞在した私は街上では巡警、官廳では下級の補助員、看守が夫々の職域に働いてゐるのを見た、その他、

海上に走るランチのエンジニヤとか、自動車の運轉手など、すっかり職場の板に着いてゐた。それにも拘らず、一般のパプアは夜になると特別の許可證を所持せぬ限り、一切の外出が禁止せられてゐる、英國官吏が土人を統御する巧妙さに私は感心したのであつた。

濠洲領ニューギニヤが有色人種(東洋人)を閉め出してゐる理由として、彼等は到底有色人種に對抗が出来ぬ、若し自由渡航が許されるならば、パプアは次第に山奥に逃避するに至り、有色人種の跋扈に委ねられねばならぬと云ふ、しかし蘭領側の理由は必ずしも之れと同じでは無いかも知れぬ、或はもつと深刻な杞憂に基づくものではあるまいか、何れにしても労働問題はニューギニヤ開發の鍵であることを茲に強調し度い。

(3) 移民

ニューギニヤは労働問題が解決出来ぬ以上、その開發は不可能なること上述の通りであり、蘭印政府でも白人の移民は長い間の研究問題であつた、蘭人が小農民として可能なりや否やを試むる爲、先年ニューギニヤ移民協會(V.K.N.G)が設立せられ、移民の世話、土地獲得の相談、補助金の交附、宿泊所、學校經營等の仕事をなし、過去數ヶ年間に、凡三百人の混血兒を入殖せしむるに至つた、此内二百人はマヌワリの南部に、殘餘の百人はホランジャの附近に移住し、エステートを営ましめたがその結果は豫期の如くならず、現存する栽培面積は、總計百ヘクタール

内外、各企業當り平均二ヘクタールとなり、古々椰子、珈珈の外、食料作物として陸稻、玉蜀黍、タピオカ、甘藷、豆類が收穫せられてゐる。

(4) 保健と衛生

ニューギニアの衛生状態は如何、マラリヤは最も普遍的でマンベラモ(一九二〇—一九二二年)及びチゴール河(一九二八—一九二九年)の探検には、兩地方とも相當高い罹病率であつた。マラリヤに對しパプアは小供の死亡率が高く、成人した者は抵抗が大きい爲か、死亡率は低い、然し屢々罹病すると危険な黒水熱を誘發する。マラリヤを媒介するアノフェレス屬は、ニューギニアでは十四種が知られ、就中 *Anopheles punctulatus* var. *moluccensis* は重要で、幼虫は陽光の當る水中に繁殖し、原始林中では發見せられない、然し樹木を伐り開き、陽光が射入する様になると發病率は上ぼる、又大河の沿岸にある森林中には、アノフェレスが多いから注意せねばならぬ、醫者は豫防薬として毎日、鹽規〇・四—〇・六グラムの服用を奨めてゐる。

脚氣は探検中、パプアが白米やサゴのみ食すると發生するが、ビタミンBの缺乏であるからその豫防は容易である、梅毒、淋疾は比較的少い。一九一〇—一九二〇年、マリング族の間には鼠蹊肉芽腫 *Granuloma venereum* 又は *Granuloma inguinale* が猛威を逞ふたことがあり、當局者は一家宛の住宅を奨勵した爲か現在は著減した、現在、多いのはフレッドリック・ヘンドリック

ク島とコモロン島だけである。熱帯地方に多い象皮病、即ちリンパ腺の膨大する病氣は全島に見られ、特に西ニューギニアのペラウ地方に多い、マラリヤと同様、アノフェレスの媒介と云はれる。結核病は比較的少く、苦力小屋の集團生活者中に發生し易い、癩病はホランジャ地方には見ないがワンダメン海岸、マヌコワリ、ソロン地方に見る、天然痘は一九一七年以來その報告が無い。

白人の熱帯地移住が不適當であるとは一般の定説であり、ハンチントンの名著「文明と氣候」中には示唆に富める多くの引例がある、中にも屢々紹介せられる一例として、印度に於ては四代目の英國人が居ないと云ふ有名な事實の如き、「累代衰退」或は又文化的退化の例として、ニューカレドニアとかサモア、タヒチ等の南太平洋諸島に移住した白人の子孫が、土人と同様、或はそれ以下の状態に置かれてゐることなどが擧げられる、然し、是を以て日本人が、白人よりも熱帯生活に適するとか、或は次第に熱帯生活の適應性を増大すると云ふことには、直ちに斷言出来ぬと私は考へる、前記の白人が、熱帯に移住して退化したのは、白人自身の素質が劣り、或は流刑者であつたり、或は島民の耽溺生活に憧憬れ、船から逃亡した水夫達がその大多數を占めたものではなかつたか。バタビヤ大學の Dr. P. M. van WULFFEN PALTHE は「熱帯に居住する白人は衛生に充分注意するなら完全な健康を以て愉快に生活が出来、又熱帯で陥り易い神経系統の病氣に對する最良の豫防は、出来るだけ働くことである」と誠に平凡なことを云ふて居るが眞理で

ある、私の少い見聞に依りても、白人の熱帯地に於ける奮闘振りは、日本の真似の出来ない所もある、白人は保健、衛生に就き無意識に習慣づけられ、この點、日本人はハンデキャップを持つてゐる、たとへ第二世、第三世の日本人が、熱帯生活に適應性を有する體質に變化しやうと、結局は保健と衛生とが大切で、精神的にも肉體的にも、活動力が退化せぬ様に努力することが、最も必要であることを銘記すべきである。

(5) 探 検

ニューギニアの學術探検は、是迄、地理學的、人類學的、地質學的或は生物學的探究を目的として行はれて來たが、この廣漠たる地域に對しては誠にその一小部分に過ぎぬ、今後は學術的の目的のみならず、資源の探検も屢々計畫せられるに違ひ無い、その方法として飛行機が重要な役割を演ずるであらうことは、今迄の經驗により明になつた、探検の方法としては三つの手段が考へられる。

(一) 山地の奥に飛行機の着陸又は着水(湖面を利用)の地點を基地としてその周圍を調査する方法。テラが濠洲ニューギニアの山奥、二百哩の地にあるハーゲン山飛行場を利用した如き、又第三同アーチボルド探検隊がハツベマ湖に着水して周圍を調査した如き、又ウイセツル湖が最近、着水地として利用せられるに至つた如きである。

(二) 飛行機で豫め、調査區域を視察して置き、陸路進入する調査隊に落下傘で食料その他の必

需品を投下しつゝ進む方法である。ドクトル・コリンが、ニューギニアの最高カールステンツ峯に登つたのも、第二回アーチボルド探検隊がフライ川の上流に探検した方法も是に依つた。

(三) 土人を連れ部落から部落へと山地に入る方法で、従來行はれたやり方である、これにつき濠洲ニューギニアの奥地を探検したテラーは、次の様な秘訣を述べてゐる。

ニューギニアを探検するには土人の踏ならした徑を便りに行くべきであり、ジャングルを伐り開いて進む事はそれが近道であらうと、又緩傾斜であらうと不可である、成程ニューギニアは深い森林で覆はれてゐる、然し、南アメリカの森林で見られる様な通過不可能の處は無い、濠洲ニューギニアの南端、サラマイから蘭領の鳥頭迄、土人の通路を辿つて縦斷旅行が出来るであらう。

ニューギニアに於ける旅行のコツは、土人と親密になつて通路を發見し、巧に土人を案内せしむることである、ニューギニアでは部落毎に言葉が違ふから萬能通譯を得ることは困難であり、通譯にのみ便することは不可である、土人はこちらが多勢であり、又用意が周到であれば危害を加へぬが、若し手薄と見たり細みし易いと知ると危害を加へる事がある、然し如何なる場合にも忍耐し、最後の武力壓迫を加へぬことが賢明である、彼等が一度び血を見ると、多少の犠牲は免かれぬであらう。この探検は最も簡單で經費も尠いが、それだけ危険も多いことになる。

(6) 結 び

最近ニユーギニヤの開発が急に喧しくなり、蘭印政府もその必要を知りつゝ、前大戦後の財政不如意その他の關係で、今なほ積極政策を取るに至らぬ、政治機關を一瞥しても解る様に、此尨大な地域を二分洲となし、僅に副理事官各一名宛を駐在せしむるに過ぎぬ、而してこの分洲を監督するのはアンボン駐在の理事官であり、アンボン島からニユーギニヤに至る定期船は、一ヶ月一回で、他は官船が随時に往復するに過ぎぬ、隣の濠洲領ニユーギニヤに比べると誠に雲泥の差である。

然しニユーギニヤは最近、その開発の必要が盛んに叫ばれる様になつた、前記「ニユーギニヤ」の大著が、出版せられたのもその結果の一であらう、本書の結論の一節には、ニユーギニヤが蘭印の防衛上、重要な位置にあることを述べ、日本の南進政策は幻想であり、日本が有史以來今日まで國民の生活上、南洋には何等依存しなかつたにも拘らず、今や南洋を「生命線」として其「覇權」を主張することは平和と秩序を紊すものであると述べてゐる。

このことは最近に於ける蘭印一般の通念であるかも知れぬが、由來和蘭は學術を尊重し、又その矜持を有する國柄であり、學術探檢に對しては理解と同情とを持つて居る、今回、私達のニユーギニヤ探檢に對し、當路の人達が出來得る限りの便宜を提供し、又援助をして呉れた。

私達は、今回多くの資料を持ち歸へることを得た、この貴重な資料を基礎として「暗黒の地域」を幾分でも「開明の地域」たらしむべく努力し度いと考へてゐる。

— 終 —

昭和十七年二月二十三日 印刷
昭和十七年二月二十八日 發行

ニユーギニヤ探檢
正價金貳圓八拾錢



著作者 金平亮
發行者 株式會社 養賢堂
印刷者 米田眞二

發行所 東京市本郷區森川町七十番地 株式會社 養賢堂
振替口座東京二五七〇〇番
配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地 日本出版配給株式會社



919
256

終